跡

# 下 野 Ⅱ 遺 跡

──一一般国道 7 号鷹巣大館道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅱ ──



2010.3

秋田県教育委員会

# 秋田県文化財調査報告書第450集

# 下野 正遺跡

――一般国道7号鷹巣大館道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ ――

2010.3

秋田県教育委員会

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、 先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文 化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を 創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、県北地域においては国道7号の混雑緩和、大館能代空港へのアクセス向上、生活圏中心都市間の連携強化等を目的とした一般国道7号鷹巣大館道路建設事業が行われております。本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道7号鷹巣大館道路建設事業に先立って、平成20年度に大館市において実施した下野II遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、縄文時代の土坑墓群と中世の集落跡が見つかりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所、大館市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

秋田県教育委員会 教育長 根 岸 均

# 例 言

- (1) 本書は、一般国道7号鷹巣大館道路建設事業に係る下野Ⅱ遺跡発掘調査報告書である。下野Ⅱ 遺跡発掘調査成果については、既にその一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報27(平成20年 度)』および発掘調査報告会資料などによって公表されているが、本書を正式なものとする。
- (2) 本書第2図は、国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所提供の1/1,000『大館鷹巣道路平面図』を、第4・5図は国土地理院発行の1/50,000地形図『大館』(平成3年発行)『鷹巣』(平成4年発行)をもとに作成した。
- (3) 本報告書中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票 監修『新版標準土色帳2005年版』を使用した。
- (4) 自然科学的分析は、パリノ・サーヴェイに委託した。行った分析は、放射性炭素 "C年代測定・ 樹種同定・植物珪酸体分析・黒曜石産地同定・土壌理化学分析である。
- (5) 本書は、第4章第1節を宇田川、第4章第2節を山田と巴が執筆した。第5章は、委託した分析成果報告を掲載した。それ以外の執筆と全体の編集は山田が行った。
- (6) 本書を執筆するにあたり、次の方々から御指導・御助言を賜った。記して感謝申し上げます。 板橋範芳 嶋影壮憲 藤沼邦彦 [五十音順・敬称略]

# 月. 例

- (1) 本書に掲載した平面図(遺構実測図)の方位は、世界測地系平面直角座標第X系による座標北を示す。原点(MA50)において座標北から磁北の偏角は西偏10°57′25″である。本文および巻末の報告書抄録記載の経緯度は世界測地系に基づく。
- (2) 遺構名の略号の解説

SQ:集石遺構 SKF:フラスコ状土坑 SK:土坑

 S M : 道路状遺構
 S K I : 竪穴状建物跡
 S B : 掘立柱建物跡

 S A : 柱穴列
 S N : かまど状遺構
 SKP: 柱穴様ピット

(3) 遺構実測図および遺物実測図の縮尺は以下の通りである。

集石遺構・かまど状遺構…1/20 フラスコ状土坑・土坑…1/40

道路状遺構・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・柱穴列…1/50

土器…1/3 剥片石器…1/2 礫石器…1/3 その他…1/2

- (4) 縄文時代早期の土器片は、右から順に内面拓本・外面拓本・断面図の順に並べて掲載した。
- (5) 挿図中の記号・スクリーントーンの解説

	22.50 mily (12.50 mily (2.50 mily)	10000000			###
遺構	現地性焼土	焼土ブロック分布	被熱変色していな	柱痕	
			い構築土、貼り床		
遺物	摂理面、自然面	敲打痕	磨り面	アスファルト付着	被熱変色

# 目 次

序 例言・凡例 目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 はじめに	第3節 出土遺物64
第1節 調査に至る経緯1	1 縄文時代の遺物
第2節 調査要項1	(1)縄文土器64
第2章 遺跡の環境	(2) 石器67
第1節 遺跡の位置と立地3	2 弥生時代の遺物
第2節 歴史的環境5	(1) 弥生土器69
第3章 発掘調査の概要	3 平安時代・中世の遺物
第1節 遺跡の概観9	(1)土師器69
第2節 調査の方法9	(2) 砥石69
第3節 調査の経過10	第5章 自然科学的分析
第4節 整理作業の方法と経過10	I 炭化材の年代測定および樹種同定87
第4章 調査の記録	Ⅱ 灰層の植物珪酸体分析90
第1節 基本層序12	Ⅲ 黒曜石の蛍光 X線分析91
第2節 検出遺構と遺構内出土遺物17	IV 土壤理化学分析95
1 縄文時代	第6章 まとめ98
(1)集石遺構 (SQ)17	
(2) フラスコ状土坑 (SKF)20	
(3) 土坑 (SK) ·····20	
2 古代	
(1) 道路状遺構 (SM) ·····23	
3 中世	
(1) 竪穴状建物跡 (SKI)23	
(2) 掘立柱建物跡 (SB) ·····28	
(3) 柱穴列 (SA)32	
(4) かまど状遺構 (SN)33	
4 柱穴様ピット (SKP)34	

# 挿図目次

第1図	鷹巣大館道路と関連遺跡2	第30図	竪穴状建物跡(SKI2②)53
第2図	工事計画と調査範囲2	第31図	掘立柱建物跡 (SB11①)54
第3図	遺跡の位置3	第32図	掘立柱建物跡 (SB11②)55
第4図	遺跡周辺地質図4	第33図	掘立柱建物跡 (SB29)56
第5図	下野Ⅱ遺跡と周辺の遺跡位置図7	第34図	掘立柱建物跡 (SB36①)57
第6図	グリッド配置図11	第35図	掘立柱建物跡 (SB36②)58
第7図	基本土層位置図13	第36図	掘立柱建物跡 (SB36③)59
第8図	基本土層図14	第37図	柱穴列(SA37・38・39)60
第9図	Ⅲ層上面地形図15	第38図	柱穴列(SA40)、かまど状遺構
第10図	Ⅷ層上面地形図15		(SN4)61
第11図	500分の1遺構配置図16	第39図	かまど状遺構 (SN5)62
第12図	第13~19図の位置・・・・・・35	第40図	遺構内出土土器・遺構外出土土器①70
第13図	100分の1遺構配置図①36	第41図	遺構外出土土器② · · · · · · 71
第14図	100分の1遺構配置図②37	第42図	遺構外出土土器③ · · · · · · 72
第15図	100分の1遺構配置図③38	第43図	遺構外出土土器④ · · · · · · 73
第16図	100分の1遺構配置図④39	第44図	遺構外出土土器⑤ · · · · · · 74
第17図	100分の1遺構配置図⑤40	第45図	遺構外出土土器⑥ · · · · · · 75
第18図	100分の1遺構配置図⑥41	第46図	遺構外出土土器⑦ · · · · · · 76
第19図	100分の1遺構配置図⑦42	第47図	遺構外出土土器⑧ · · · · · · 77
第20図	集石遺構 (SQ6新・旧①)43	第48図	遺構外出土土器⑨ · · · · · · 78
第21図	集石遺構(SQ6新・旧②、SQ10	第49図	遺構内出土石器・遺構外出土石器①79
	• 12) • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	第50図	遺構外出土石器② · · · · · 80
第22図	集石遺構 (SQ17·19·20·22) ······45	第51図	遺構外出土石器③ · · · · · 81
第23図	集石遺構 (SQ35)46	第52図	遺構外出土石器④ 82
第24図	フラスコ状土坑(SKF23)、土坑	第53図	遺構外出土石器⑤ 83
	(SK7 · 21 · 24 · 25) ······47	第54図	遺構外出土石器⑥ · · · · · 84
第25図	土坑 (S K26・27・30・31・32・33)48	第55図	遺構外出土石器⑦・石製品85
第26図	道路状遺構(SM13)49	第56図	植物珪酸体群集と珪化組織片の産状91
第27図	竪穴状建物跡 (SKI1①)50	第57図	剥片(試料番号10)の黒曜石産地
第28図	竪穴状建物跡 (SKI1②)51		判別図94
第29図	竪穴状建物跡 (SKI2①) ······52	第58図	腐植含量とリン酸含量の相関図96

# 表目次

第1表	下野Ⅱ遺跡と周辺の遺跡一覧8	第6表	植物珪酸体分析結果91
第2表	柱穴様ピット (SKP) 一覧63	第7表	原石の蛍光X線分析結果94
第3表	石器・石製品一覧86	第8表	剥片の蛍光X線分析結果94
第4表	放射性炭素年代測定および樹種同定	第9表	土坑 (SK32) の土壌理化学
	結果88		分析結果95
第5表	曆年較正結果88		

# 図版目次

図版 1	完掘後の調査区	図版14	S B113
図版 2	SQ6 · 10 · 12	図版15	S B 29①
図版3	$SQ17 \cdot 19 \cdot 20 \cdot 22 \cdot 35$	図版16	S B 29②
図版 4	SKF23, SK7 · 21 · 24	図版17	S B 36①
図版 5	S K 25 • 26 • 27 • 28	図版18	S B 362
図版 6	S K 30 · 31 · 32 · 33	図版19	S B 363
図版 7	SKP14·15·16·18、SM13	図版20	S A37
図版 8	SKI1①	図版21	S A 38 · 39
図版 9	SKI12	図版22	S N 4 · 5
図版10	SKI2①	図版23	出土土器①
図版11	S K I 2 ②	図版24	出土土器②
図版12	SKI 23, SB11①	図版25	出土石器・石製品
図版13	S B112	図版26	自然科学的分析

# 第1章 はじめに

# 第1節 調査に至る経過

一般国道 7 号鷹巣大館道路は、北秋田市脇神から摩当山を通り大館市櫃崎で大館西道路に連結する、延長13.9kmの道路である。北秋田市栄から大館市櫃崎間の延長8.3kmについては平成17年度、その延伸区間であるあきた北空港I.Cから北秋田市栄間の延長5.6kmについては平成19年度に事業に着手した。国土交通省が一般国道 7 号の自動車専用道路として整備を進めており、日本海沿岸東北自動車道の一部を構成する。大館能代空港へのアクセス向上や、一般国道 7 号の渋滞緩和、災害時の迂回路の確保と県内の高速交通ネットワークの形成など、地域の文化と経済交流の活性化を目的として計画された路線である。

計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所長から、文化財保護法に基づき、秋田県教育委員会教育長に埋蔵文化財の遺跡分布状況等の調査依頼があった。秋田県教育委員会は、平成18年度に建設工事予定地内の試掘調査を実施した結果、新たに下野 II 遺跡を確認した。この結果を受けて、平成19年度に秋田県埋蔵文化財センターが下野 II 遺跡の確認調査を実施し、秋田県教育委員会は国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所長に工事区内2,250㎡の発掘調査が必要であることを報告した。その後の国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所長と秋田県教育委員会による協議を経て、秋田県埋蔵文化財センターが平成20年度に下野 II 遺跡の発掘調査を実施することとなった。

# 第2節 調查要項

遺 跡 名 下野Ⅱ遺跡(しものにいせき)(遺跡略号2SNⅡ)

遺跡所在地 秋田県大館市本宮字下モ野107-1

調 査 期 間 平成20年6月13日~9月26日

調 査 面 積 2,250 ㎡

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 宇田川浩一(秋田県埋蔵文化財センター文化財主任)

山田 祐子 (秋田県埋蔵文化財センター文化財主事)

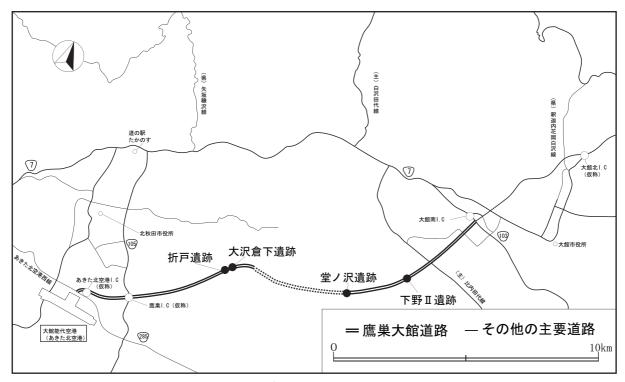
巴 亜子 (秋田県埋蔵文化財センター調査・研究員)

総務担当者 千田 喜博(秋田県埋蔵文化財センター主査)

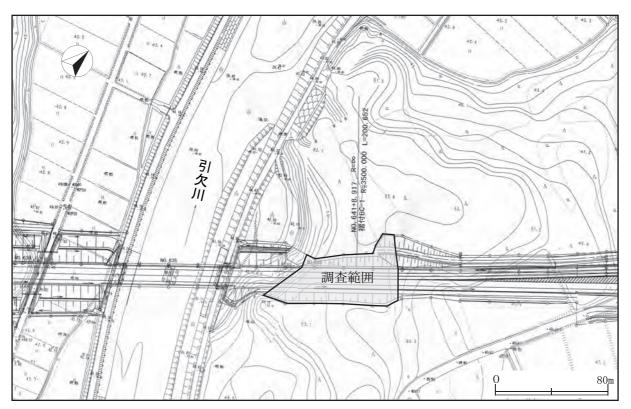
久米 保(秋田県埋蔵文化財センター主査)

高村知恵子(秋田県埋蔵文化財センター主任)

調査協力機関 国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所・大館市教育委員会



第1図 鷹巣大館道路と関連遺跡



第2図 工事計画と調査範囲

# 第2章 遺跡の環境

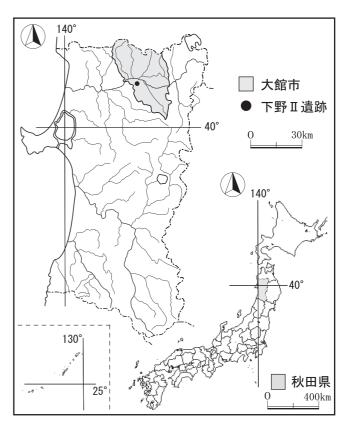
# 第1節 遺跡の位置と立地

下野Ⅱ遺跡が所在する大館市は、秋田県の内陸北端に位置する。市域は、北を青森県平川市・南津 軽郡大鰐町、東を鹿角市・鹿角郡小坂町、南を北秋田市、西を山本郡藤里町に接しており、その面積 は平成17年の市町村合併により923.70km になっている。

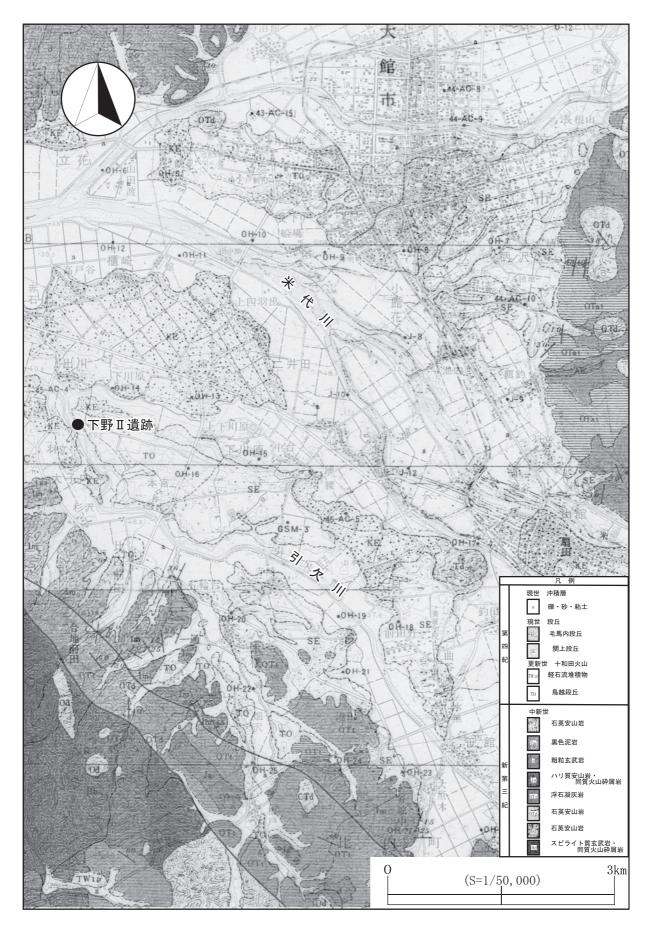
大館市の地形は、県北第一の主要河川である米代川とその支流を中心として、川沿いに広がる沖積低地、低地を囲む山地、山麓沿いに分布する扇状地からなっている。市の西側で米代川と支流が合流する地点の周辺は断層による陥没盆地となっており、大館盆地と呼ばれている。大館盆地の東縁や南西縁ではこれを裏付ける断層崖が現在でも確認できる。山地は北西側に自神山地、東側に高森山地、南西側に摩当山地がある。市街地に近い所では、盆地の東側に鳳凰山(520m)、秋葉山(329m)、獅子ヶ森(224m)があり、西側には大山(378m)を中心とする花岡地区の山地が南北に延びている。

米代川は岩手県八幡平市(旧二戸郡安代町)の中岳の源流から鹿角市を経て大館市に入り、最終的には能代市で日本海に注ぐ。引欠川は大館市内を流れる米代川の支流の一つであり、谷地中(旧比内町)に源を発する糸柄沢と中野(旧比内町)に源を発する長内沢が笹館で合流した川である。笹館から北西へ流れ、片貝・大子内・出川・赤石・板沢を通り、大館市の西側の横岩で米代川と合流する。

下野II遺跡は米代川と引欠川の合流点から南東に4km、JR奥羽本線下川沿駅から南南東へ4kmに位置し、引欠川の右岸、合窪山山地から引欠川と犀川の間を北西へ延びる大館段丘地の舌状台地上の標高は49~53mに立地する。遺跡周辺では毛馬内火砕流が5~6m堆積して、鳥越火砕流の上面を覆っているが、遺跡範囲の大部分は標高が高いために毛馬内火砕流の堆積を免れ、表層に鳥越火砕流が露出している。



第3図 遺跡の位置



第4図 遺跡周辺地質図

# 第2節 歷史的環境

下野Ⅱ遺跡の所在する大館市には、旧石器時代から近世まで数多くの遺跡が知られている。これらの遺跡を中心に、下野Ⅱ遺跡周辺の歴史的な環境を概観する。第5図は、大館市の内でも下野Ⅱ遺跡の周辺にあたる引欠川流域から米代川との合流点までの南北約12km、東西約8kmの範囲を図示している。以下、遺跡名の後につく()内の数字は、第5図と第1表に対応する。

米代川流域は、縄文時代から北と南の文化の接触地帯であったと言われている。大館市(大館盆地)は米代川の上・中流域に位置し、古くは「ひない」と呼ばれ、火内・比内・肥内と記述された地域である。

旧石器時代の遺跡は、大型の石刃が発見された松木高館平遺跡が市内で唯一の例である。この時期の遺構遺物が発見されない理由として、度重なる十和田火山の火砕流によって埋没している可能性が 指摘されている。

縄文時代のうち、草創期の遺跡はまだ確認されていない(2009年3月現在)。早期の遺跡は、狼穴 Ⅲ遺跡・坂下Ⅱ遺跡・野崎遺跡・松木遺跡・芋掘沢遺跡・根下戸道下遺跡(15)などがあり、貝殻文の ある胴部や尖底部の土器片が出土している。根下戸道下遺跡(15)と坂下Ⅱ遺跡では、県内では発見例 の少ない竪穴住居跡が確認された。前期の遺跡は、萩ノ台Ⅱ遺跡・池内遺跡・山館上ノ山遺跡・栗木 山遺跡(4)・餅田屋敷添遺跡(13)・根下戸Ⅲ遺跡(16)などがあり、萩ノ台Ⅱ遺跡では斜面の遺物包含 層から大量の円筒下層式土器とともに大木式土器片も出土している。池内遺跡では、前期中葉~末葉 にかけての集落が確認された。山館上ノ山遺跡では、2点の鋒形石器をはじめ大量の遺物が出土して いる。中期の遺跡は、鳴滝遺跡(2)・栗木山遺跡(4)・長瀞 I 遺跡(8)・芋掘沢遺跡(14)・餌釣館遺 跡などがある。餌釣館遺跡では竪穴住居跡が12軒確認され、円筒上層式土器とともに大木式土器が出 土した。後期の遺跡は、塚ノ下遺跡・栗木山遺跡(4)・長瀞 I 遺跡(8)・根下戸道下遺跡(15)・萩ノ 台Ⅱ遺跡、下野Ⅱ遺跡と隣接する位置にある下野遺跡(31)が挙げられ、十腰内Ⅰ式土器などが出土し た。塚ノ下遺跡からは目の部分に天然アスファルトが埋め込まれている土偶が、萩ノ台Ⅱ遺跡からは 3点のヒスイ製品が出土しており、ともに大館郷土博物館で展示されている。晩期の遺跡は、下川沿 遺跡(6)・長瀞Ⅰ遺跡(8)・餌釣館遺跡があるほか、下野Ⅱ遺跡の付近にあたる引欠川下流域には、 下野遺跡(31)・バッコ沢遺跡(43)・五輪台Ⅱ遺跡(44)など複数の遺跡が確認されており、主に大洞式 土器が出土している。

弥生・続縄文時代の遺跡は、鳴滝遺跡(2)・片山館コ遺跡(12)・諏訪台C遺跡などがある。片山館コ遺跡からは、後北C2式土器が出土した。諏訪台C遺跡では、二枚橋式併行期と砂沢式併行期の竪穴住居跡が各3軒ずつ確認されている。

平安時代の遺跡は、釈迦内中台 I 遺跡・上野遺跡・土飛山館跡(19)・高戸谷館跡(27)・薬師岱遺跡(36)・前田館跡(38)・本宮上ノ山(40)・本宮寺ノ沢(41)など多数の遺跡があり、土師器や須恵器が出土している。915年に降下したと推定されている十和田 a 火山灰の堆積状況が、火山灰降下と遺構の時期的前後関係を示唆している例が多く見られる。釈迦内中台 I 遺跡では、竪穴住居跡が130軒確認され、十和田 a 火山灰降下後に営まれた集落であることが分かっている。上野遺跡でも、十和田 a 火山灰降下後の竪穴住居跡が確認されており、かまど周辺から土師器と共に擦文土器が出土した。

## 第2章 遺跡の環境

中世の遺跡は、矢立廃寺・片山館コ遺跡(12)・土飛山館跡(19)などがある。矢立廃寺を除き、中世遺跡のほとんどは館跡で、現状でも空堀や郭の形状が残存しており、浅利氏の家臣が館主であると伝えられているものが多い。片山館コ遺跡は2008(平成20)年に発掘され、中近世の陶磁器や銭貨が出土し、竪穴状遺構や空堀が調査された。下野 II 遺跡周辺にあたる引欠川流域の台地上にも、大披館跡(29)・大子内館跡(35)・杉沢館跡(37)・前田館跡(38)・本宮館跡(42)・八木橋城跡(48)がある。本宮館跡は現況で空堀が確認でき、現在道路として使われている。

近世の遺跡は、ケラキ森一里塚(32)や現在は桂城公園として整備されている大館城などがあり、下野 II 遺跡の近辺でも、本宮上ノ山遺跡(40)では寛永通宝が見つかるなど、確かな生活の痕跡が残っている。

## 引用・参考文献

秋田県 『秋田県総合地質図幅 大館』 1973 (昭和48) 年

秋田県 『土地分類基本調査 大館』 1986 (昭和61) 年

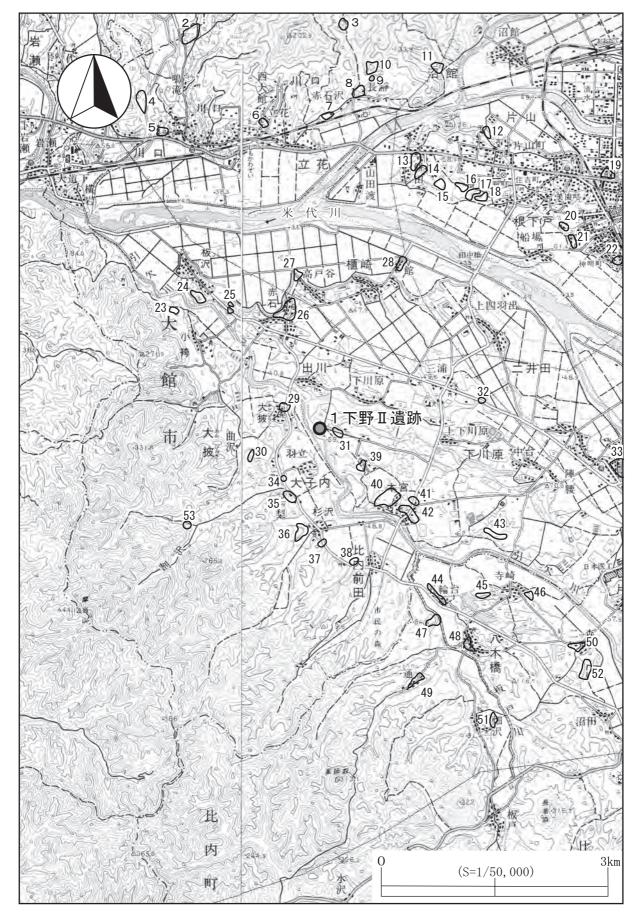
秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(北秋田地区版)』 2006(平成18)年

秋田県教育委員会 『諏訪台C遺跡発掘調査報告書―釈迦内地区農免農道整備事業―』 秋田県文化財調査報告書第196集 1990 (平成2) 年

秋田県教育委員会 『釈迦内中台 I ――般国道 7 号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V―』 秋田県文化財調査報告書第426集 2008(平成20)年

#### 第1表文献

- 1 大館市教育委員会 『芋掘沢遺跡発掘調査報告書』 1972 (昭和47) 年
- 2 大館市教育委員会 『大館市内遺跡詳細分布調査報告書』 2008 (平成20) 年
- 3 大館市史編さん委員会 『館コ発掘調査報告書』 1973・1974 (昭和48・49) 年
- 4 大館市史編さん委員会 『大館市史』 第1巻 1979 (昭和54) 年
- 5 大館郷土博物館 『大館郷土博物館研究紀要 火内』 第8号 2008 (平成20) 年
- 6 秋田県立大館鳳鳴高校社会部 『鳴滝遺跡発掘調査報告書』 1966·1977 (昭和41·52) 年
- 7 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981 (昭和56) 年
- 8 秋田県教育委員会 『片山館コ遺跡発掘調査報告書――般国道7号大館西道路建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査―』 秋田県文化財調査報告書第203集 1990 (平成2) 年
- 9 秋田県教育委員会 『根下戸道下遺跡―大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―』 秋田県文化財調査報告書第297集 2000 (平成12) 年
- 10 秋田県教育委員会 『根下戸Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡―大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―』 秋田県文化財調査報告書第230集 2001 (平成13) 年
- 11 秋田県教育委員会 『土飛山館跡―片山自歩道事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』 秋田県文化財調査報告書第425集 2007 (平成19) 年
- 12 秋田県教育委員会 『根下戸道下遺跡 (第2次) ——般国道7号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発 掘調査報告書Ⅶ—』 秋田県文化財調査報告書第428集 2007 (平成19) 年
- 13 『浅利與市侍分限』 伝1550 (天文19) 年成立 『秋田県史 資料 古代中世編』
- 14 『郷村史略』 伝1858 (安政5) 年頃成立



第5図 下野Ⅱ遺跡と周辺の遺跡位置図

# 第1表 下野Ⅱ遺跡と周辺の遺跡一覧

番号	登録番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	文献番号
4	004 4 164	工服 #	古比 作本吐	集石遺構、フラスコ状土坑、土坑、中世竪穴状建物跡、掘立柱建物跡、	
1	204-4-164	下野Ⅱ	墓域・集落跡	柱列、カマド状遺構	
	004 4 41	nd late	作本吐	縄文時代竪穴住居跡、フラスコ状ピット、組石土坑、縄文土器(中期・	C
2	204-4-41	鳴滝	集落跡	後期・晩期)、土製品、石製品、続縄文土器	6
3	204-4-35	赤石沢 I	遺物包含地	縄文土器	
4	204-4-158	栗木山	遺物包含地	土坑、縄文土器(前期・中期・後期)、石器、土師器	
5	204-4-42	川口館	館跡	空堀、郭	7 · 13 · 14
6	204-4-40	下川沿	遺物包含地	勾玉、土製朱彩丸玉	7 · 13 · 14
7	204-4-39	押館	館跡	空堀	7
8	204-4-38	長瀞 I	遺物包含地	縄文土器(中期~晚期)、石器	
9	204-4-37	長瀞Ⅱ	遺物包含地	縄文土器	
10	204-4-36	赤石沢Ⅱ	遺物包含地	縄文土器	
11	204-4-34	沼館	館跡		7 · 13
12	204-4-44	片山館コ	館跡	続縄文時代竪穴遺構、掘立柱建物、中世竪穴遺構、空堀、土塁、後北 C式土器、中世陶磁器、鉄器、銭貨	3 · 7 · 8
13	204-4-43	餅田屋敷添	遺物包含地	不整円形土坑、縄文土器(前期、円筒下層a・b式)	
14	204-4-125	芋掘沢	遺物包含地	石蓋甕棺、縄文土器(前期、中期)、石器	1
15	204-4-126	根下戸道下	遺物包含地	Tピット、土坑、焼土遺構、縄文土器(早期、後期)、土師器	9 • 12
16	204-4-133	根下戸Ⅲ	集落跡	縄文土器(前期)、石器	10
17	204-4-132	根下戸Ⅱ	狩場	Tピット	10
18	204-4-131	根下戸 I	集落跡	縄文土器、石器	10
19	204-4-45	土飛山館	館跡・集落跡	空堀、段築、竪穴住居跡、竪穴状遺構、溝跡、焼土遺構、土坑、石器、 須恵器、土師器、鉄製品、鉄滓	2 · 5 · 7 · 11
20	204-4-62	稲荷中岱	遺物包含地	土師器、中世陶磁器	. 11
21	204-4-63	太平山	遺物包含地	縄文土器(晩期)、土製品	
22	204-4-141	小館町	遺物包含地	縄文土器、石器	
23	204-4-114	山根岱	遺物包含地	縄文土器	
24	204-4-113	板沢	遺物包含地	須恵器、中世陶器	
25	204-4-112	板沢一里塚	一里塚		
26	204-4-111	赤石館	館跡		14
27	204-4-110	高戸谷館	館跡	空堀、土師器、中世陶器	
28	204-4-109	櫃崎館	館跡		7 • 14
29	204-4-108	大披館	館跡	郭、空堀	7 • 14
30	204-4-107	曲沢	遺物包含地	縄文土器	
31	204-4-101	下野	遺物包含地	縄文土器(後期・晩期)、石匙、磨製石斧	
32	204-4-95	ケラキ森一里塚	一里塚		
33	204-4-94	二井田館	館跡	空堀、土坑墓、柵列、中世陶磁器、鉄器、銭貨	7 · 13
34	204-4-106	林ノ上	遺物包含地	石器、剥片	
35	204-4-105	大子内館	館跡		7 · 13
36	204-4-104	薬師岱	遺物包含地	須恵器、土師器	
37	204-4-103	杉沢館	館跡	空堀	7 · 13 · 14
38	204-4-102	前田館	館跡	竪穴住居跡、掘立柱建物、板塀遺構、谷地掘、須恵器、土師器、中世 陶器、木製黒塗り椀	4 · 7 · 13
39	204-4-100	本宮中台	遺物包含地	縄文土器	
40	204-4-99	本宮上ノ山	遺物包含地・館跡	縄文土器、土師器、寛永通宝	
41	204-4-98	本宮寺ノ沢	遺物包含地	土師器	
42	204-4-97	本宮館	館跡	郭、空堀、中世陶磁器	7 · 13
43	204-4-96	バッコ沢	遺物包含地	縄文土器(晩期)、石器	
44	204-12-32	五輪台II	遺物包含地	縄文土器(晩期)	
45	204-12-30	寺崎Ⅱ	遺物包含地	縄文土器 (晩期)	
46	204-12-29	寺崎 I	遺物包含地	縄文土器 (晩期)	·
47	204-12-31	五輪台I	遺物包含地	縄文土器 (晩期)	
48	204-12-33	八木橋城	館跡	郭、空堀	7
49	204-12-34	一通	遺物包含地	縄文土器 (晩期)	
50	204-12-28	二ッ森	遺物包含地	縄文土器(晩期)	
51	204-12-35	畑沢	遺物包含地	縄文土器(晩期)	
52	204-12-37	二ッ森Ⅱ	集落跡	竪穴住居跡、フラスコ状土坑	
53	204-4-165	堂ノ沢	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器	

# 第3章 発掘調査の概要

# 第1節 遺跡の概観

下野 II 遺跡は、米代川と引欠川の合流点から南東に 4 km、 J R 奥羽本線下川沿駅より南南東へ 4 km に位置し、引欠川の右岸、合窪山山地から引欠川と犀川の間を北西へ延びる大館段丘地の舌状台地上に立地する。標高は49~53mで北東から南西に向かって緩やかに傾斜し、表層地質は鳥越火砕流によって形成されている。現況は杉の植林である。

調査対象は遺跡の中でも南東側の、道路計画路線内に含まれる2,250㎡の範囲である。調査区南西側には引欠川が南から北へ流れており、調査区との比高差は約10mである。十和田 a 火山灰降下面、もしくはそれより上の層が植林や削平のために失われているが、それより下の層の残りは良好だった。調査区の中央を東から西へ下る埋没沢が存在し、覆土の様子と出土した遺物により、縄文時代から中世にかけて埋没したものと推定される。

今回の調査では、縄文時代と平安時代および中世の遺構・遺物を発見した。縄文時代の遺構は、集石遺構や土坑が検出されたが、詳細な時期は不明である。遺物は埋没沢から縄文時代早期の土器がまとまって出土した他、縄文時代後期の土器なども少量出土している。平安時代の十和田 a 火山灰が堆積した道路状遺構、中世の竪穴状建物跡、掘立柱建物跡も検出されたが、同時代の遺物はほとんど無く、詳細な時期は不明である。

# 第2節 調査の方法

確認調査の結果に基づき、表土除去は重機によって行った。

作図のために、調査区内の任意の点(世界測地系:27017,-27642)を原点(MA50)とし、この点を通る真北方向のラインをMA、これに直交する東西方向のラインを50と名付け、これらに平行するラインによって4m×4mのグリッドを必要範囲に設定した。南北ラインは東から西に向かって…LS・LT・MA・MB…という2桁のアルファベット、東西ラインは南から北に向かって…48・49・50・51…という2桁の数字で呼称した。2桁のアルファベットは左を母単位、右を子単位として、20単位で1母単位という表記法を採っている。ラインの交点には杭を打設して、南北ラインを示すアルファベットと東西ラインを示す数字を組み合わせた名前を付けた。各グリッドは、南東角に打設されている杭の名前で呼称した。

調査の記録は、平面図・断面図および写真で記録した。平面図・断面図は1/20を原則としたが、 遺構細部の図面を必要とする際には1/10で作図した。写真撮影は、35mmのモノクロとリバーサルフィ ルムおよび必要に応じデジタルカメラを使用した。

遺物は、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、取り上げた。

遺構の確認は、主にⅣ層上面とⅧ層上面で行ったが、上面に集石などの構築物がある遺構はⅢ層で

#### 第3章 発掘調査の概要

確認できた場合もある。遺構番号は検出した順に付したが、柱穴様ピット以外については1~200、柱穴様ピットについては201からの番号を用いた。土坑と柱穴様ピットの区別は、確認面での直径が60cm以上のものを土坑、60cm未満のものを柱穴様ピットとした。

# 第3節 調査の経過

調査に先立つ重機による表土除去を平成20年5月26日~30日の期間に、グリッド杭の打設を6月9日~13日の期間に行い、6月13日から調査を開始した。

はじめに確認調査トレンチの復元と基本土層ベルトの掘削を行い、土層を観察した。結果、主に火山灰降下面であるIII~IV層上面と地山であるVII層上面で遺構を確認する必要があることが分かった。次に、調査区北側斜面部の掘削を行い遺構の有無を確認した。II~VI層がないため、直接VII層上面まで掘削した結果遺構がないことを確認し、調査区北側斜面部を排土捨て場として確保することにした。その後、台地上平坦面の南端部から北へ向かって順にIII~IV層上面での遺構確認と地形測量を開始した。その結果、縄文時代の集石遺構、古代の道路状遺構、中世の竪穴状建物跡・かまど状遺構を検出し、調査区中央に東から西へ下る埋没沢の存在が明らかになった。

7~8月には、IV層上面で確認された遺構の精査とIV~VII層の掘削作業、VII層上面での遺構確認を行った。この間に柱穴様ピットを数多く検出したため、適宜、掘立柱建物跡や柱穴列の検討を行った。またVIII層までの掘削作業の中で、縄文時代の土坑群を検出し、埋没沢部分のVII層などから縄文時代早期の尖底土器や縄文時代中期の土器片がまとまって出土した。

9月6日に遺跡見学会を実施し、85名の見学者を得た。その後、遺構精査とⅧ層上面の地形測量、 および図面整理などの作業を行い、9月26日に現場から撤収した。

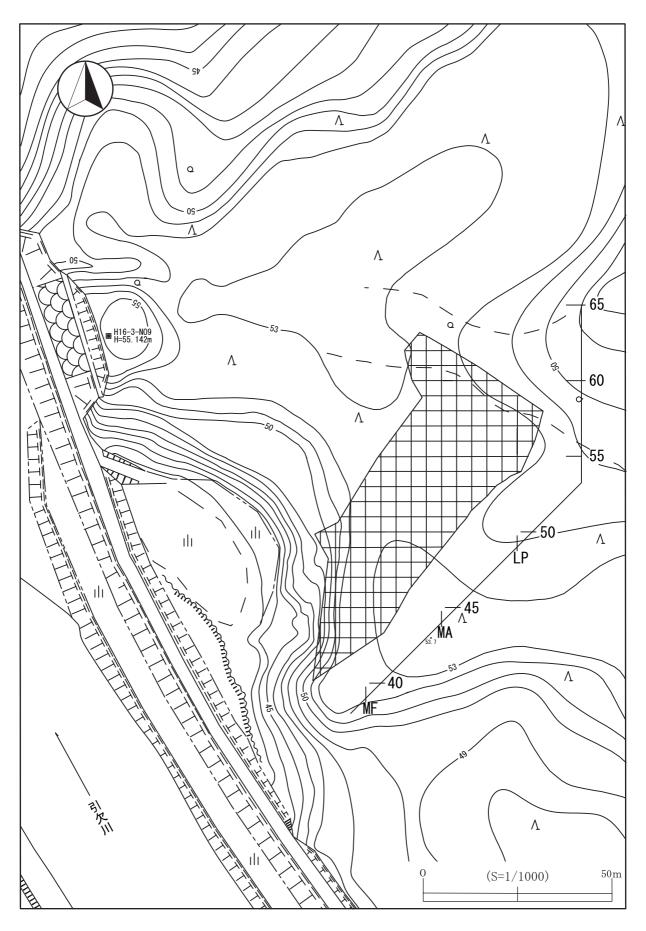
# 第4節 整理作業の方法と経過

各遺構は、現場で作成した図を第一原図とし、これを基に平面図と断面図を組み合わせ、適宜縮尺を変更し第二原図を作成してトレースし、調査所見や土層注記を記述した。

調査中に採取した試料については、平成20年度に放射性炭素年代測定・樹種同定・黒曜石の蛍光X線分析を、平成21年度に土壌理化学分析分析を委託によって実施した。

遺物の整理は、現場で洗浄・注記を行い、秋田県埋蔵文化財センターで接合・復元作業・採拓・実測・写真撮影を行った。実測図は基本的に実物大で作成し、土器・石製品・礫石器は1/3、剥片石器は1/2でトレースし、遺物分類と観察所見を記述した。遺物整理の結果、大半は縄文時代早期であるが、縄文時代前期から晩期・弥生時代・平安時代の遺物が少量ずつ存在し、下野 II 遺跡では断続的ながら縄文時代から中世まで生活が営まれてきたことが明らかになった。

以上の図面・文字原稿を編集し、本報告書を刊行した。



第6図 グリッド配置図

# 第4章 調査の記録

# 第1節 基本層序

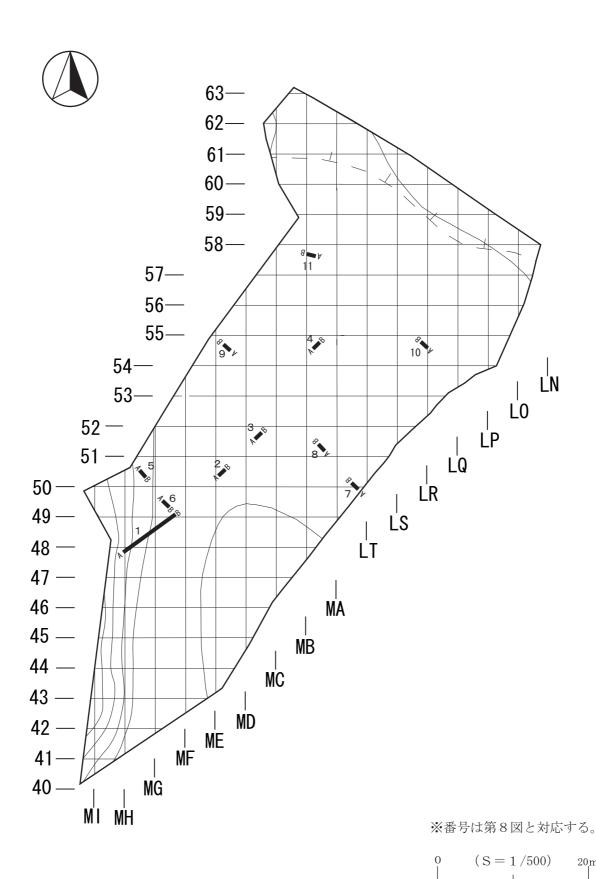
本遺跡の土壌は、十和田火山を起源とする鳥越・毛馬内火砕流および十和田 a 火山灰を母材とした 残積性・風積性の累積土壌である。台地上には鳥越火砕流が、低地には毛馬内火砕流が堆積し、上面 には完新世以後に発達した腐植により黒色土が厚く堆積している。調査区内を更新世に開析された浅 い谷が斜めに横切り、土壌はそれを埋めて形成される。

このような地形的特徴から台地上平坦面と谷内部では、層厚・層数に違いがある。地点ごとに受ける土壌生成作用が異なることから、土層観察地点ごとの層相は一致しない。

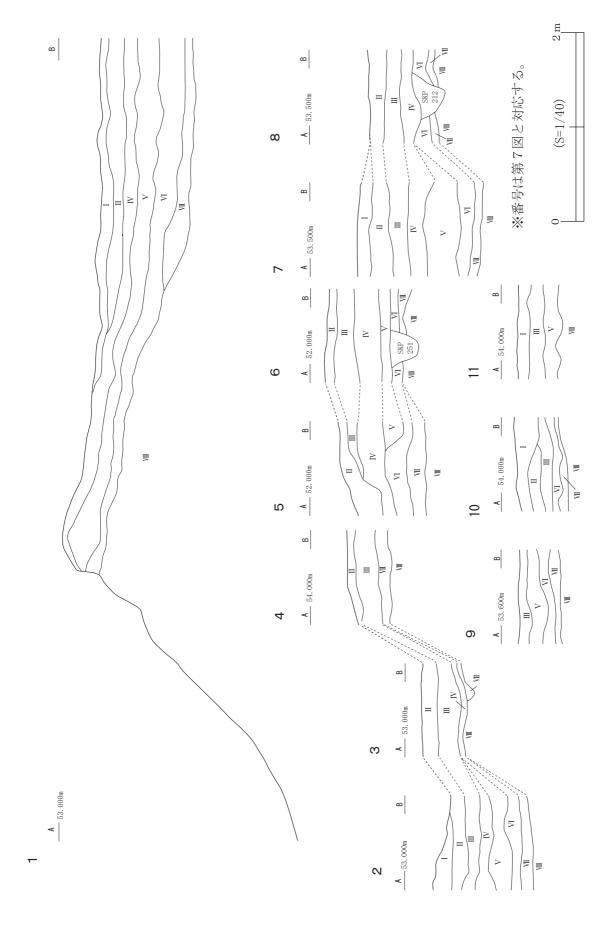
したがって、個別に観察した各地点の層位を基本層序としてまとめるに当たり、最も層数が多く土 壌断面の保存が良好だった基本土層を基準として、各地点の同じ母材に由来する同時期に形成された 土壌を同一層とした。

基本土層および遺構内覆土の観察結果について、色調・構造・土性・緻密度・可塑性・混入物・備 考の順に記述した。言葉の定義は、『新版標準土色帖』に準じている。

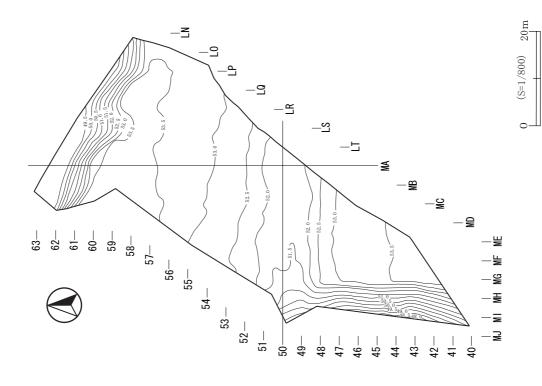
- I 層 表土。腐植が発達した黒色土。未分解の現世植物遺体を多く含む。土性は壌土で、緻密度・可塑性は頗る弱い。
- II 層 10YR1.7/1 亜角塊状 L (壌土) 緻密度+ 可塑性±~+ 十和田 a 火山灰由来の軽石 3 ~5% 平安~中世の堆積土。中世の遺構掘り込み面・生活面は本層中にあり、遺構埋土のマトリクスを構成する。十和田 a 火山灰は、II 層形成の母材となったと考えている。本層下部・III 層との層界に堆積し、所々直径300~500mmの集中区を作る。
- Ⅲ層 10YR2/1~1.7/1 亜角塊状 L (壌土) 緻密度+ (Ⅱ層より強い) 可塑性±~+ 十和田 a 火山灰由来の軽石もしくは鳥越火砕流由来の軽石2% 平安時代以前の埋没土壌。十和田 a 火山灰由来の軽石は、上部から植物根など生物活動の結果入り込んだと考える。
- IV層 10YR1.7/1 亜角塊状 L (壌土) 緻密度+~± 可塑性+ 縄文時代の埋没土壌。Ⅲ層よりも腐植に富み黒味が強いことから旧地表と考える。
- V層 10YR2/3~3/2 亜角塊状 L (壌土)~S L (砂質壌土) 緻密度+~++ 可塑性± 鳥越 火砕流由来の軽石  $\phi$  5~10mm 2~3% 縄文時代の堆積層。WII層を母材とする漸移層上部。腐 植に富む箇所とより腐植の弱い箇所が斑状に混じる。
- VI層 10YR4/3~4/4 亜角塊状 L (壌土) ~C L (埴壌土) 緻密度++ 可塑性+ 鳥越火砕流 由来の軽石φ5~15mm3~5% 火山礫φ3 mm1% 縄文時代の堆積層。Ⅷ層を母材とする漸 移層中部。鳥越火砕流由来の軽石・火山礫をV層よりも多く含む。
- WII層 10YR5/3 亜角塊状 C L (埴壌土) 緻密度++ 可塑性++ 鳥越火砕流由来の軽石φ5 ~30mm30%以上 火山礫φ1~3 mm1% 縄文時代の堆積層。WII層を母材とする漸移層下部。 鳥越火砕流由来の軽石・火山礫を多く含む。軽石は形状を保持しているが、粘土化している。

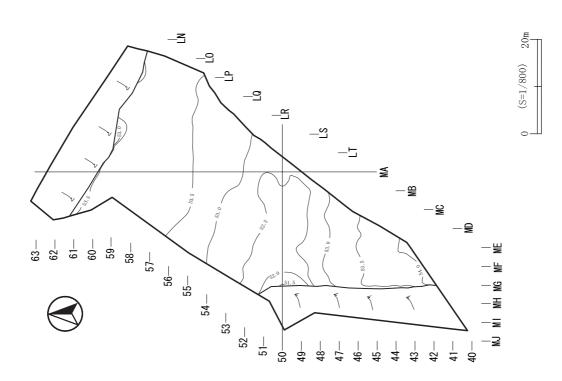


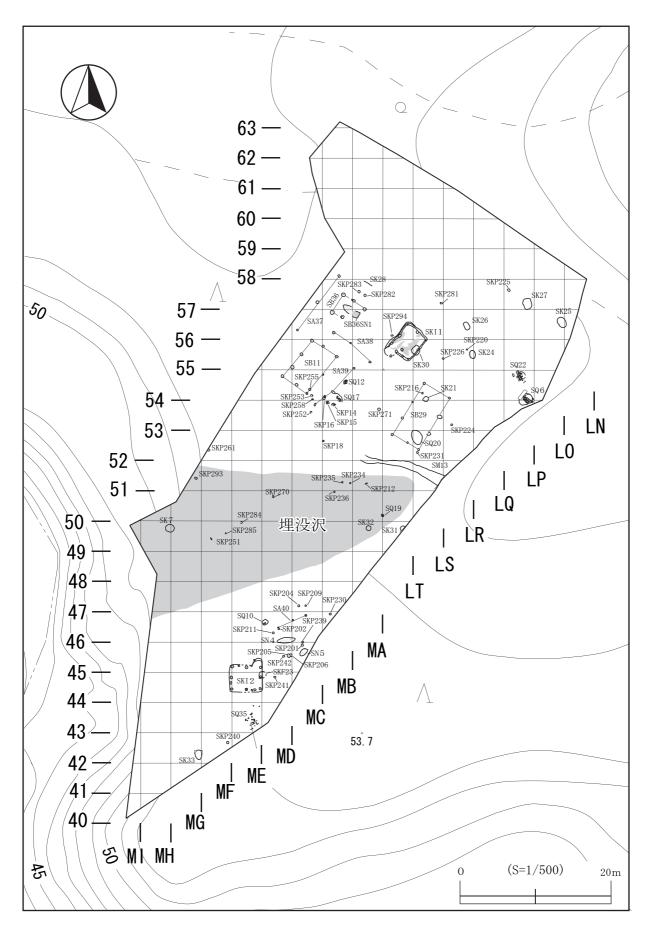
第7図 基本土層位置図



第8図 基本土層図







第11図 遺構配置図

VIII層 10YR5/6~6/6 亜角塊状 SCL(砂質埴壌土) 緻密度++~+++ 可塑性++(VII層よりも弱い) 鳥越火砕流堆積層。マトリクスは粘土化した火山灰と、風化した軽石・火山礫・火山砂である。直径数mm~10mmの細礫を含む部分がある。この細礫は肉眼での観察により、SK27の覆土から採取した礫と同じデイサイトであると判断した(SK27については第2節の21頁、採取した礫の蛍光X線分析結果については第5章の91頁を参照)。

# 第2節 検出遺構と遺構内出土遺物

調査区内で、縄文時代の遺構は集石遺構(SQ)9基・フラスコ状土坑1基・土坑(SK)10基、古代の遺構は道路状遺構(SM)1条、中世の遺構は竪穴状建物跡(SKI)2軒・掘立柱建物跡(SB)3棟(内1棟は上屋付かまど状遺構)・柱穴列4列・かまど状遺構(SN)2基、柱穴様ピット(SKP)37基を調査した。これらの遺構と遺構内出土遺物について時代順に記述する。以下、()内の数値は残存値である。

図を掲載した遺物は、土器と石器・石製品にそれぞれ1から通し番号を付して呼称した。

# 1 縄文時代

# (1)集石遺構

9基の集石遺構を検出した。礫はこぶし大から人頭大の亜角礫や円礫で、調査区内の基本土層には 含まれていない。引欠川などから人手により運ばれてきたものと推定される。

縄文時代の墓と推定される土坑と集石遺構に伴う土坑の規模が類似していること、縄文時代に類例の見られる石の並びの遺構があることなどから、集石遺構は縄文時代に属すると推定した。

伴う土坑と礫の関係により $1\sim3$ 類に分け、 $1\cdot3$ 類は礫の特徴からさらに $a\cdotb$ 類に細分した。

1類:礫が集中しているが、伴う土坑が確認されなかったもの。

1-a類:こぶし大の礫が面的に分布しているもの。SQ35。

1-b類:こぶし~人頭大の礫が配列されているもの。SQ19。

2類: 土坑内に礫が集中しているもの。SQ12・17。

3類: 土坑の覆土の上に礫が集中しているもの。

3-a類:こぶし大の礫が面的に分布しているもの。SQ20。

3-b類: こぶし~人頭大の礫が配列されているもの。 SQ6新旧・10・22。

**SQ6** (第20·21·40·49図、図版2·23·25)

新旧2段階に分けられるため、SQ6新段階、SQ6旧段階の順に記述する。

#### SQ6新段階

【 位 置 】 L P 54 【 確 認 面 】 VI層 【 重 複 】 旧段階より新しい。

【礫の範囲】1.94m×0.88m 【礫の特徴】こぶし~人頭大の亜角礫24点、使用痕なし。

【礫の配置】土坑上面南側、環状に配置。

【土坑平面形】楕円形 【 規 模 】1.17m×1.07m 【主軸方位】N—10°—E

【 深 さ 】0.48m 【 堆積状況】2層。大粒のVIII層由来土を含むため人為堆積と判断。

【出土遺物】縄文土器片2点(第40図1)とスクレイパー1点(第49図1)が出土した。土器片は 本遺構と同じグリッドで出土した土器片と接合した。無文の地に横位の楕円形の文様が沈線で描か れており、十腰内I式土器に比定される。スクレイパーは下部が欠損しており、素材は頁岩である。 【 所 見 】 3 - b 類である。

## SQ6旧段階

【 位 置 】 L P 53・54 【 確 認 面 】 VI 層

【 重 複 】新段階より旧い。

【礫の範囲】撹乱により不明 【礫の特徴】こぶし~人頭大の亜角礫数点、使用痕なし。

【礫の配置】原位置を留めていない。周辺に分布。

【土坑平面形】楕円形と推定 【 規 模 】1.77m×1.29m 【主軸方位】N―87°―E

【深 さ】0.30m

【堆積状況】単層。大粒のⅧ層由来土を含むため人為堆積と判断。

【出土遺物】縄文土器片1点と頁岩の二次加工のある剥片2点が出土したが、図示していない。

【 所 見 】新段階と重複し、遺構北西側にも撹乱を受けているため、残存部分は少ない。新段階 のものと類似した礫が周辺に分布していること、土坑の規模も新段階と類似していること、土坑覆 土に礫は含まれていないことから、土坑上面に礫が並べられていた3-b類と推定される。

SQ10 (第21図、図版2)

【 位 置 】MD46

【確認面】Ⅲ層

【重複】なし。

【礫の範囲】0.32m×0.20m 【礫の特徴】人頭大の円礫数点、使用痕なし。

【礫の配置】ほとんど原位置を留めていない。土坑上面2点、周辺に数点分布。

【土坑平面形】楕円形

【深 さ】0.20m

【堆積状況】単層。大粒のⅧ層由来土を含むため人為堆積と判断。

【出土遺物】 頁岩の細片 1 点が出土したが、図示していない。

【 所 見 】遺構上面から北西側にかけて撹乱を受けているため、礫はほとんど原位置を留めていな い。遺構周辺に分布している円礫は、土坑上面に位置するものと類似していることから、本遺構に伴っ ていた礫と考えられる。土坑の規模・礫の特徴が類似しているSQ6新段階と同様に、3-b類と推 定される。

SQ12 (第21図、図版2)

【 位 置 】MB54

【確認面】VII層

【重複】なし。

【礫の範囲】1.05m×0.65m

【礫の特徴】径約0.25mを最大とする亜角礫7点、使用痕なし。

【礫の配置】土坑のほぼ底面中心部よりやや北側に分布。

【土坑平面形】不整楕円形

【 規 模 】 0.65m×0.48m 【主軸方位】N─35° ─E

【深 さ】0.15m

【堆積状況】2層。人為堆積。

【出土遺物】なし

【 所 見 】 2類である。

SQ17 (第22図、図版3)

【 位 置 】MB54 【確 認 面】**Ⅶ**層

【 重 複 】なし。

【礫の範囲】土坑内 北西側0.50m×0.40m 南東側1.05m×0.80m

【礫の特徴】こぶし~人頭大の角礫19点、使用痕なし。

【礫の配置】土坑内の北西側と南東側の2か所に集中し、底面から上面まで不規則に集積。

【土坑平面形】楕円形と推定 【 規 模 】1.38m×(0.4)m 【主軸方位】N-39°-W

【深 さ】0.34m 【堆積状況】2層。人為堆積。 【出土遺物】なし。

【 所 見 】土坑の南西側の形は確認できなかった。礫は覆土と共に一括で埋められている様子だが、 礫の集中部分が2か所に分かれるのは、作業単位を表している可能性が考えられる。2類である。

**SQ19** (第22・40・49図、図版3・23・25)

【 位 置 】 L T・M A 50 【 確 認 面 】 IV 層 【 重 複 】 なし。

【礫の範囲】0.38m×0.33m 【礫の特徴】こぶし~人頭大の亜角礫10点、使用痕なし。

【礫の配置】環状に配置。

【出土遺物】縄文土器片1点(第40図2)と石匙1点(第49図2)が出土した。土器片はRL縄文が施された胴部破片で、縄文時代後期の粗製深鉢形土器と推定される。石匙はつまみに対して刃部が縦に位置しており、素材は頁岩である。

【 所 見 】 礫の周囲を注意深く精査したが土坑は確認できなかった。1-b類である。

SQ20 (第22図、図版3)

【 位 置 】 L S・L T 52 【 確 認 面 】 VI層 【 重 複 】 S B 29 (中世)

【礫の範囲】1.40m×1.30m 【礫の特徴】こぶし大の亜角礫30点余り、使用痕なし。

【礫の配置】面的に密集。

【土坑平面形】楕円形 【 規 模 】1.00m×0.67m 【主軸方位】N—24°—W

【深 さ】0.20m 【堆積状況】単層。大粒のⅧ層由来土を含むため人為堆積と判断。

【出土遺物】縄文土器片1点が出土したが、図示していない。

【 所 見 】中世の遺構であるSB29の範囲内に位置しているが、柱穴と直接重複していない。本遺構はSB29より旧いと推定される。本遺構は3-a類である。

SQ22 (第22図、図版3)

【 位 置 】 L P 54 【 確 認 面 】 Ⅲ層 【 重 複 】 なし。

【礫の範囲】2.50m×1.65m 【礫の特徴】こぶし大~人頭大の亜角礫16点、使用痕なし。

【礫の配置】土坑上面に不規則に集積。範囲は土坑確認面の輪郭より西側にずれている。

【土坑平面形】楕円形 【 規 模 】2.10m×1.48m 【主軸方位】N—52°—W

【 深 さ 】0.10m 【 堆積状況】単層。大粒のⅧ層由来土を含むため人為堆積と判断。

【出土遺物】頁岩の剥片1点が出土したが、図示していない。

【 所 見 】 土坑と礫の分布範囲がずれていることから、土坑が埋まってから礫が置かれるまでに時間が経過している、礫が原位置を留めていないなどの可能性が考えられる。3 - b 類である。

SQ35 (第23·49図、図版3·25)

【 位 置 】 M E 43 【 確 認 面 】 V 層 【 重 複 】 なし。

【礫の範囲】3.20m×1.90m 【礫の特徴】こぶし大の亜角礫30点、使用痕なし。

【礫の配置】面的に密集。

【出土遺物】縄文土器片2点と二次加工のある剥片2点(第49図3・4)、頁岩の剥片1点が出土したが、二次加工のある剥片以外は図示していない。二次加工のある剥片のうち、3は素材剥片の打点

付近に、4は両縁辺部に二次加工が加えられており、3・4とも素材は頁岩である。

【 所 見 】 礫の分布範囲を注意深く精査したが土坑は確認できなかった。他の集石遺構と比較すると、分布範囲に対して礫が占める面積が少なく、散漫である。1-a類である。

# (2) フラスコ状土坑

1 基のフラスコ状土坑を検出した。形状から縄文時代の遺構と判断した。

SKF23 (第24図、図版4)

【 位 置 】 MD·ME44·45 【確 認 面 】 IV層上面 【 重 複 】 S K I 2 より旧い。

【平面形】円形 【規模】確認面0.72m×0.70m 最拡張部0.94m×0.86m

【主軸方位】N-85°-W 【 深 さ 】0.72m

【堆積状況】単層。黒色土を主体とし、含まれるⅧ層由来土が少ないため、自然堆積と判断。

【出土遺物】なし。

【 所 見 】台地縁辺部付近に位置し、SKI2と重複しているため西側上半部が失われている。確認面より内部の方が大きく掘られている。断面で確認すると、壁は確認面付近では垂直で、確認面からの深さ約20cmの位置から底面付近までは内傾し、壁と底面の境は弧を描いており、底面は平坦である。形状から貯蔵穴もしくは土坑墓と推定される。

# (3) 土坑

10基の土坑を検出した。出土遺物から縄文時代と特定できる土坑があり、単独では時期の特定が困難なものも、縄文時代のものと規模・形状・主軸方位が類似していることから、土坑は全て縄文時代の遺構と推定した。

SK7 (第24図、図版4)

【平 面 形】楕円形 【 規 模 】1.15m×1.06m 【主軸方位】N—105°—E

【 深 さ 】0.40m 【 堆積状況 】6 層。レンズ状の堆積状況から自然堆積と判断。

【出土遺物】なし。

【 所 見 】調査区南東側の台地縁辺部に位置し、確認面直上まで削平されて失われている。調査区の平坦面に分布する土坑と同様に土坑墓である可能性がある。本遺構と同様、台地縁辺部付近に位置するSKF23と、規模や残存部分の形状が類似することから、削平により上半部が失われたフラスコ状土坑の可能性も考えられる。

SK21 (第24·40図、図版4·23)

【 位 置 】 L S 53・54 【 確 認 面 】 VI層 【 重 複 】 S B 29 (中世)

【深 さ】0.15m

【堆積状況】単層。焼土ブロックと炭化物が多量に混入していることから人為堆積と判断。

【出土遺物】弥生土器片1点(第40図3)が出土した。土器片はL原体による綾絡文が施されており、 小坂X式に比定される。

【 所 見 】中世の遺構であるSB29の範囲内に位置しているが、柱穴と直接重複していない。本遺構はSB29より旧いと推定される。弥生土器片が出土しているが、本遺構覆土上層からの出土である

ため、撹乱によって落ち込んだ可能性も考えられる。

SK24 (第24·49図、図版4·25)

【 位 置 】 L Q · L R 55 【 確 認 面 】 Ⅷ 層上面 【 重 複 】 なし。

【 深 さ 】0.10m 【堆積状況】単層。大粒のⅧ層由来土を含むため人為堆積と判断。

【出土遺物】石鏃 6 点(第49図  $5\sim10$ )が出土した。  $5\sim8$  は凹基無茎、 9 は平基無茎、 10は凸基有茎で茎部が欠損している。  $5\sim7$  の素材は白っぽく半透明な玉髄、  $9\cdot10$ は鮮やかな赤色の鉄石英である。 8 の素材は褐色の頁岩だが、他の出土石器と比べると赤に近い色である。

【 所 見 】遺構外出土の石鏃はすべて頁岩を素材とした凸基有茎か平基無茎なのに対し、本遺構で出土した石鏃は特徴的な色の素材による無茎凹基鏃が多い。法量は遺構外から出土した石鏃と比べ半分ほどしかない。これらの石鏃は、意図的に揃えて埋められたものと推定される。そのため、本遺構は石鏃を副葬品とした土坑墓であり、近辺の平面形・規模・主軸方位が類似している土坑もすべて土坑墓である可能性が考えられる。

SK25 (第24図、図版5)

【 位 置 】 L Q 56 【 確 認 面 】 Ⅷ 層上面 【 重 複 】 なし。

【 深 さ 】0.20m 【堆積状況】単層。大粒のⅧ層由来土を含むため人為堆積と判断。

【出土遺物】なし。

【 所 見 】土坑墓と推定されるSK24の近辺にあり、平面形・規模も類似していることから、本遺構も土坑墓である可能性がある。

SK26 (第25図、図版5)

【 位 置 】 L R 56 【確 認 面】 Ⅷ層上面 【 重 複 】 なし。

【平 面 形】楕円形 【 規 模 】1.08m×0.66m 【主軸方位】N-23°-W

【 深 さ 】 0.10m 【 堆積状況】 単層。 大粒の Ⅷ 層由来土を含むため人為堆積と判断。

【出土遺物】なし。

【 所 見 】 土坑墓と推定される S K 24の近辺にあり、平面形・規模も類似していることから、本遺構も土坑墓である可能性がある。

SK27 (第25図、図版5)

【 位 置 】 L P 56·57 【 確 認 面 】 Ⅷ 層上面 【 重 複 】 なし。

【 深 さ 】0.70m 【 堆積状況】 単層。 Ⅷ層由来土を主体とするため人為堆積と判断。

【出土遺物】なし。

## 第4章 調査の記録

SK28 (第25図、図版5)

【 位 置 】MA57 【 確 認 面 】 VII層 【 重 複 】 なし。

【平 面 形】楕円形と推定 【 規 模 】1.30m×(0.07)m 【主軸方位】N—58°—W

【深 さ】0.10m 【堆積状況】単層。Ⅷ層由来土を多量に含むため人為堆積と判断。

【出土遺物】縄文土器片1点が出土したが、図示していない。

【 所 見 】本遺構は確認調査の際のトレンチによって大部分が壊されている。

SK30(第25図、図版6)

【 位 置 】 LS·LT55 【確 認 面】 Ⅷ層 【 重 複 】 SKI1より旧い。

【 深 さ 】0.10m 【 堆積状況】単層。Ⅷ層由来土を多量に含むため人為堆積と判断。

【出土遺物】なし。

【 所 見 】本遺構はSKI1と重複し、遺構の大部分が壊されているが、本来の形状は楕円形と考えられる。

SK31 (第25図、図版6)

【 位 置 】 L T 49 【 確 認 面 】 VII 層 【 重 複 】 なし。

【深 さ】0.15m 【堆積状況】単層。黒色土を主体とし、WII層由来土を少量含む。

【出土遺物】なし。

【 所 見 】調査区境に位置するため、南東側は調査できなかった。平面ではWI層で確認したが、調査区境の土層を観察することにより、VI層から掘り込まれていることを確認した。

SK32 (第25·40図、図版6·23)

【 位 置 】 MA49 【 確 認 面 】 VII層 【 重 複 】 なし。

【平 面 形】円形 【 規 模 】 0.65m 【主軸方位】N—65°—W

【深 さ】0.10m 【堆積状況】単層。黒色土を主体とし、Ⅷ層由来土を少量含む。

【出土遺物】縄文土器 1 点 (第40図 4) が出土した。底部から約10cmの高さまで残存しており、それより上は欠損している。底面は直径約5.5cmで網代痕がある平底で、LR縄文が施され、土器内面に煤状炭化物が付着している。胴部は底部から弧を描いて立ち上がっており、砲弾形の深鉢形土器と判断される。器形・地文から縄文時代後期~晩期と推定される。

【 所 見 】縄文土器は、本遺構の中心よりやや北西寄りの底面から浮いた位置から、倒位で出土した。副葬品や甕棺の可能性が考えられる。遺構覆土と土器内部の土壌理化学分析を行ったが、本遺構を墓と証拠づける結果は出なかった(分析の結果については、第5章の95頁を参照)。

SK33(第25図、図版6)

【 位 置 】 M G 42 【 確 認 面 】 Ⅷ 層 【 重 複 】 なし。

【深 さ】0.15m 【堆積状況】2層。黒色土を主体とし、WII層由来土を含む。

【出土遺物】縄文土器片1点が出土したが、図示していない。

【 所 見 】本遺構は調査区南東縁辺部に位置しており、確認面直上まで削平を受け、上端も部分的

に撹乱されている。底面は凹凸が多い。

## 2 古代

# (1) 道路状遺構

1条の道路状遺構を検出した。

SM13 (第26図、図版7)

【 位 置 】LS~MA51·52 【確 認 面】Ⅲ層 【 重 複 】なし。

【平 面 形】帯状 【 規 模 】最大幅1.57m 最小幅0.47m 残存長10.87m

【 方 向 】ほぼ東西方向 【 深 さ 】 0.15m

【堆積状況】3層。いずれも十和田 a 火山灰由来の軽石を主体とし、各層の境は緻密。下から粒径の大きい順に堆積しているため、風成による自然堆積と判断。

【出土遺物】なし。

【所見】調査区の47~51グリッドにある埋没沢の北側縁辺部に位置する。本遺構は浅い溝状で、LS51の調査区境からMA52まで、若干曲がりつつもほぼ東西方向に延びている。LS51より東側は調査区外へ延びており、MA52より西側は撹乱されたためか確認できなかった。本遺構は、非常に浅く幅も不明瞭なこと、遺構底面が緻密で硬化していたことから、掘り窪められたのではなく、通行により踏みしめられて窪んだ道路状遺構であり、十和田a火山灰が降下した915年より以前に利用されていたと判断した。

### 3 中世

遺構内外共に中世と判断できる遺物は出土しなかったものの、III層で確認された遺構があること、竪穴状建物跡の形状、柱穴の規模から中世の遺構と判断した。調査区の47~51グリッドにある埋没沢を境に、南北2つの遺構群に分かれる。北側の遺構群はSKI1、SB11・29・36、SA37・38・39であり、ほぼ主軸方位が揃っている。竪穴状建物跡・掘立柱建物跡(SB36は上屋付かまど状遺構)・柱穴列によって構成された一組の屋敷と推定される。南側の遺構群はSKI2、SA40、SN4・5である。確認されたのは竪穴状建物跡・柱穴列・かまど状遺構だけだが、調査区外まで広がる屋敷の一部であると推定される。

#### (1)竪穴状建物跡

2軒の竪穴状建物跡を検出した。

SKI1 (第27·28図、図版8·9·26)

【 位 置 】LS·LT55·56 【確 認 面】Ⅲ層 【 重 複 】SK30より新しい。

【主軸方位】N─38° ─E 【 深 さ 】0.50m

【堆積状況】10層。 $1\sim6$  層は黒色土を主体とし $\mathbb{Z}$  層由来土を含んでいる。北東側からレンズ状に堆積しているため自然堆積と推定される。7 層は壁溝内の壁板の痕跡、9 層はその裏込め土である。8 層は張り出し部の、10 層は建物内部の貼り床である。

【出土遺物】黒曜石の細片1点(図版26試料番号10)が出土した。蛍光×線分析を行ったが、産地を

同定するには至らなかった(分析の結果については第5章を参照)。

【 所 見 】断面A-Bより南東側は、確認調査のトレンチにより床面付近まで削平されていた。本 遺構は壁溝のある竪穴状建物跡である。北西壁中央付近・張り出し部・掘り込み中央部と部分的に貼 り床を施して床面全体を平坦に作っている。床面から11基の柱穴を確認した。主な柱穴は基本的に四隅とその中央に配置されているが、南西壁では張り出し部の両側に位置する。張り出し部以外には壁溝が巡る。張り出し部は本遺構の床面から確認面までをつなぐ斜面になっていた。本来、斜面は当時の地表面まで続いており、張り出し部は出入口だったと推定される。

SKI1 P1

【 位 置 】北東壁中央 【 確 認 面 】 S K I 1 床面 【 平 面 形 】 楕円形

【規模】 0.35m×0.32m 【深 さ】0.63m

SKI1 P2

【位置】北東隅 【確認面】SKI1床面 【平面形】円形

【 規 模 】 0.15m×0.15m 【 深 さ 】 0.36m

【堆積状況】2層。1層は柱材が腐朽した後に流入した黒色土。2層は柱を建てた際の裏込め土。

SKI1 P3

【 位 置 】南東壁中央 【 確 認 面 】 S K I 1 床面 【 平 面 形 】 楕円形

【 規 模 】 0.25m×0.2m 【 深 さ 】 0.65m

SKI1 P4

【 位 置 】南東隅 【 確 認 面 】 S K I 1 床面 【 平 面 形 】 楕円形

【 規 模 】 0.19m×0.18m 【 深 さ 】 0.40m

SK I 1 P5

【 位 置 】南西壁中央やや東 【確 認 面】SKI1床面 【平 面 形】楕円形

【 規 模 】 0.22m×0.25m 【 深 さ 】 0.20m

SK I 1 P6

【 位 置 】南西壁中央やや西 【確 認 面】SKI1床面 【平 面 形】楕円形

【規模】0.3m×0.32m 【深さ】0.55m

SK I 1 P7

【 位 置 】遺構内南西側中央 【確 認 面】SKI1床面 【平 面 形】楕円形

【 規 模 】 0.35m×0.30m 【 深 さ 】 0.45m

SK I 1 P8

【 位 置 】張り出し部南東隅 【 確 認 面 】 Ⅷ層 【 平 面 形 】 円形

【 規 模 】 0.25m×0.25m 【 深 さ 】 0.20m

SK I 1 P9

【位置】南西隅 【確認面】SKI1床面 【平面形】円形

【規模】0.25m×0.25m 【深さ】0.32m

SK I 1 P10

【 位 置 】 北西壁中央 【 確 認 面 】 S K I 1 床面 【 平 面 形 】 楕円形

【 規 模 】 0.45m×0.30m 【 深 さ 】 0.15m

SK I 1 P11

【 位 置 】 北西隅 【 確 認 面 】 S K I 1 床面 【 平 面 形 】 楕円形

【規模】0.20m×0.15m 【深 さ】0.15m

SKI2 (第29·30·40·49図、図版10~12·23·25)

【 位 置 】 M E 44 · 45 【 確 認 面 】 Ⅲ 層 【 重 複 】 S K F 23 より新しい。

【平 面 形】長方形 【 規 模 】4.42m×3.60m 北壁張り出し部1.30m×0.85m

【主軸方位】N─90° ─E 【 深 さ 】0.50m

【堆積状況】2層。1層は黒色土を主体とし大粒の呱層由来土を含むことから人為堆積と判断。2層は黒色土を主体とするが呱層由来土を多量に含むことから、人為堆積と判断。壁からやや離れた位置に土塁状に堆積している。

【出土遺物】縄文土器片10点(第40図5~14)と頁岩の剥片3点、細片6点が出土したが、剥片・細片は図示していない。5~7は同一個体である。口縁は平縁で山形の小突起がついており、貝殻条痕による器面調整の上から、口縁部に沿って横線を、その下には山形の文様を沈線で描いている。8は斜線と鋸歯文が沈線で描かれている。9はほかの土器と比べて法量が小さく、棒状か板状の工具の圧痕で羽状の文様を描いている。10は断面に屈曲部があり、屈曲部に粘土粒貼付がある。10~14は文様がないが、内外面に箆状工具による器面調整の痕跡が残っている。本遺構から出土した遺物はすべて縄文時代早期の土器で、覆土が堆積する際に混入したものであり、本遺構の所属時期を示すものではない。

【所見】断面C-Dの位置から東へ1.5mの幅で、確認調査のトレンチにより床下まで削平されている。貼り床は確認されなかった。床面および張り出し部付近より14基の柱穴を確認した。主な柱穴は $P1\cdot2\cdot5\sim7\cdot9\cdot11\cdot12$ の8基で、四隅と壁際の中央に位置し、全て柱痕が残っている。P2とP9は特に深く、それぞれ南壁と北壁の中央に位置することから、棟持ち柱と推定される。 $P3\cdot4\cdot8\cdot10\cdot13$ は壁際に位置し、平面形は不整形で規模が小さく浅いため、補助柱と推定される。 $P3\cdot4\cdot8\cdot10\cdot13$ は壁際に位置し、平面形は不整形で規模が小さく浅いため、補助柱と推定される。 $P3\cdot4\cdot8\cdot10\cdot13$ は壁構には壁溝がなく、覆土P11を異なり本遺構には壁溝がなく、覆土P11を開かることから、壁板を固定するために土を盛り、柱の間に横木を渡していたと推定される。張り出し部は北壁のP11とP12の間に位置し、本遺構床面から確認面までをつなぐ斜面になっている。本来、斜面は当時の地表面まで続いており、張り出し部は出入口だったと推定される。張り出し部の北西端にP114があることから、これと対になる柱が張り出し部の北東端にもあり、出入り口の庇を支えていた可能性がある。以上のことから、本遺構は南北方向に棟のある切妻屋根で妻入りの建物であったと推定される。

### SKI2 P1

【 位 置 】南西隅 【 確 認 面 】 S K I 2 床面 【 平 面 形 】 楕円形

【 規 模 】 0.30m×0.25m 【 深 さ 】 0.40m

【堆積状況】2層。1層は柱材が腐朽した跡に流入した黒色土、2層は柱の裏込め土。

【柱 痕 跡】覆土平面・断面で確認 角材0.06m×0.15m

【 所 見 】主柱穴。

#### SKI2 P2

【位置】南壁中央 【確認面】SKI2 床面 【平面形】円形

【規模】0.30m 【深さ】0.80m

【堆積状況】2層。1層は柱材が腐朽した跡に流入した黒色土、2層は柱の裏込め土。

【柱 痕 跡】覆土平面・断面で確認 丸材径0.06~0.1m

【 所 見 】 主柱穴。南側の棟持ち柱と推定される。

## SKI2 P3

【 位 置 】 南壁中央よりやや東【確 認 面】床面

【平 面 形】楕円形

【 規 模 】 0.25m×0.17m 【 深 さ 】 0.10m

【堆積状況】2層。1層は柱材が腐朽した跡に流入した黒色土、2層は柱の裏込め土。

【柱 痕 跡】覆土断面で確認 平面形は不明確

### SKI2 P4

【 位 置 】 南壁中央より東 【 確 認 面 】 S K I 2 床面 【 平 面 形 】 楕円形

【規模】0.32m×0.20m 【深 さ】0.07m

【堆積状況】単層。大粒のⅧ層由来土を含むことから人為堆積と判断。

# SKI2 P5

【位置】南東隅 【確認面】SKI2 床面 【平面形】楕円形

【 規 模 】 0.35m×0.32m 【 深 さ 】 0.45m

【堆積状況】2層。1層は柱材が腐朽した跡に流入した黒色土、2層は柱の裏込め土。

【柱 痕 跡】覆土平面・断面で確認 丸材径0.12m

【所見】主柱穴。

## SK I 2 P6

【位置】東壁中央 【確認面】SKI2 床面 【平面形】楕円形

【 規 模 】 0.37m×0.33m 【 深 さ 】 0.35m

【堆積状況】2層。1層は柱材が腐朽した跡に流入した黒色土、2層は柱の裏込め土。

【柱 痕 跡】覆土平面・断面で確認 角材0.20m×0.15m

【 所 見 】主柱穴。

# SK I 2 P7

【 位 置 】北東隅 【 確 認 面】SKI2 床面 【 平 面 形 】 楕円形

【規模】0.38m×0.28m 【深さ】0.40m

【堆積状況】2層。1層は柱材が腐朽した跡に流入した黒色土、2層は柱の裏込め土。

【柱 痕 跡】覆土平面・断面で確認 角材0.12m×0.12m

【所見】主柱穴。

# SK I 2 P8

【 位 置 】 北壁中央よりやや東【確 認 面】 S K I 2 Ⅲ層 【 平 面 形】楕円形

【 規 模 】 0.20m×0.17m 【 深 さ 】 0.08m

【堆積状況】単層。黒色土を主体とし、大粒のⅧ層由来土を含むことから人為堆積と判断。

【 所 見 】 S K I 2 の壁よりやや外側、張り出し部の南西端に位置することから、張り出し部の 庇を支える柱の一つだったと推定される。

## SKI2 P9

【位置】北壁中央 【確認面】SKI2 床面 【平面形】円形

【 規 模 】 0.36m 【 深 さ 】 0.65m

【堆積状況】2層。1層は柱材が腐朽した跡に流入した黒色土、2層は柱の裏込め土。

【柱 痕 跡】覆土平面・断面で確認 角材0.15m×0.09m

【 所 見 】主柱穴。北側の棟持ち柱と推定される。

## SK I 2 P10

【 位 置 】 北壁中央より西 【確 認 面】 SKI2 床面 【平 面 形】楕円形

【規模】0.25m×0.15m 【深 さ】0.06m

【堆積状況】単層。黒色土を主体とし、大粒のⅧ層由来土を含むことから人為堆積と判断。

# SK I 2 P11

【 位 置 】 北西隅 【 確 認 面 】 S K I 2 床面 【 平 面 形 】 楕円形

【 規 模 】 0.40m×0.32m 【 深 さ 】 0.25m

【堆積状況】2層。1層は柱材が腐朽した跡に流入した黒色土、2層は柱の裏込め土。

【柱 痕 跡】覆土平面・断面で確認 角材0.12m×0.12m

【 所 見 】 主柱穴。

# SK I 2 P12

【位置】西壁中央 【確認面】SKI2 床面 【平面形】楕円形

【規模】0.38m×0.30m 【深さ】0.38m

【堆積状況】2層。1層は柱材が腐朽した跡に流入した黒色土、2層は柱の裏込め土。

【柱 痕 跡】覆土平面・断面で確認 角材0.12m×0.12m

【所見】主柱穴。

# SK I 2 P13

【 位 置 】 西壁中央やや南 【確 認 面】 SKI2 床面 【平 面 形】楕円形

【 規 模 】 0.35m×0.20m 【 深 さ 】 0.07m

【堆積状況】単層。黒色土を主体とし、大粒のⅧ層由来土を含むことから人為堆積と判断。

# SK I 2 P14

【 規 模 】 0.20m×0.18m 【 深 さ 】 0.38m

【堆積状況】2層。1層は柱材が腐朽した跡に流入した黒色土、2層は柱の裏込め土。

【柱 痕 跡】覆土下位の平面・断面で確認 不整形径0.15m

【 所 見 】張り出し部に庇を掛けるための柱穴と推定される。

## (2) 掘立柱建物跡

3棟の掘立柱建物跡を検出した。すべて側柱のみの建物である。以下、掘立柱建物跡の長辺の方向を桁行、短辺の方向を梁行として記述する。柱配置の項目について、対面する桁行、梁行で間数が違う場合は最も多い間数を記述した。規模の項目は、最長の桁行の芯心距離×梁行の芯心距離を記入した。各柱の位置の項目については、P1のみは遺構のどの方位の隅にあるかを記入し、P2以降はP1を起点として、桁行方向に何基目、梁行方向に何基目の位置にあるかを「桁行○×梁行○」と記述した。

SB11 (第31·32図、図版12~14)

【位置】MB~MD54·55、MC56

【確認面】Ⅷ層 【重複】なし

【 重 複 】なし。 【柱 配 置】桁行3間×梁行2間

【 規 模 】6.30m×3.95m 【主軸方位】N─38° ─E

【 所 見 】本遺構は9基の柱穴で構成されている。桁行の柱穴の数は、北西壁で4基、南東壁で3 基である。

SB11 P1

【 位 置 】北西隅 【確 認 面】Ⅷ層 【平 面 形】楕円形

【規模】0.42m×0.35m 【深 さ】0.32m

【柱 痕 跡】覆土断面で確認 丸材径0.18m

SB11 P2

【 位 置 】桁 $f_2 \times$ 梁 $f_1$  【 確 認 面 】 m層 【 平 面 形 】 楕円形

【規模】0.40m×0.35m 【深さ】0.50m

【柱 痕 跡】覆土断面で確認 丸材径0.14m

S B 11 P3

【 位 置 】桁行3×梁行1 【確 認 面】Ⅷ層 【平 面 形】円形

【 規 模 】 0.45m×0.43m 【 深 さ 】 0.10m

SB11 P4

【 位 置 】桁行4×梁行1 【確 認 面】Ⅷ層 【平 面 形】不整楕円形

【 規 模 】 0.40m×0.35m 【 深 さ 】 0.16m

【柱 痕 跡】覆土断面・掘り形底面で確認 角材0.15m×0.09m

SB11 P5

【位置】桁 $1\times$ 梁72 【確認面】| | | | | | 【平面形】| | | 円形

【規模】0.34m×0.30m 【深さ】0.15m

【柱 痕 跡】掘り形底面で確認 角材0.06m×0.10m

SB11 P6

【 位 置 】桁行 $2 \times$ 梁行2 【 確 認 面 】  $\mathbb{Z}$  層 【 平 面 形 】 楕円形

【規模】0.40m×0.32m 【深 さ】0.10m

SB11 P7

【位置】桁行 $1 \times$ 梁行3 【確認面】M層 【平面形】楕円形

【 規 模 】 0.35m×0.32m 【 深 さ 】 0.15m

【柱 痕 跡】掘り形底面で確認 丸材径0.18m

S B 11 P8

【位置】桁行2×梁行3 【確認面】呱層 【平面形】楕円形

【 規 模 】 0.23m×0.20m 【 深 さ 】 0.10m

【柱 痕 跡】覆土平面・断面で確認 角材0.09m×0.06m

SB11 P9

【 位 置 】桁行3×梁行3 【確 認 面】Ⅷ層 【平 面 形】不整楕円形

【 規 模 】 0.38m×0.25m 【 深 さ 】 0.10m

SB29 (第33図、図版15·16)

【 位 置 】 LS52~54·LT53·LR54

【確認面】Ⅲ層 【重複】SQ20·SK21(縄文時代)

【 配 置 】 桁行 3 間×梁行 2 間 【 規 模 】 8.00 m×4.15 m 【 主軸方位 】 N-31°-E

【 所 見 】本遺構は、9基の柱穴で構成されている。梁行の柱穴の数は、南西壁で3基、北東壁で2基である。実際にⅢ層で確認したのはP6のみだが、本遺構の本来の遺構面はⅢ層より上であると判断した。SB29の範囲内に縄文時代の遺構であるSK21・SQ20が位置している。柱穴と直接重複していないが、共にSB29より旧いと推定される。

SB29 P1

【 位 置 】 北隅 【 確 認 面 】 WII層上面 【 平 面 形 】 楕円形

【規模】0.32m×0.28m 【深さ】0.10m

S B 29 P2

【 位 置 】桁行2×梁行1 【確 認 面】Ⅷ層上面 【平 面 形】楕円形

【規模】0.25m×0.20m 【深さ】0.15m

S B 29 P3

【 位 置 】桁行3×梁行1 【確 認 面】Ⅷ層上面 【平 面 形】円形

【規模】0.30m 【深さ】0.08m

SB29 P4

【 位 置 】桁行4×梁行1 【確 認 面】Ⅷ層上面 【平 面 形】楕円形

【 規 模 】 0.30m×0.28m 【 深 さ 】 0.20m

SB29 P5

【 位 置 】桁行1×梁行2 【確 認 面】 III 層上面 【 平 面 形】 楕円形

【 規 模 】 0.30m×0.25m 【 深 さ 】 0.17m

SB29 P6

【 位 置 】桁行 2×梁行 2 【確 認 面】Ⅲ層 【平 面 形】楕円形

【規模】0.65m×0.50m 【深さ】0.41m

【柱 痕 跡】覆土平面・断面で確認 角材0.10m×0.12m

S B 29 P7

【 位 置 】桁行3×梁行2 【確 認 面】 IMI層上面 【 平 面 形】 楕円形

## 第4章 調査の記録

【 規 模 】 (0.45) m×0.40m 【 深 さ 】 0.05m

【 所 見 】掘り方の東側が撹乱を受けている。

S B 29 P8

【 位 置 】桁行4×梁行3 【確 認 面】Ⅷ層上面 【平 面 形】楕円形

【 規 模 】 0.30m×0.28m 【 深 さ 】 0.10m

SB29 P9

【 位 置 】桁 $f1 \times$ 梁f2 【 確 認 面 】 well 層上面 【 平 面 形 】 円形

【規模】0.20m 【深さ】0.10m

SB36 (第34~36図、図版17~19)

【 位 置 】 MA56·57、MB56·57

【確認面】Ⅲ層 【重複】P2はP3より旧い。P6はP7より旧い。

【柱 配 置】桁行 2 間×梁行 1 間 【 規 模 】 3.40 m×2.80 m 【主軸方位】 N—54°—W

【 所 見 】本遺構は、重複する柱穴を含めて7基の柱穴と、1基のかまど状遺構で構成されている。確認面について、実際にⅢ層で確認したのはP1・5・SN1のみだが、本遺構の本来の遺構面はⅢ層より上であると判断した。南東隅に柱穴を確認できなかったのは、掘り込みが浅かったか、地面の上にそのまま柱を据えていたためと推定される。柱穴による区画内にかまど状遺構が位置することから、柱穴はかまどの上屋の支柱であり、本遺構は炊事の場であったと推定される。かまど状遺構は2回造り替えられており、長期に亘って使用されていたと推定される。

S B 36 P1

【位置】北隅 【確認面】Ⅲ層 【平面形】円形

【規模】0.53m×0.43m 【深さ】0.50m

【柱 痕 跡】掘り形底面で確認 丸材径0.20m

S B 36 P2

【 位 置 】桁行2×梁行1 【 確 認 面 】 Ⅷ層 【 重 複 】 P3より旧い。

【平面形】(楕円形) 【規模】0.24m×0.20m 【深さ】0.1m

S B 36 P3

【 位 置 】桁行3×梁行1 【 確 認 面 】 Ⅷ層 【 重 複 】 P2より新しい。

【平 面 形】円形 【 規 模 】 0.35m×0.30m 【 深 さ 】 0.40m

【堆積状況】自然堆積

S B 36 P4

【 位 置 】桁行4×梁行1 【確 認 面】Ⅷ層 【平 面 形】円形

【 規 模 】 0.42m×0.40m 【 深 さ 】 0.30m

S B 36 P 5

【 位 置 】 桁行 1 ×梁行 2 【 確 認 面 】 Ⅲ 層 【 平 面 形 】 円形

【 規 模 】 0.53m×0.55m 【 深 さ 】 0.45m 【 堆積状況】自然堆積

【柱 痕 跡】掘り形底面で確認 丸材径0.20m

### S B 36 P6

【 位 置 】桁行2×梁行2 【確 認 面】Ⅷ層 【 重 複 】P7より旧い。

【平 面 形】(楕円形) 【 規 模 】0.25m×0.14m 【 深 さ 】0.15m

S B 36 P7

【 位 置 】 桁行3×梁行2 【 確 認 面】 Ⅷ層 【 重 複 】 P6より新しい。

【平 面 形】楕円形 【 規 模 】 0.45m×0.25m 【 深 さ 】 0.28m

【堆積状況】自然堆積

S B 36 SN1

【 位 置 】MA·MB56·57 【確 認 面】Ⅲ層 【主軸方位】N—55°—W

【 所 見 】 2回造り替えられており、新・中・旧段階の3期に分けられる。

### 新段階

【火床面平面形】楕円形 【火床面規模】2.24m×(0.98)m

【下部構造平面形】楕円形 【下部構造規模】2.5m×0.96m

【深 さ】確認面から火床面まで0.22m 確認面から下部構造底面まで0.38m

【堆積状況】8層( $1\sim8$ 層)。 $1\sim3$ 層はかまど廃絶後に堆積した黒色土で、 $4\cdot5$ 層は天井崩落土である。 $6\sim8$ 層は新段階のかまど構築時に中段階の構築土を再利用して床面に貼った土である。6層は被熱により変色している。

【出土遺物】1層から縄文土器片1点が出土したが、図示していない。

【 所 見 】新段階のかまどの残存範囲は袖・火床面・下部構造である。煙出し付近に直径0.64 mの掘り込みを確認した。新段階の天井崩落土である4・5層と6層の間に流入土がなかったことから、新段階のかまどが廃棄された後、間もなく天井が崩落したものと推定される。

### 中段階

【火床面平面形】楕円形 【火床面規模】1.95m×0.78m

【下部構造平面形】楕円形 【下部構造規模】1.95m×0.78m

【深 さ】確認面から火床面まで0.28m 確認面から下部構造まで0.43m

【堆積状況】 3 層  $(9 \sim 11$  層)。  $9 \cdot 10$  層は中段階のかまど構築時に貼った粘土で、 9 層は被熱により変色している。 11 層は旧段階から中段階に造り替える際に掘った部分を埋め立てた土である。

【出土遺物】なし。

【 所 見 】中段階から新段階へ造り替える際に壊されている。中段階の天井崩落土は確認されなかったことから、中段階から新段階に造り替える際に持ち出されたと推定される。

### 旧段階

【火床面平面形】楕円形 【火床面規模】0.61m×(0.5)m

【下部構造平面形】楕円形 【下部構造規模】0.61m×(0.58)m

【深 さ】確認面から火床面まで0.30m 確認面から下部構造まで0.40m

【堆積状況】 2 層 (12・13層)。12・13層共に下部構造を埋め立てた土で、12層は被熱している。 【出土遺物】なし。 【 所 見 】旧段階から中段階へ造り替える際に壊されており、ほとんど残存していない。

# (3) 柱穴列

4列の柱穴列を検出した。

SA37 (第37図、図版20)

【 位 置 】 M B 58、 M C 56 · 57【確 認 面】 W 層

【 重 複 】なし。

【配置】直線2間

【 長 さ 】9.05m 【主軸方位】N—35°—E

【 所 見 】本遺構は3基の柱穴で構成される。P1とP3を結んだラインよりP2がやや西側に位置して おり、板材をP1とP3で東側からP2で西側から挟んで支えるためと推定される。近接するSB36の目隠 し塀と推定される。

S A 37 P1

【 位 置 】南西端

【確認面】Ⅷ層

【平 面 形】楕円形

【規模】0.28m×0.24m 【深さ】0.28m

S A 37 P2

【 位 置 】中央よりやや北寄り【確 認 面】Ⅷ層

【平 面 形】楕円形

【 規 模 】 0.40m×0.38m 【 深 さ 】 0.10m

S A 37 P3

【 位 置 】北東端

【確認面】Ⅷ層

【平面形】楕円形

【規模】0.36m×0.30m

【深 さ】0.18m

SA38 (第37図、図版21)

【 位 置 】MA55、MB55・56【確 認 面】Ⅷ層

【 重 複 】なし。

【配置】直線2間 【長さ】6.2m

【主軸方位】N-52°-W

【 所 見 】本遺構は3基の柱穴で構成される。P1とP3を結んだラインよりP2がやや北東に位置して おり、板材をP1とP3で南西側からP2で北東側から挟んで支えていたと推定される。近接するSB11、 SB36の目隠し塀と推定される。

S A 38 P1

【 位 置 】北西端 【確 認 面】WI層

【平 面 形】円形

【 規 模 】0.35m

【深 さ】0.25m

【柱 痕 跡】掘り形底面で確認 丸材径0.17m

S A 38 P2

【 位 置 】中央よりやや北寄り【確 認 面】Ⅷ層

【平面形】円形

【 規 模 】 0. 20 m

【 深 さ 】0.10m

S A 38 P3

【 位 置 】南東端

【確認面】Ⅷ層

【平 面 形】不整円形

【規模】0.29m×0.28m

【深 さ】0.10m

SA39 (第37図、図版21)

【 位 置 】 MA55、MB54、MC53

【確認面】Ⅷ層

【重複】なし。 【配置】直線2間

【長 さ】7.05m

# 【主軸方位】N-47°-E

【 所 見 】本遺構は3基の柱穴で構成される。P1とP3を結んだラインよりP2がやや東側に位置しており、板材をP1とP3で西側からP2で東側から挟んで支えていたと推定される。近接するSB11の目隠し塀と推定される。

### S A 39 P1

【 位 置 】北東端 【 確 認 面】 VIII 層 【 平 面 形】 楕円形

【 規 模 】 0.28m×0.18m 【 深 さ 】 0.10m

S A 39 P2

【 位 置 】中央よりやや南寄り【確 認 面】 Ⅷ層 【平 面 形】楕円形

【規模】0.55m×0.28m 【深さ】0.15m

S A 39 P3

【 位 置 】 南西端 【 確 認 面 】 VIII 層 【 平 面 形 】 楕円形

【 規 模 】 0.40m×0.27m 【 深 さ 】 0.10m

SA40 (第38図)

【 位 置 】 M C · M D 46 【 確 認 面 】 Ⅷ 層 【 重 複 】 なし。

【 配 置 】直線 2 間 【 長 さ 】 4.00 m 【 主軸方位 】 N-64°-E

【 所 見 】本遺構は3基の柱穴で構成される。P1とP3を結んだラインよりP2がやや北側に位置しており、板材をP1とP3で南側からP2で北側から挟んで支えていたと推定される。

S A 40 P1

【位置】南西端 【確認面】Ⅷ層 【平面形】楕円形

【規模】0.20m×0.15m 【深さ】0.05m

S A 40 P2

【 位 置 】中央 【 確 認 面 】 Ⅷ層 【 平 面 形 】 楕円形

【 規 模 】 0.24m×0.20m 【 深 さ 】 0.15m

S A 40 P3

【 位 置 】 北東 【 確 認 面 】 WII層 【 平 面 形 】 円形

【規模】0.25m 【深さ】0.43m

### (4)かまど状遺構

3基のかまど状遺構を検出したが、1基は掘立柱建物跡に伴う遺構(SB36 SN1)として前述した。 これらのかまどはいずれも、地面を掘りくぼめてから炭化物を含む土を敷き詰め、粘土を貼って火床 面を整えている。

SN4 (第38図、図版22)

【 位 置 】MD45·46 【 確 認 面 】 Ⅲ層 【 重 複 】なし。

【下部構造平面形】楕円形 【下部構造規模】2.40m×0.76m

【 深 さ 】確認面から火床面まで0.27m 確認面から下部構造底面まで0.37m

【主軸方位】N-80°-E

【堆積状況】4層。1層は上面の撹乱、2層はかまどの天井崩落土。3層は被熱によって赤く変色した火床面の粘土である。4層は下部構造に敷き詰められた黒色土で、炭化物を多量に含む。

【出土遺物】縄文土器1点と頁岩の細片2点が出土したが、図示していない。

【 所 見 】 天井崩落土・火床面・下部構造が残存していた。 2 層と 3 層の間に流入土が確認されなかったことから、かまど廃絶後すぐに天井が崩落していると判断され、人為的に壊された可能性がある。下部構造に炭化物を多量に含む土を敷き詰めるのは、湿気対策の可能性がある。近接する S K I 2 と主軸方位が近く、一つの屋敷を構成すると判断される。 S K I 2 に近い西側が焚口、反対側の東側が煙出と推定されるが、火床面が西から東に向かって低く傾斜しているため、東側が焚口の可能性もある。

SN5 (第39図、図版22)

【 位 置 】 M C 45 【 確 認 面 】 Ⅲ 層 【 重 複 】 なし。

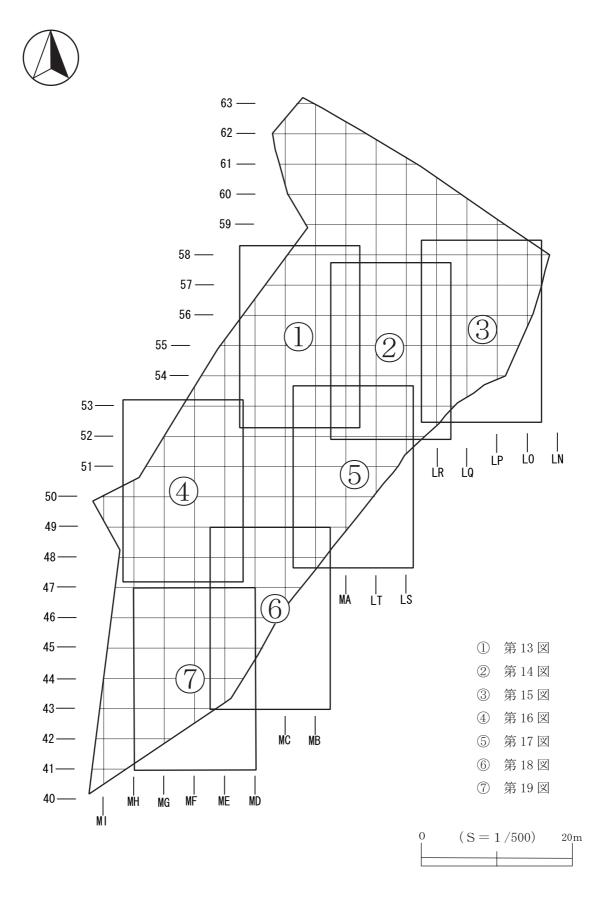
【深 さ】確認面から火床面まで0.37m、確認面から下部構造底面まで0.44m

【堆積状況】4層。1層は天井崩落土で、平面図では被熱による変色の度合により、1 a 層・1 b 層に細分した。1 b 層は1 a 層よりも赤く変色している。2層は自然流入した黒色土である。3層は火床面に貼られた粘土で、被熱により赤く変色している。4層は下部構造に敷き詰められた黒色土で、炭化物を含む。

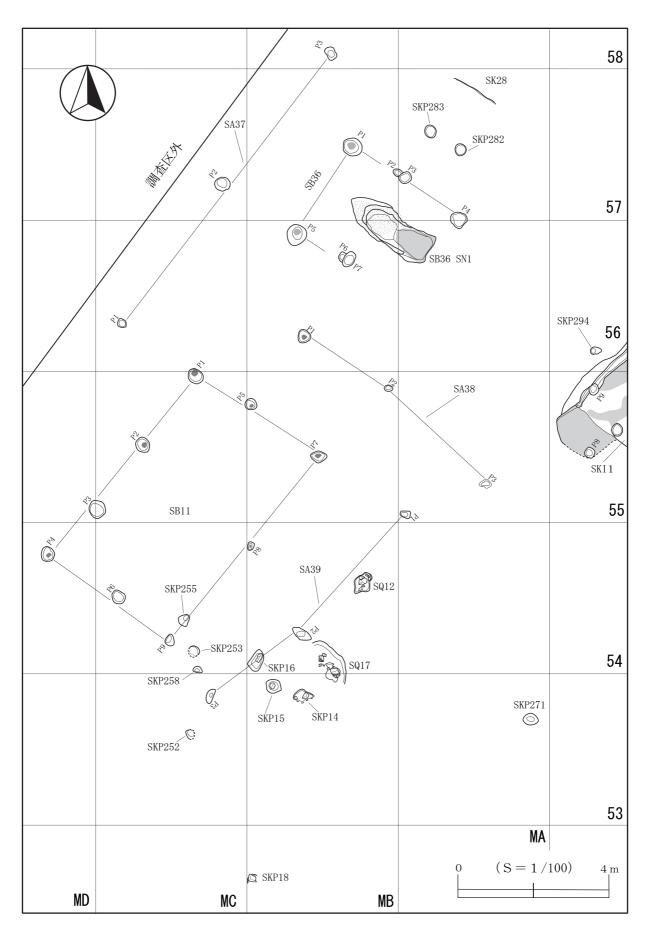
【 所 見 】天井崩落土・火床面・下部構造が残存していた。1層と4層の間に2層が堆積していることから、かまど廃絶後から天井が崩落するまでに時間が経過していると判断した。3層上面が南東側に向かって低く傾斜していることから、本遺構の北東側が焚口、南西側が煙出と推定される。位置はSKI2に近く、主軸方位はSB36に伴うかまど状遺構と近いため、どちらかの遺構と組になる可能性がある。

# 4 柱穴様ピット

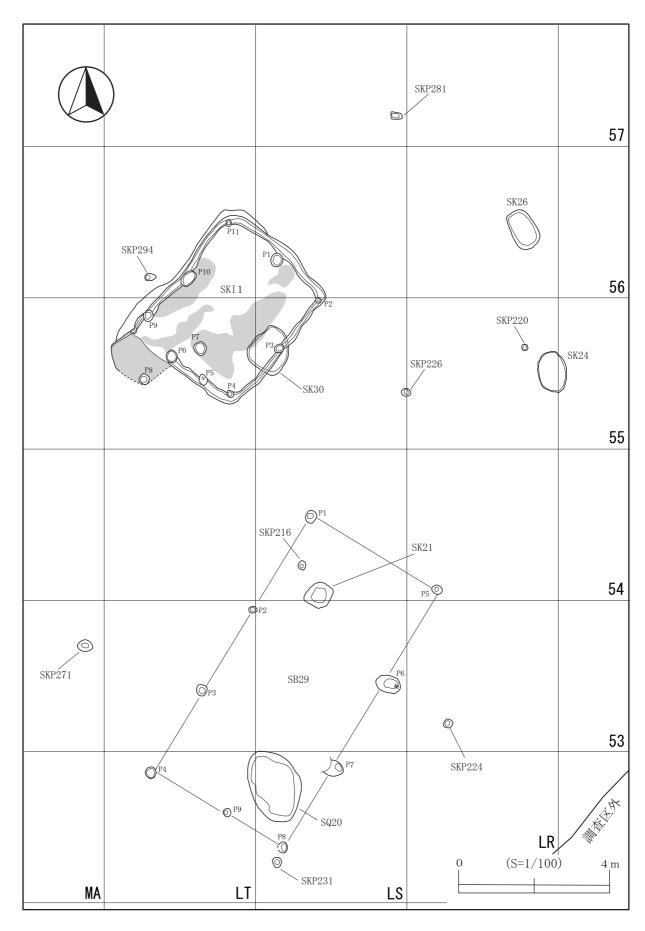
37基を検出した。完掘平面図は第13~19図の100分の1遺構配置図、観察結果については第2表の 柱穴様ピット(SKP)一覧、SKP14・15・16・18については図版7に写真を掲載した。



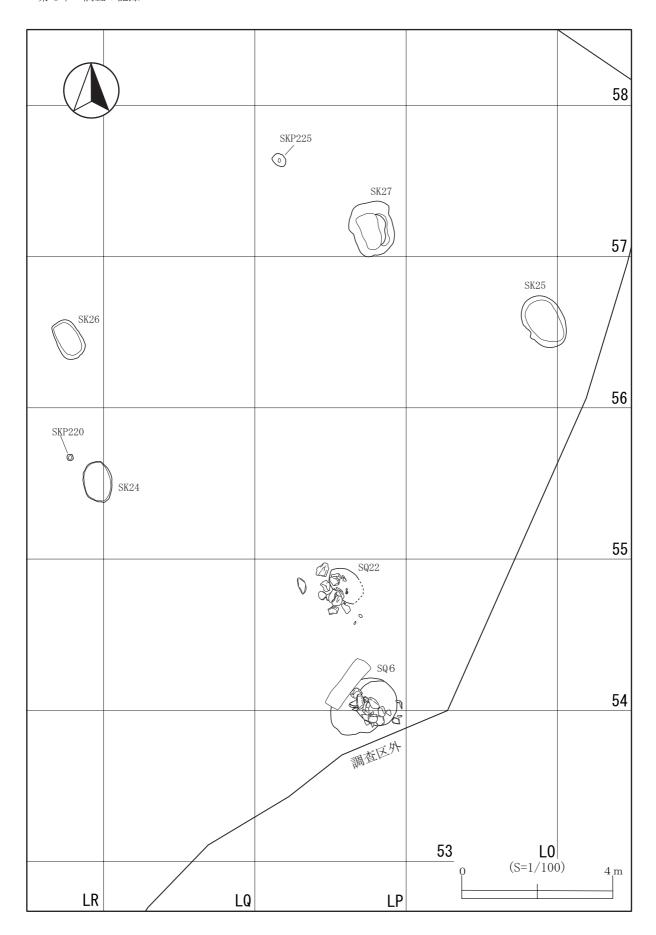
第12図 第13~19図の位置



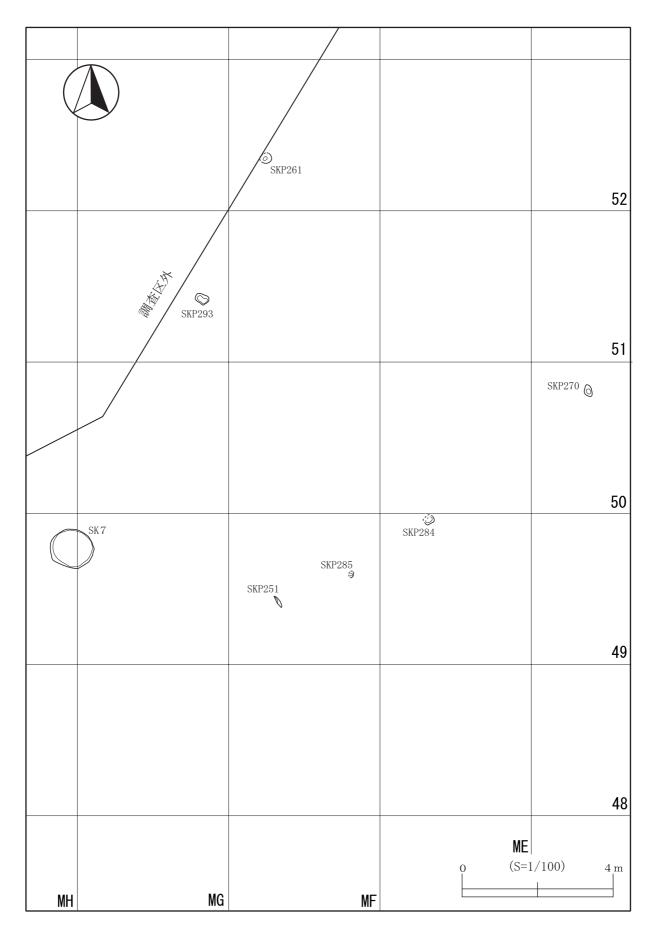
第13図 100分の1遺構配置図①



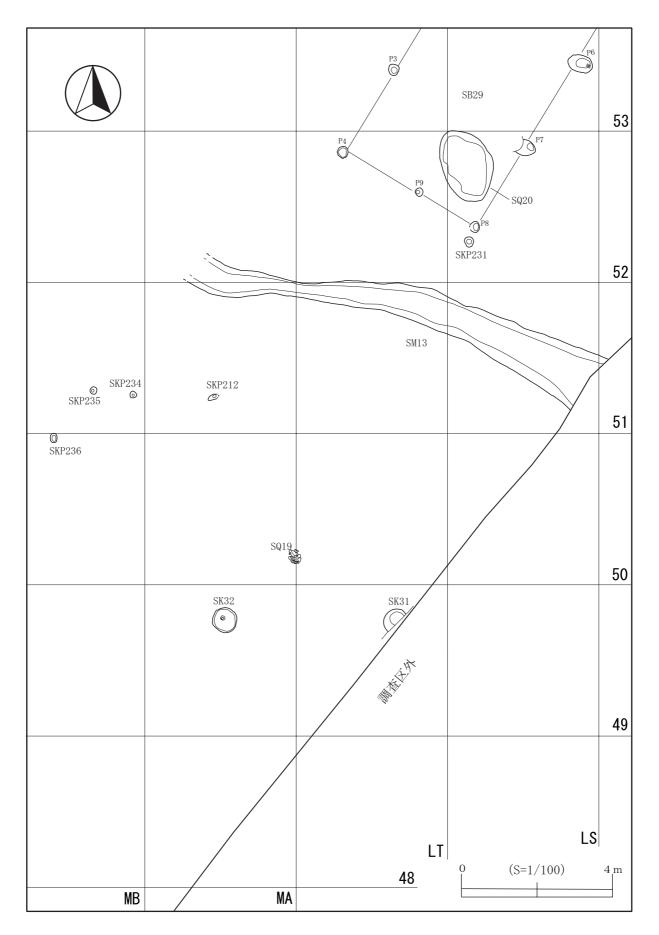
第14図 100分の1遺構配置図②



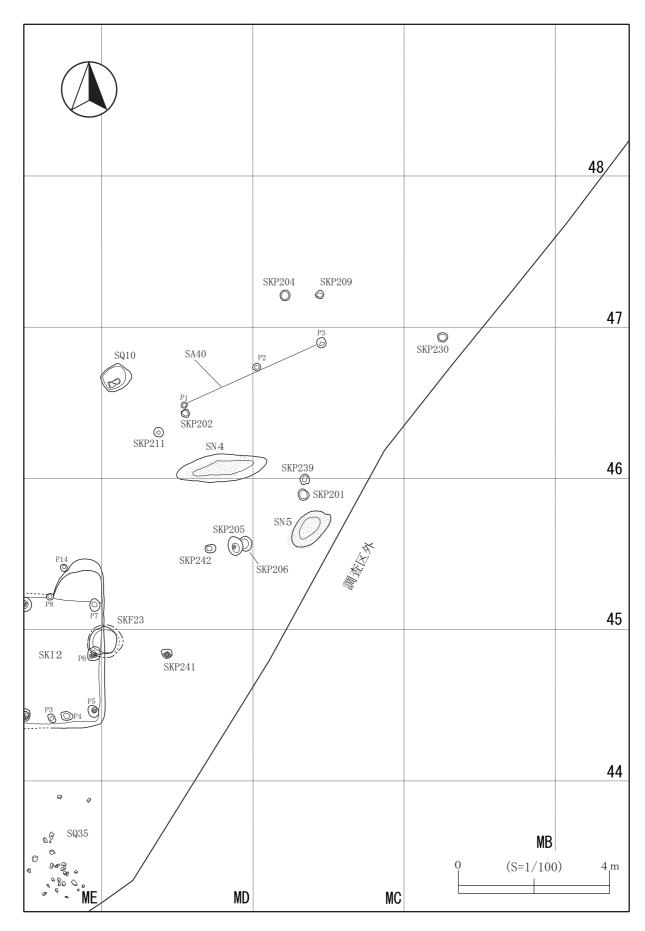
第15図 100分の1遺構配置図③



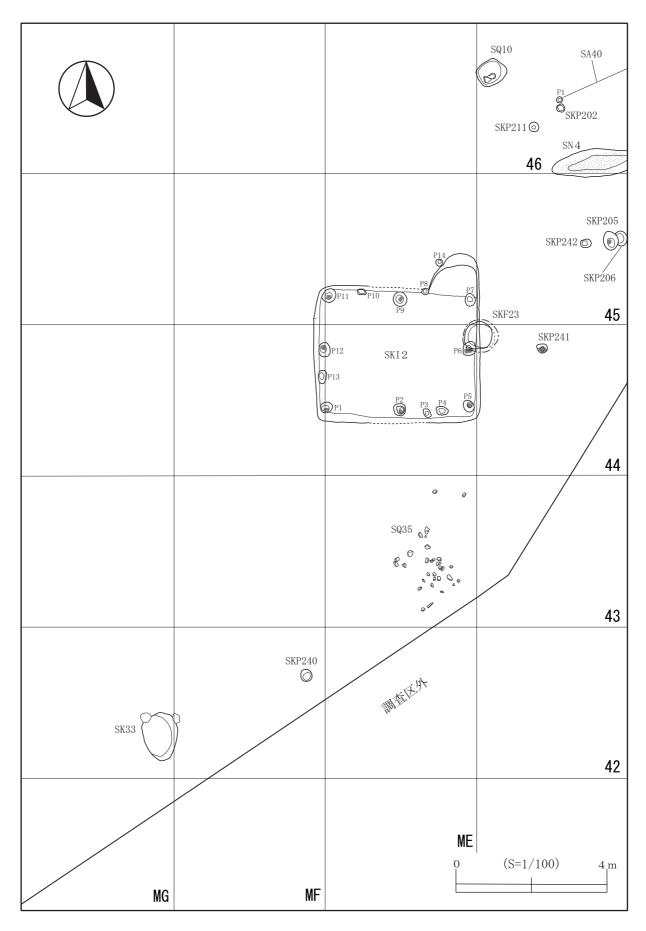
第16図 100分の1遺構配置図④



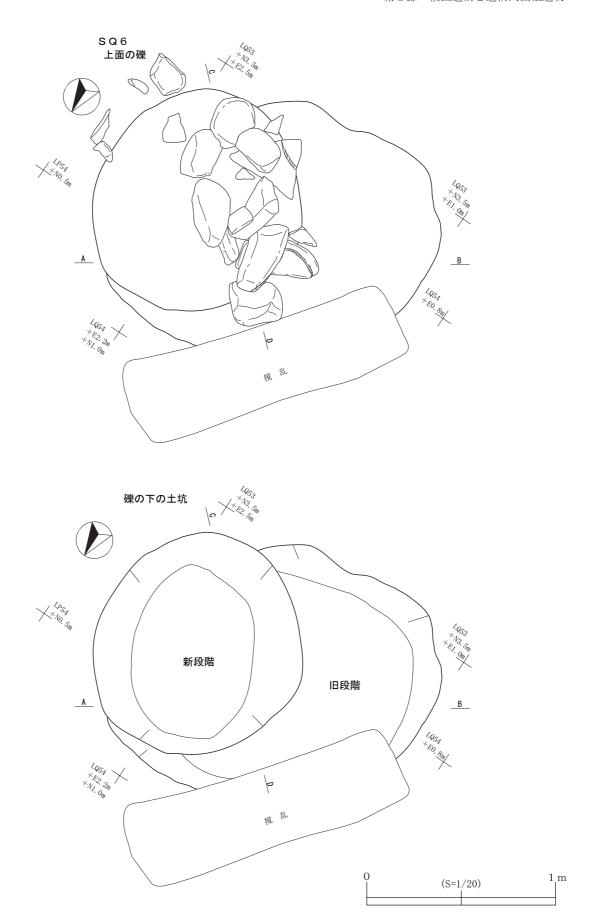
第17図 100分の1遺構配置図⑤



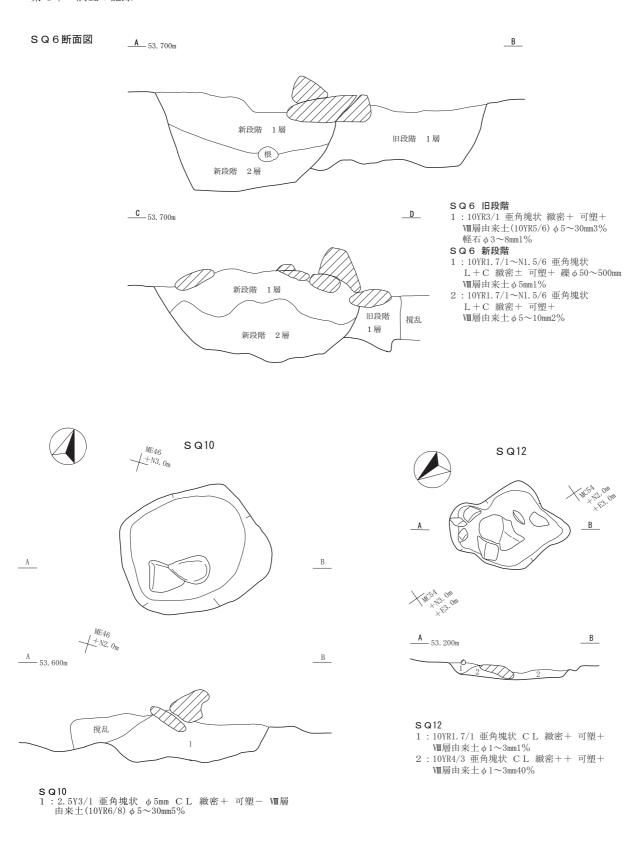
第18図 100分の1遺構配置図⑥



第19図 100分の1遺構配置図⑦



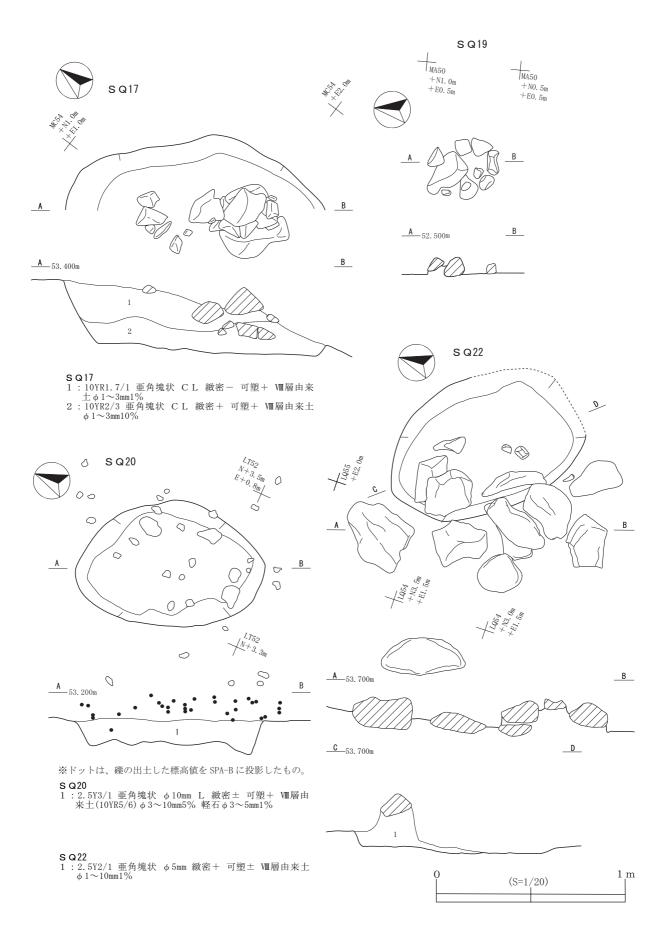
第20図 集石遺構(SQ6新・旧①)



第21図 集石遺構 (SQ6新·旧②、SQ10·12)

1.m

(S=1/20)

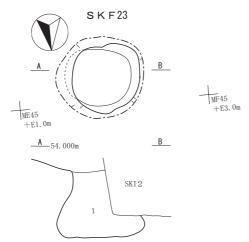


第22図 集石遺構 (SQ17·19·20·22)



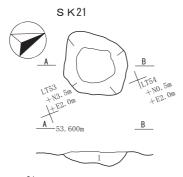
S Q 35

第23図 集石遺構(SQ35)

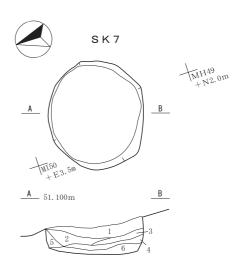


SKF23

1:10YR2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密± 可塑± VIII層由来土φ1~5mm3% φ20~30mm1%

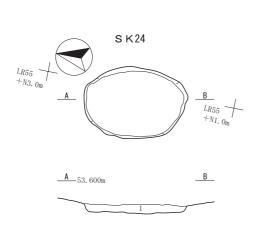


SK21 1:2.5Y3/1 亜角塊状 φ2mm CL 緻密士 可塑++ 焼 土ブロックφ3mm1% 軽石φ5mm1% 炭化物φ10mm1%

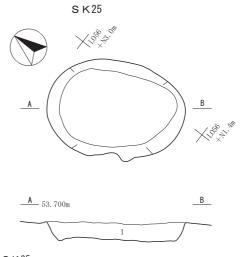


- **SK7** 1:10YR1.7/1 亜角塊状 L+C 緻密+++ 可塑+
- 軽石φ1~5mm2% 2:10YR1.7/1 亜角塊状 L+C 緻密+ 可塑+ 褐色粘

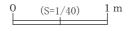
- 2:101K1.//1 無角塊状 L+C 緻密+ 可塑+ 褐色粘土。70mm5% 3:10YR2/1 亜角塊状 L+C 緻密++ 可塑+ 褐色土 (10YR4/4)40% 4:10YR2/2 亜角塊状 L+C 緻密+ 可塑+ 褐色土(10 YR4/6)10% 5:10YR1.7/1 亜角塊状 L+C 緻密++ 可塑+ MI層 由来土(2.5Y6/6)10%
- 6:10YR1.7/1 亜角塊状 L+C 緻密+ 可塑+ Ⅷ層由 来土(2.5YR6/6)15%



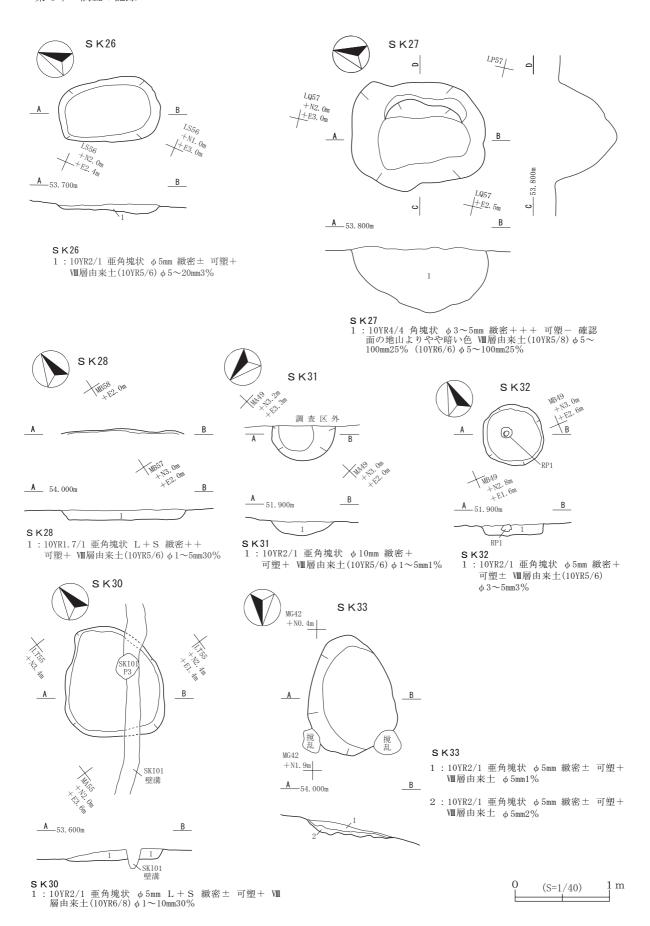
S K 24 1.10YR2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密+ 可塑± VⅢ層由来土 (10YR5/6)φ5~20mm3%



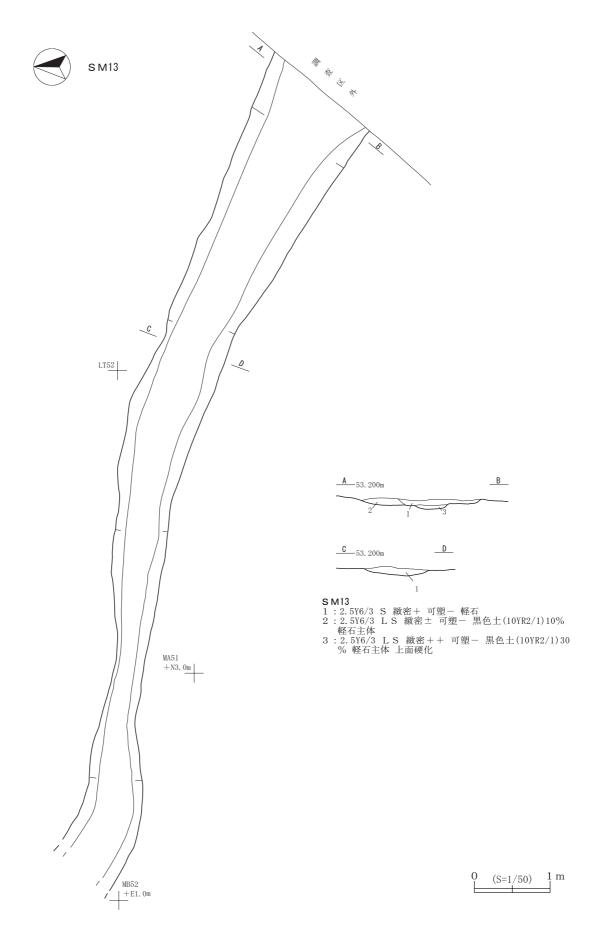
SK25 1:10YR2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密+ 可塑+ WII層由来土 (10YR5/6) φ3~10mm3% 軽石φ1~5mm1%



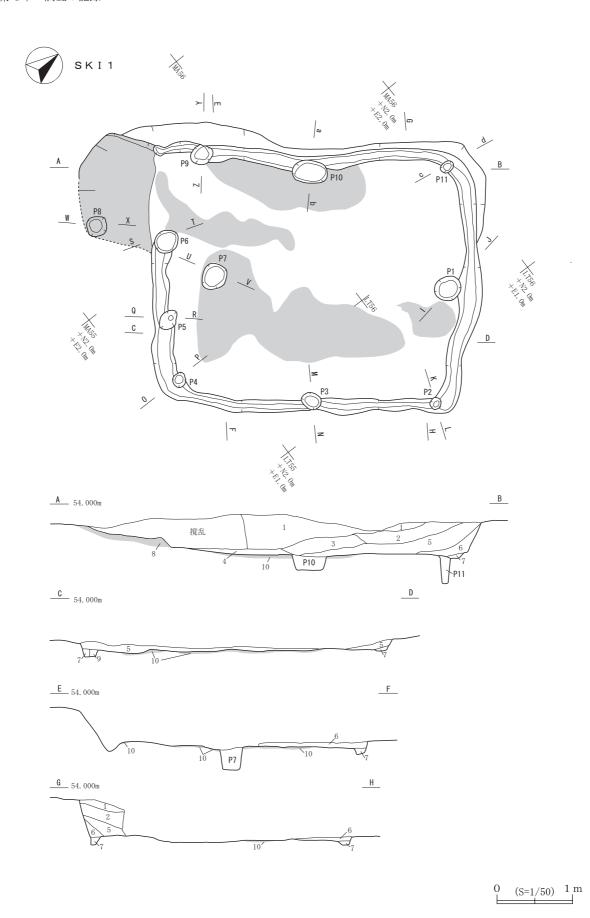
第24図 フラスコ状土坑 (SKF23)、土坑 (SK7・21・24・25)



第25図 土坑 (SK26・27・30・31・32・33)



第26図 道路状遺構(SM13)

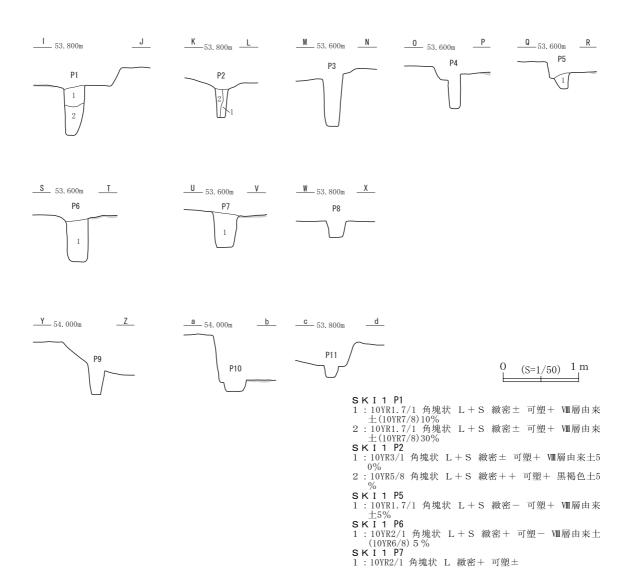


第27図 竪穴状建物跡(SKI111)

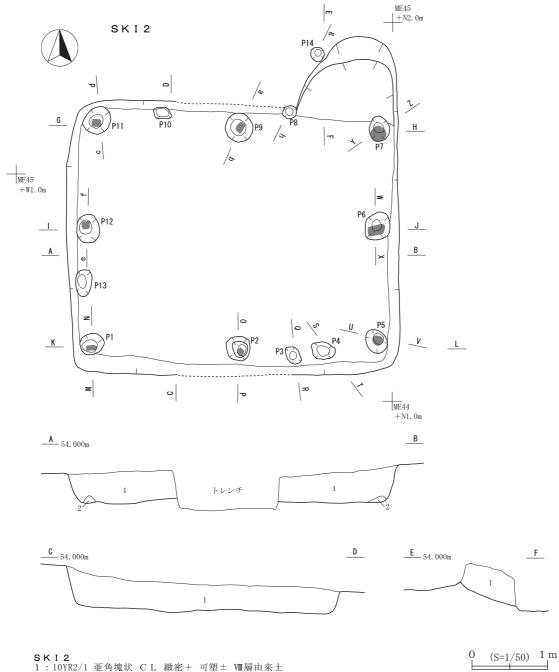
### S K I 1

- SKI1
  1:10YR2/1 亜角塊状 φ7mm L 緻密+ 可塑士 VIII層由来土(10YR6/8) φ10~50mm20% 2層より孔隙に富む2:10YR2/1 亜角塊状 φ7mm L 緻密+~++ 可塑土 VIII層由来土(10YR6/8) φ10~50mm20%
  3:10YR2/1~2/2 亜角塊状 φ5~7mm L +S 緻密+ 可塑生 WIII層由来土(10YR6/8) φ1~5mm30% φ10~50mm20%含む
  4:10YR2/1 亜角塊状 φ5mm L 緻密+ 可塑士 VIII層由来土φ1~5mm3% WIII層由来土の混入少なく1~3層より黒い 5層と似る
  5:10YR2/1 亜角塊状 φ7mm L 緻密+ 可塑土 VIII層由来土(10YR6/8) φ10~50mm30%

- 6:10YR2/1 亜角塊状 φ5mm L 緻密士 可塑士 WII層由来土φ1~10mm3% WII層由来土の混入少なく1~3層より黒い 壁際の三角堆積土7:10YR2/1 亜角塊状 φ5mm L+S 緻密+ 可塑士 WII 層由来土(10YR6/8)φ1~10mm30% 壁溝内の堆積土8:10YR2/1 亜角塊状 φ7~10mm L+C 緻密++ 可塑土~+ WII層由来土(10YR6/8)φ5~30mm20% WII層由来土とIII層由来土が混在した貼り床入り口部にあり踏みしめられて固い
- エとIII曽田米エが低仕した貼りがハソ日時にのソ時ペンめられて固い 9:10YR2/1 亜角塊状 φ5~7mm L 緻密+ 可塑士 VIII層 由来土φ5mm5% 板壁の痕跡 10:10YR7/6 亜角塊状 L+S 緻密++ 可塑+ 貼り床



## 第28図 竪穴状建物跡(SKI12)



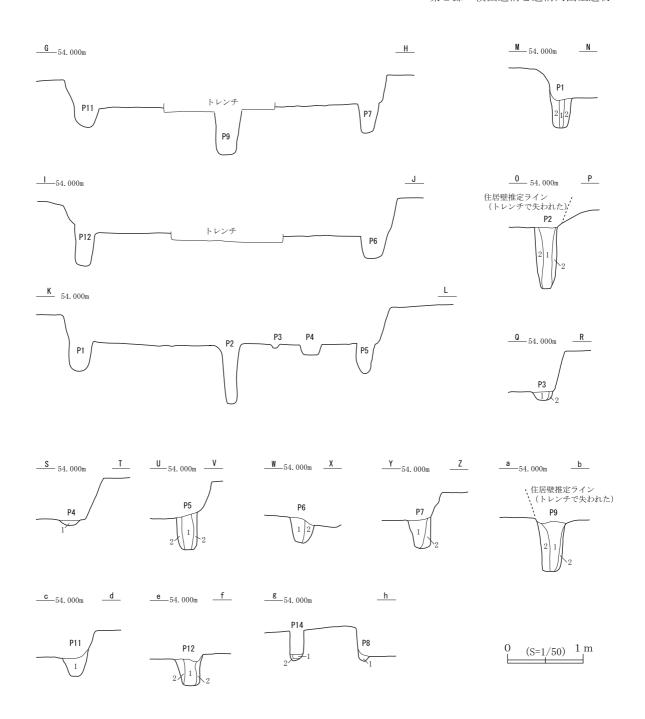
- 1:10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑± VIII層由来土 (10YR6/8) φ5~50mm15% 2:10YR2/2 角塊状 SL 緻密++ 可塑- 軽石(10YR 6/8) φ1~5mm40%

- SKI2P1 1:10YR2/1 亜角塊状 φ5mm CL 緻密士 可塑士 VIII層 由来士(10YR6/8) φ3~10mm5% 柱痕 2:10YR5/6 角塊状 φ10mm SL 緻密++ 可塑ー VIII層 由来士(10YR6/8) φ10~30mm30% 裏込め

- 由来土(10YR6/8) φ10~30mm30% 裏込め
  SKI2 P2
  1:10YR2/1 亜角塊状 φ5mm CL 緻密土 可塑土 VIII層
  由来土(10YR6/8) φ3~10mm5% 柱痕
  2:10YR5/6 角塊状 φ10mm SL 緻密++ 可塑ー VIII層
  由来土(10YR6/8) φ10~30mm30% 裏込め
  SKI2 P3
  1:10YR3/3 亜角塊状 φ5mm L 緻密+ 可塑+ VIII層由来土(10YR6/8) φ5~10mm10% 抜取痕
  2:10YR5/6 角塊状 φ10mm SL 緻密++ 可塑ー VIII層由来土(10YR6/8) φ10~30mm30% 裏込め

- SKI2P4
  1:10YR3/3 亜角塊状 φ5mm L 緻密+ 可塑+ WII層由来土(10YR6/8)φ5~10mm10% 抜取痕
  SKI2P5
  1:10YR2/1 亜角塊状 φ5mm CL 緻密土 可塑土 WII層由由来土(10YR6/8)φ3~10mm5% 柱痕
  2:10YR5/6 角塊状 SL φ10mm 緻密++ 可塑ー WII層由来土(10YR6/8)φ10~30mm30% 裏込め
  SKI2P6
  1:10YR6/8 角塊状 L 緻密++ 可塑+ 抜取で崩落したWII層由来土
  2:10YR2/1 亜角塊状 φ5mm CL 緻密土 可塑土 WIII層由来土(10YR6/8)φ3~10mm5% 抜取痕

## 第29図 竪穴状建物跡(SKІ2①)



- SKI2P7 1:10YR2/1 亜角塊状 φ5mm CL 緻密士 可塑士 VIII層 由来土(10YR6/8)φ3~10mm5% 柱痕 2:10YR5/6 角塊状 φ10mm SL 緻密++ 可塑ー VIII層 由来土(10YR6/8)φ10~30mm30% 裏込め SKI2P8 1:10YR1.7/1 亜角塊状 φ5mm CL 緻密+ 可塑+ VIII 層由来土(10YR5/8)φ5~30mm5% SKI2P9

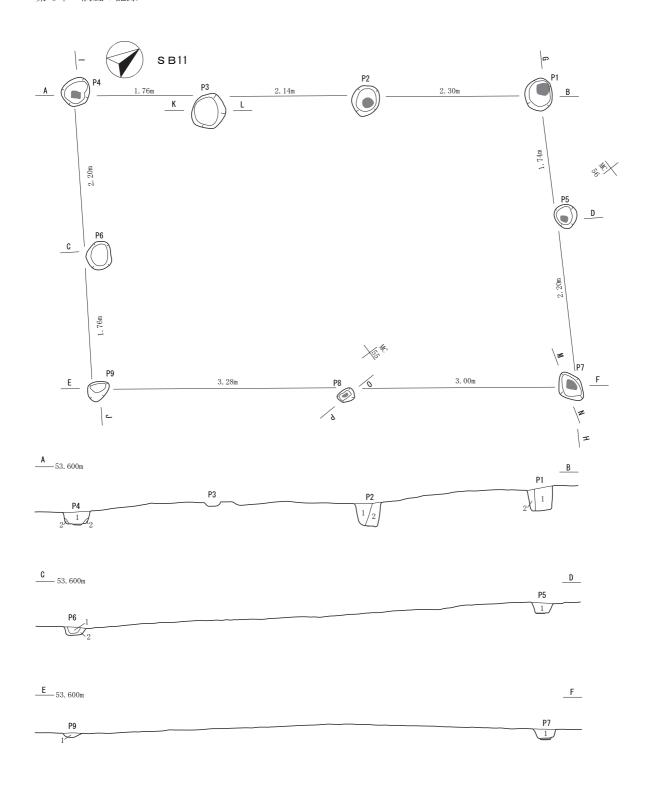
- 層由来土(10YR5/8) φ5~30mm5%
  SK12P9
  1:10YR2/1 亜角塊状 φ5mm CL 緻密土 可塑土 VIII層由来土(10YR6/8) φ3~10mm5% 柱痕
  2:10YR5/6 角塊状 φ10mm SL 緻密++ 可塑ー VIII層由来土(10YR6/8) φ10~30mm30% 裏込め
  SK12P10
  1:10YR3/3 亜角塊状 φ5mm L 緻密+ 可塑+ VIII層由来土(10YR6/8) φ5~10mm10%

SKI2 P11 1:10YR2/1 亜角塊状 φ5mm C L 緻密± 可塑± WII層 由来土(10YR6/8)φ3~10mm5%

- SKI 2 P12 1:10 VR2/1 亜角塊状 φ5mm CL 緻密士 可塑士 VIII層 由来土(10 VR6/8)φ3~10 mm5% 柱痕 2:10 VR5/6 角塊状 φ10 mm SL 緻密++ 可塑ー VIII層 由来土(10 VR6/8)φ10~30 mm30% 裏込め

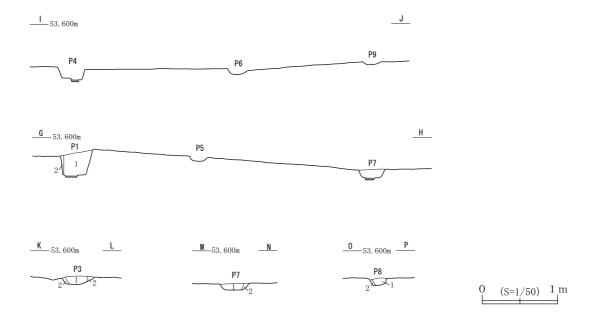
- 由来土(10YR6/8) φ10~30mm30% 裏込め S K I 2 P13 1:10YR2/1 亜角塊状 C L 緻密+ 可塑± WIII層由来土 (10YR6/8) φ5~50mm15% S K I 2 P14 1:10YR1.7/1~2/1 亜角塊状 φ5~7mm L 緻密± 可塑 + WIII層由来土φ1~5mm1% 柱痕 2:10YR4/2 亜角塊状 φ5~7mm L 緻密+ 可塑+ WIII層 由来土とⅢ層由来土が混在しマーブル状 裏込め

## 第30図 竪穴状建物跡(SKІ2②)



0 (S=1/50) 1 m

第31図 掘立柱建物跡(SB11①)



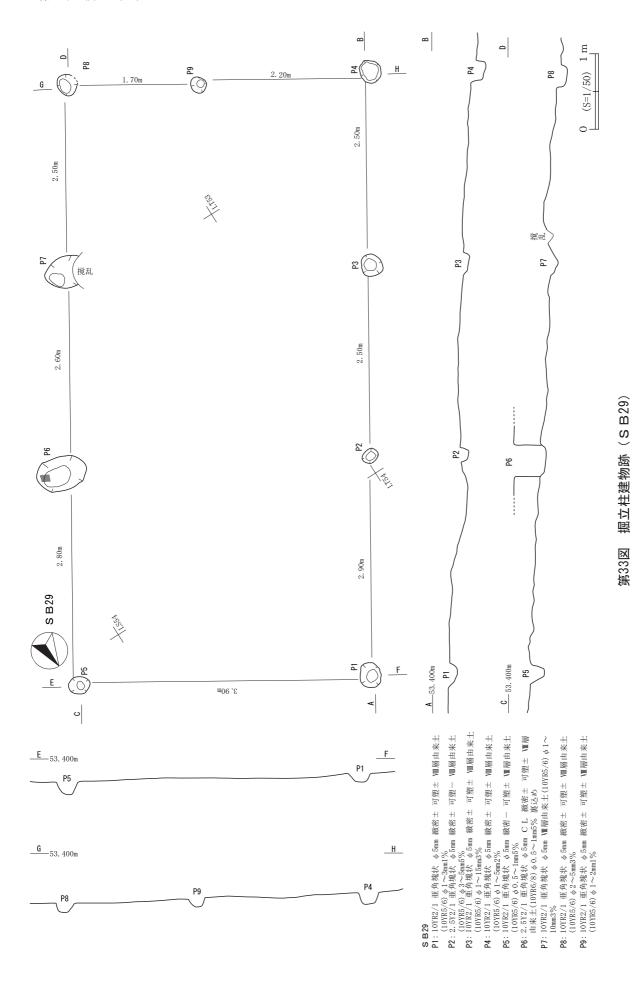
- S B 11 P1
  1:10YR1.7/1 亜角塊状 C L 緻密 可塑+ WIII層由来 土 φ 1 ~ 3mm1%
  2:10YR2/1 亜角塊状 C L 緻密 可塑+ WIII層由来土 φ 1 ~ 3mm5%
  S B 11 P2
  1:10YR1.7/1 亜角塊状 C L 緻密 可塑+ WIII層由来 土 φ 1 ~ 3mm1%
  2:10YR2/2 亜角塊状 C L 緻密 + 可塑+ WIII層由来 ゥ 1 ~ 3mm30%  $\phi 1 \sim 3 \text{mm} 30\%$ S B 11 P3

- SB11 P3
  1:10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密- 可塑+ WII層由来 土 φ 1~3mm1%
  2:10YR2/2 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ WII層由来土 φ 1~3mm30%
  SB11 P4
  1:10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密- 可塑+ WII層由来 土 φ 1~3mm1%
  2:10YR6/8 亜角塊状 SL 緻密 = 可塑+ 黒色土(10YR 1.7/1)1%
  SB11 P5
  1:10YR1.7/1 亜角塊状 L+C 緻密+ 可塑+ VIII層由来 来上 φ 10~15mm5%

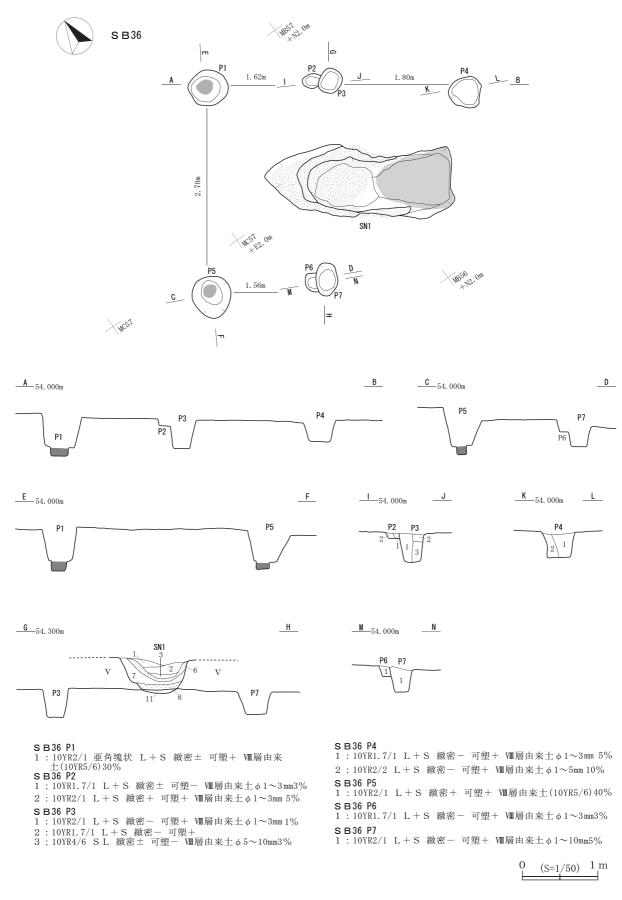
- SB11 P6 1:10YR1.7/1亜角塊状CL緻密-可塑+VIII層由来 土φ1~3mm1% 2:10YR6/8亜角塊状SL緻密±可塑+黒色土(10Y R1.7/1)1% SB11 P7 1:10YR2/1亜角塊状L+S緻密+可塑+ 2:10YR6/8亜角塊状L+S緻密++可塑-裏込め SB11 P8

2:101ro/ s聖用塊状 L + S 緻密 + 中 可望 — 美込め S B 11 P8 1:10YR2/1亜角塊状 L + S 緻密 + 可塑 + VIII層由来 ±(10YR6/6) φ1~3mm5% 2:10YR6/8亜角塊状 L + S 緻密 + + 可塑 + 黒色土 (10YR2/1)10%

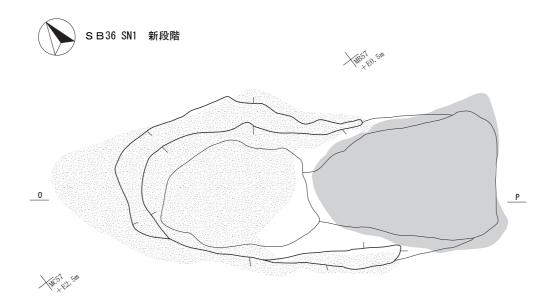
SB11 P9 1:10YR2/2亜角塊状CL緻密+可塑+WII層由来土 (10YR6/8) φ1~3mm1%

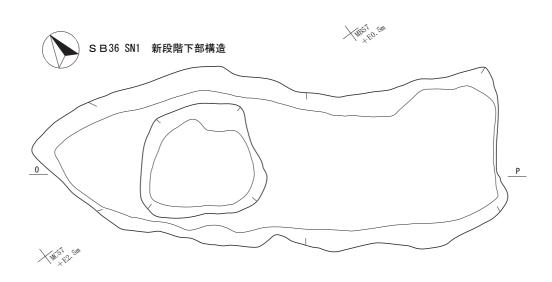


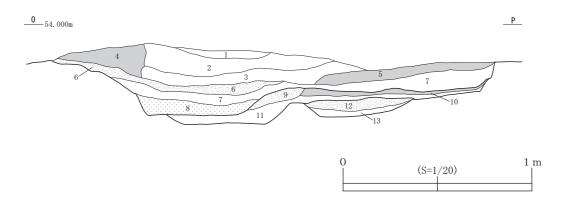
— 56 —



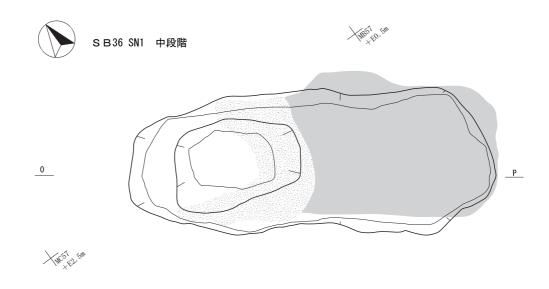
第34図 掘立柱建物跡(SB36①)

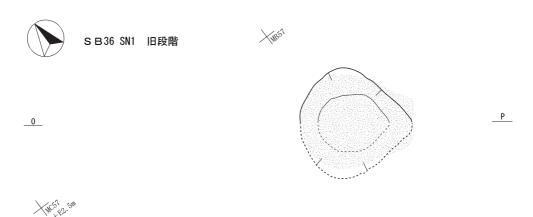






第35図 掘立柱建物跡(SB36②)



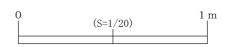


- S B 36 SN1 SPG-H SPO-P
  1:5YR2/1~7.5YR2/1 亜角塊状 φ5mm L 緻密+ 可塑 ± 焼土ブロックφ3~5mm3% 軽石φ1~3mm1~2% 2層との境に焼土ブロックφ30mm分布 カマド廃絶後の堆積土
  2:5YR2/1~7.5YR2/1より黄色い 亜角塊状 φ5mm S L 緻密++ 可塑ー~± 焼土ブロックφ3~5mm5~7%軽石φ1~3mm1~2% 3層との境に畑層由来土・焼土ブロックφ3~5mm分布 カマド廃絶後の堆積土
  3:5YR2/1~7.5YR2/1 亜角塊状 φ5mm S L 緻密+~+ + 可塑ー~生 焼土ブロックφ3~5mm7% 軽石φ1~3 mm7%
  4:7.5YR8/4~8/6 5YR8/4~8/6 角塊状 φ7~10mm S

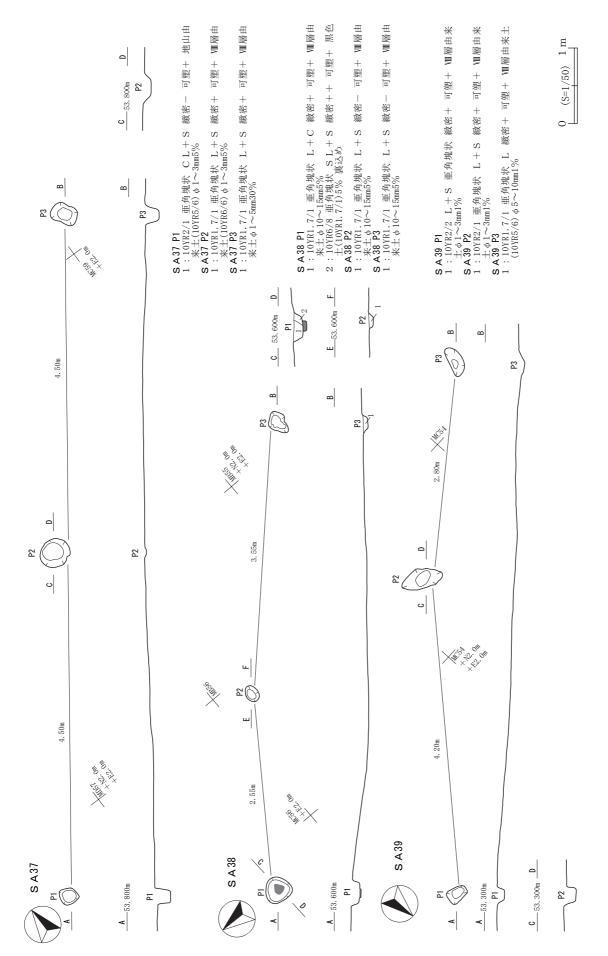
- mm7%
  4:7.5YR8/4~8/6 5YR8/4~8/6 角塊状 ゆ7~10mm S 緻密+++ 可塑- WI層由来土で作られた新段階カマドの天井崩落土 上部は白灰色が強いが下部は被熱により赤い
  5:10YR2/1 2.5Y5/2 角~亜角塊状 S L 緻密++ 可塑ー WI層由来土φ10~30mm50%~80% 灰の掻き出しで6層の火床面から出た焼土プロック
  6:5YR5/6~4/6 2.5YR5/6~4/6 亜角塊状 φ7mm L~C L 緻密+可塑ー 新段階の火床面 7:7.5YR2/1~5YR2/1 亜角塊状 φ5~7mm L 緻密+ 可塑土 WII層由来土φ1~5mm3% φ20mm1% III層由来土による新段階の下部構造覆土 中段階の火床面由来炭化物・焼土ブロックを含む

- 8:10YR2/2 亜角塊状 φ5~7mm L 緻密士 可塑士 焼土 ブロック(5YR5/6)φ1~10mm5%
  9:5YR5/6~4/6 2.5YR5/6~4/6 亜角塊状 φ7mm L~C L 緻密+ 可塑ー 中段階の火床面
  10:10YR2/1 2.5Y5/2 角~亜角塊状 S L 緻密++ 可塑ー中段階の火床面 WI層由来土の部分 灰の掻き出しで上面は乱れている
  11:10YR2/1 亜角塊状 L 緻密+ 可塑+ WII層由来土(10 YR8/4)φ5~10mm1% 白色粒φ5~7mm 焼土ブロックφ5~10mm3% 中段階の下部構造覆土
  12:5YR4/6 亜角塊状 L+C 緻密++ 可塑++ 焼土ブロックφ1~10mm20% 10YR3/4ブロックφ10mm1% 旧段階の火床面

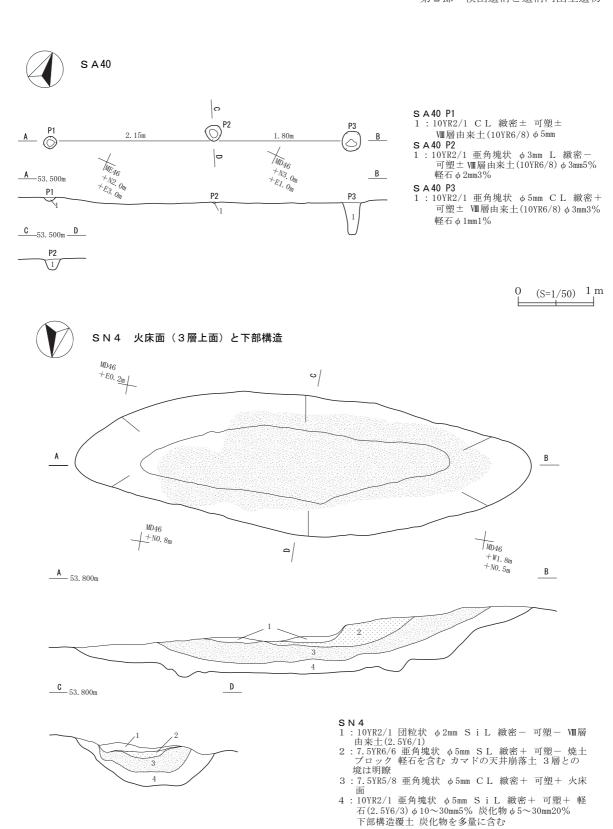
- 13:10YR2//1 亜角塊状 L 緻密+ 可塑+ 旧段階の下部 構造覆土



第36図 掘立柱建物跡(SB363)

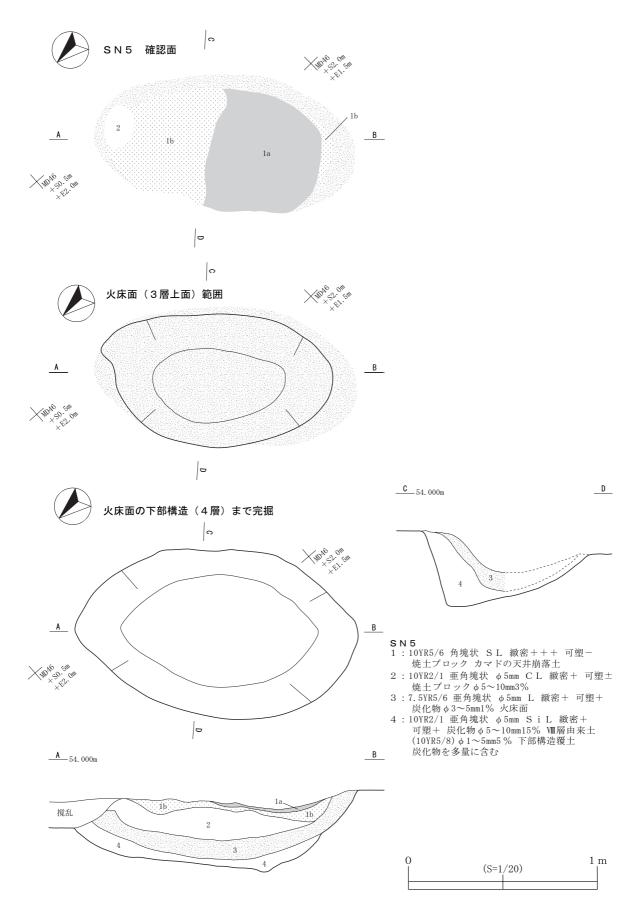


第37図 柱穴列 (SA37·38·39)



0 (S=1/20) 1 m

第38図 柱穴列(SA40)、かまど状遺構(SN4)



第39図 かまど状遺構(SN5)

# 第2表 柱穴様ピット(SKP)一覧

(寸法:cm)

	グリッド	確認層	長径	短径	深さ	重複	柱痕跡	抜取痕跡	層位	性質	混入物	挿
201	MC45	Ш	30	30	19	なし	不明	不明	1	7.5YR2/1 CL 緻密士 可塑土	VIII層由来土7.5YR5/8φ5mm1% 軽石φ1mm1%粉状	18
202	MD46	VIII	13	13	7	なし	なし	なし	1	10YR2/2 CL 緻密生 可塑生	VⅢ層由来土10YR6/8 φ 3~5mm3%	18
04	MC47	VIII	24	22	4	なし	なし	なし	1	10YR2/1	VⅢ層由来土10YR6/8 φ 3~5mm3%	18
:05	MD45	III	30	30	60	SKP206	なし	あり		10YR2/1 亜角塊状 φ5mm CL 緻密-	VⅢ層由来土10YR6/8 φ 2mm1%	
						より新			1	可塑+		
									2	10YR2/1 亜角塊状 φ5mm CL 緻密+ 可塑+	VⅢ層由来土10YR6/8φ2~5mm10%	18
06	MD45	III	35	35	37	SKP205 より旧	なし	なし	1	10YR2/1 亜角塊状 φ5mm CL 緻密- 可塑+	VIII層由来土10YR6/8 φ 2mm1%	
						3.7 III			2	10YR2/1 亜角塊状 φ5mm CL 緻密+ 可塑+	VII層由来土10YR6/8 φ 2~5mm10%	1
209	MC47	VIII	23	20	8	なし	なし	なし	1	10YR2/1 亜角塊状 φ5mm CL	VIII層由来土7.5YR5/6φ10mm3%	1
211	MD46	VIII	25	20	22	なし	なし	なし	1	2.5Y2/1 亜角塊状 φ10mm SiL 緻密± 可塑±	VⅢ層由来土10YR6/8 φ 1~5mm3%	1
212	MA51	VI	36	36	40	なし	22×18 丸材	あり	1	10YR4/3~4/4 亜角塊状 φ15~30mm SCL 緻密++ 可塑+	VⅢ層由来土10YR5/3 φ 5~15mm3%	
							7417		2	10YR4/3~4/4 亜角塊状 φ15~30mm SCL	VIII層由来土10YR5/6~6/6φ10~30m	1
010	I CE 4	van	0.0	10	0	<i>4</i> ×1	<i>4</i> ×1	<i>4</i> ×1	-1	緻密++ 可塑+	m5%	
216	LS54	VIII	20	16 17	8	なし	なし	なし	1	2.5Y2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密士 可塑士	VIII層由来土10YR5/8φ1~10mm5%	1
220	LR55 LR53	VIII	20	20	14	なしなし	なしなし	なしなし	1	10YR2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密+ 可塑± 2.5YR2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密± 可塑±	VIII層由来土10YR5/6 φ 5~10mm3% VIII層由来土10YR5/6 φ 1~50mm20%	1
25	LP57	VIII	30	30	5	なし	なし	なし		2.51R2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密土 可塑土 10YR2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密土 可塑土	VIII層由来土10YR5/6φ1~50IIII20% VIII層由来土10YR5/6φ3~10mm3%	
_		VIII			8				1			1
26	LR·LS55	VIII	25 24	23	16	なし	なし	なし	1	2.5Y2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密士 可塑士	VIII層由来土(10YR5/6) φ 1~5mm1%	1
30	MB46					なし	なし	なし	1	10YR2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密士 可塑士	VIII層由来土(10YR5/6) φ1~3mm1%	1
31	LS52	VIII	24	24	8	なし	なし	なし	1	10YR2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密士 可塑土	VIII居由来土(10YR5/6) φ1~3mm1%	1
34	MB51	VII	20	18	20	なし	なし	なし	1	10YR2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密士 可塑土	VIII居由来土(10YR5/6) φ1~5mm3%	1
35	MB51	VII	24	21	15	なし	なし	なし	1	10YR2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密士 可塑土	VIII居由来土(10YR5/6) φ1~5mm3%	1
36	MB51	VII	23	19	14	なし	なし	なし	1	10YR2/1 亜角塊状 φ5mm 緻密± 可塑±	VⅢ層由来土(10YR5/6) φ1~5mm3%	1
39	MC45 • 46	VIII	25	23	30	なし	なし	なし	1	10YR2/1∼1.7/1	VⅢ層由来土 φ 5~10mm10%	1
40	MF42	VII	32	30	21	なし	なし	なし	1	10YR2/1~1.7/1	VIII層由来土φ5~10mm2%	1
241	MD44	VII	25	25	12	なし	14×14 角材	なし	1	10YR2/1~1.7/1	VII層由来土φ5mm2% VIII層由来土φ10~30mm50%	1
									2	10YR5/3~10YR1.7/1	_	
242	MD45	VII	20	20	8	なし	14×14 角材	なし	1	10YR1.7/1~2/1	VIII層由来土φ 1 mm1%	1
									2	10YR4/2 裏込め	Ⅷ層由来土φ5~10mm30%	
251	MF49	Ⅷ上面	40	23	28	なし	なし	なし	_	_	_	1
52	MC53	Ш	27	20	15	なし	なし	なし	1	10YR1.7/1 亜角塊状 SL 緻密++ 可塑+	VIII層由来土(10YR4/4)φ1mm1%	1
53	MC54	VIII	35	30	10	なし	なし	なし	1	10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+	VⅢ層由来土(10YR5/6) φ1~3mm1%	1
	MC54	VIII	34	10	19	なし	なし	不明	1	10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+	VⅢ層由来土(10YR5/6) φ1~3mm1%	1
55									2	10YR2/2 亜角塊状 C 緻密+ 可塑+	VIII層由来土(10YR5/6) φ1~3mm5%	1
55				19	10	なし	なし	なし	1	10YR2/2 亜角塊状 C 緻密+ 可塑+	Ⅷ層由来土 φ 10~15mm3%	1
	MC54	VIII	20	13			なし	なし	1	10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+		_
258	MC54 MG51	VIII VII	20 29	20	9	なし	120			101K1.7/1 里月塊仏 CL 椒名丁 刊至丁	VIII層由来土(10YR5/6) φ1~3mm1%	
258 261					9	なし なし	なし	なし	1	10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+	WII層由来土(10YR5/6) φ1~3mm1% WII層由来土φ1~3mm1%	1
258 261 270	MG51	VII	29	20					1			1
258 261 270 271	MG51 MD50	VII VII	29 22	20 22	9	なし	なし	なし	1	10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+	VII層由来土 φ1~3mm1% VII層由来土 φ1~3mm1~3% VII層由来土(10YR6/8) φ1~3mm5%	1 1
258 261 270 271 281	MG51 MD50 MA53 LS57	VII VII VIII VIII上面	29 22 30 30	20 22 30 21	9 7 8	なし なし なし	なし なし あり	なし なし なし	1 1 2	10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR4/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+	VII層由来土 φ 1~3mm1% VII層由来土 φ 1~3mm1~3% VII層由来土 (10YR6/8) φ 1~3mm5% 黒色土 (10YR1.7/1)7%	1 1
258 261 270 271 281	MG51 MD50 MA53	VII VII	29 22 30	20 22 30	9	なしなし	なしなし	なしなし	1 1 2 1	10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密土 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR4/6 亜角塊状 L+S 緻密土 可塑土 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密土 可塑+	VII層由来土 61~3mm1% VII層由来土 61~3mm1~3% VII層由来土 (10YR6/8) 61~3mm5% 黒色土 (10YR1. 7/1) 7% VII層由来土 (10YR5/6) 61~3mm5%	1 1 1
258 261 270 271 281	MG51 MD50 MA53 LS57	VII VII VIII VIII上面	29 22 30 30	20 22 30 21	9 7 8	なし なし なし	なし なし あり	なし なし なし	1 1 2	10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR4/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+	VII層由来土 61~3mm1%  VII層由来土 61~3mm1~3%  VII層由来土 (10YR6/8) 61~3mm5%  黒色土 (10YR1. 7/1) 7%  VII層由来土 (10YR5/6) 61~3mm5%  VII層由来土 (10YR5/6) 61~3mm5%	1 1
258 261 270 271 281	MG51 MD50 MA53 LS57 MA57	VII VII VIII上面 VIII上面	29 22 30 30 25	20 22 30 21 25	9 7 8	なしなしなし	なし なし あり	なしなしなし	1 1 2 1 2	10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR4/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR6/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+	VII層由来土 6 1~3mm1%  VII層由来土 6 1~3mm1~3%  VII層由来土 (10YR6/8) 6 1~3mm5%  黒色土 (10YR1. 7/1) 7%  VII層由来土 (10YR5/6) 6 1~3mm5%  VII層由来土 (10YR5/6) 6 1~3mm5%  黒色土 (10YR1. 7/1) 1%	1 1 1
258 261 270 271 281	MG51 MD50 MA53 LS57	VII VII VIII VIII上面	29 22 30 30	20 22 30 21	9 7 8	なし なし なし	なし なし あり	なし なし なし	1 1 2 1 2	10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密土 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR4/6 亜角塊状 L+S 緻密土 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密土 可塑+ 10YR6/6 亜角塊状 L+S 緻密土 可塑+	VII層由来土 61~3mm1%  VII層由来土 61~3mm1~3%  VII層由来土 (10YR6/8) φ 1~3mm5%  黒色土 (10YR1. 7/1) 7%  VII層由来土 (10YR5/6) φ 1~3mm5%  VII層由来土 (10YR5/6) φ 1~3mm5%  黒色土 (10YR1. 7/1) 1%  VII層由来土 (10YR5/6) φ 1~3mm5%	1 1 1 1
2258 2261 2270 2271 2281 2282	MG51 MD50 MA53 LS57 MA57	VII VII VIII上面 VIII上	29 22 30 30 25 26	20 22 30 21 25 26	9 7 8 7	なし なし なし なし	なし なし あり なし	なし なし なし なし	1 1 2 1 2	10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR4/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR6/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+	VII層由来± ¢ 1 ~ 3mm1 %  VIII層由来± ¢ 1 ~ 3mm1 ~ 3%  VIII層由来± (10YR6/8) ¢ 1 ~ 3mm5 %  黒色± (10YR1. 7/1) 7%  VIII層由来± (10YR5/6) ¢ 1 ~ 3mm5 %  VIII層由来± (10YR5/6) ¢ 1 ~ 3mm5 %  黒色± (10YR1. 7/1) 1 %  VIII層由来± (10YR5/6) ¢ 1 ~ 3mm5 %  VIII層由来± (10YR5/6) ¢ 1 ~ 3mm5 %  VIII層由来± (10YR5/6) ¢ 1 ~ 3mm5 %	1 1 1
2258 2261 2270 2271 2281 2282	MG51 MD50 MA53 LS57 MA57	VII VII VIII上面 VIII上面	29 22 30 30 25	20 22 30 21 25	9 7 8	なしなしなし	なし なし あり	なしなしなし	1 1 2 1 2 1 2	10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR4/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR6/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR2/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+	VII層由来± 61~3mm1%  VII層由来± 61~3mm1~3%  VII層由来± (10YR6/8) 61~3mm5%  黒色± (10YR1. 7/1) 7%  VII層由来± (10YR5/6) 61~3mm5%  VII層由来± (10YR1. 7/1) 11%  VII層由来± (10YR5/6) 61~3mm5%  果色± (10YR1. 7/1) 11%  VII層由来± (10YR5/6) 61~3mm5%  VII層由来± (10YR5/6) 61~3mm5%  VII層由来± (10YR5/6) 61~3mm5%	1 1 1 1 1
2258 261 270 2271 2281 2282 2283	MG51 MD50 MA53 LS57 MA57 MA57	VII VIII VIII上面 VIII III	29 22 30 30 25 26 28	20 22 30 21 25 26 20	9 7 8 7 25	なし なし なし なし なし	なし なし あり なし なし	なし なし なし なし なし	1 1 2 1 2 1 2 2 1 2 2	10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR4/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR6/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR6/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR2/1 亜角塊状 L+S 緻密- 可塑+ 10YR2/1 亜角塊状 L+S 緻密- 可塑+ 10YR2/1 亜角塊状 S 緻密+ 可塑+ 10YR2/1 亜角塊状 S 緻密+ 可塑+	VIII層由来土 ¢ 1~3mm1%     VIII層由来土 ¢ 1~3mm1~3%     VIII層由来土 (10YR6/8) ¢ 1~3mm5%     黒色土 (10YR1.7/1)7%     VIII層由来土 (10YR5/6) ¢ 1~3mm5%     WIII層由来土 (10YR5/6) ¢ 1~3mm5%     エーリンス	1 1 1 1 1
2258 261 270 2271 2281 2282 2283	MG51 MD50 MA53 LS57 MA57	VII VII VIII上面 VIII上	29 22 30 30 25 26	20 22 30 21 25 26	9 7 8 7	なし なし なし なし	なし なし あり なし	なし なし なし なし	1 1 2 1 2 1 2	10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR4/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR6/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR2/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+	VIII層由来土 4 1~3 mm 1 %     VIII層由来土 4 1~3 mm 1~3 %     VIII層由来土 (10 YR 6/8) 4 1~3 mm 5 %     黒色土 (10 YR 1. 7/1) 7 %     VIII層由来土 (10 YR 5/6) 4 1~3 mm 5 %     黒色土 (10 YR 1. 7/1) 1 %     VIII層由来土 (10 YR 5/6) 4 1~3 mm 5 %     VIII層由来土 (10 YR 5/6) 4 1~3 mm 5 %     VIII層由来土 (10 YR 5/6) 4 1~3 mm 5 %     VIII層由来土 (10 YR 5/6) 4 1~3 mm 5 %     VIII層由来土 (10 YR 5/8)     VIII層由来土 (10 YR 5/8)	1 1 1 1 1 1 1 1
255 258 258 261 270 2271 2281 2282 2283 2283	MG51 MD50 MA53 LS57 MA57 MA57	VII VIII VIII上面 VIII III	29 22 30 30 25 26 28	20 22 30 21 25 26	9 7 8 7 25	なし なし なし なし なし	なし なし あり なし なし	なし なし なし なし なし	1 1 2 1 2 1 2 2 1 2 2	10YR2/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 CL 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR4/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR1.7/1 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR6/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR6/6 亜角塊状 L+S 緻密+ 可塑+ 10YR2/1 亜角塊状 L+S 緻密- 可塑+ 10YR2/1 亜角塊状 L+S 緻密- 可塑+ 10YR2/1 亜角塊状 S 緻密+ 可塑+ 10YR2/1 亜角塊状 S 緻密+ 可塑+	VIII層由来土 ¢ 1~3mm1%     VIII層由来土 ¢ 1~3mm1~3%     VIII層由来土 (10YR6/8) ¢ 1~3mm5%     黒色土 (10YR1.7/1)7%     VIII層由来土 (10YR5/6) ¢ 1~3mm5%     WIII層由来土 (10YR5/6) ¢ 1~3mm5%     エーリンス	1 1 1 1 1 1

# 第3節 出土遺物

縄文時代、弥生時代、平安時代・中世の遺物が出土した。遺構内で出土した遺物については遺構の時期を示す遺物は少ない。遺構外でも、撹乱により原位置を留めていない遺物が多かった。しかし調査区中央部に位置する埋没沢の堆積土は撹乱が少なく、縄文時代早期の土器が多量に出土した。

掲載した遺物には、土器と石器・石製品それぞれに1から通し番号を付した。

以下、出土遺物の概要について、時代別に遺構内出土遺物も取り上げながら記述する。

### 1 縄文時代の遺物

### (1) 土器 (第40~48図、図版23・24)

遺構内外合わせて613点の縄文土器片が出土し、198点を掲載した。早期を第Ⅰ群、前期を第Ⅱ群、中期を第Ⅲ群、後期を第Ⅳ群、晩期を第Ⅴ群として大別し、可能なものは文様要素と施文技法によって分類した。

# 第 I 群 縄文時代早期 (第40~46図5~123、図版23・24)

すべて尖底の深鉢形土器である。多くは砲弾形だが、一部にキャリパー形と推定できるものもある。 口縁は基本的に平縁だが、山形の小突起があるものが認められる。ごく少数だが胎土に繊維が含まれ ているものが確認できる。内外面共に調整痕が確認できる。

以下の基準を設け、7類に分類した。

a類:口縁部文様帯に、縦に長い山形の文様が描かれているもの。

**b 類**:口縁部文様帯が横線によって区画され、その中を縦線で分割してから、斜線で構成され た幾何学的文様が描かれているもの。

**c 類**:口縁部文様帯に、斜線と鋸歯文で構成された横位に展開する文様が描かれているもの。

**d類**:口縁部文様帯に、横位多段の文様が貝殻腹縁文と刺突によって施されているもの。

e 類: 横位の平行沈線が多数描かれているもの。

f 類:キャリパー形で、胴部に横位の鋸歯文が描かれているもの。

**g類**: 文様が確認できないもの。 貝殻条痕もしくは櫛歯条痕しか確認できないものは、調整痕 のみとして本類に含めている。

# 第 I 群 a 類(第40図 5 ~ 7 ・15~22、第41図23~33、図版23)

口縁部文様帯に、縦に長い山形の文様が描かれている土器である。主な文様は沈線で描かれており、 沈線両端の始末は粗く、先細っている。口縁は基本的に平縁で、山形の小突起のあるものが認められる  $(5 \cdot 6 \cdot 15 \cdot 21 \sim 23 \cdot 25)$ 。口縁部の文様構成が 3 種類あり、口縁の直下に山形の文様が描かれているもの  $(15 \sim 17)$ 、口縁に沿って横位の沈線が描かれているもの  $(5 \sim 7)$ 、口縁に沿って刺突列が施されているもの  $(21 \sim 24)$  がある。

 $5 \sim 7$  は同一個体で、口唇部に刻みが施されている。 $5 \sim 7 \cdot 28 \cdot 31$ は貝殻条痕による器面調整の上から文様が描かれている。 $5 \sim 7 \cdot 18 \cdot 20 \cdot 21 \sim 33$ は、半裁竹管による 2 条一組の沈線で文様が描かれており、 $21 \sim 23$ は刺突列も半裁竹管によって施されている。 $15 \cdot 24$ は、直線的な沈線に沿って鋸

歯状の沈線が描かれている。25は本類の基準に当てはまらないが、口縁の特徴と刺突列の施し方、及び法量が比較的小さいことから、簡略化された本類と判断した。

### 第 I 群 b 類 (第41図34~44、第42図45~55、第43図56·57、図版23)

口縁部文様帯が横線によって区画され、その中を縦線で分割してから、斜線で構成された幾何学的文様が描かれている土器である。主な文様は沈線で描かれている。口縁は基本的に平縁で、山形の小突起のあるものが認められる  $(34\sim36\cdot48\sim50)$ 。文様要素が 3 種類あり、沈線のみで文様が構成されているもの  $(34\sim39\cdot56\cdot57)$ 、沈線の間に刺突が施されているもの  $(40\sim47)$ 、沈線の間に貝殻腹縁圧痕が施されているもの  $(48\sim55)$  がある。

56・57は同一個体である。砲弾形の尖底土器で、口縁部文様帯には貝殻条痕による器面調整の痕跡があり、その上から文様が描かれている。35・36・39・40も、貝殻条痕による器面調整の上から文様が描かれている。36は、口縁の内側に刻みが施されている。刺突の施文具として、40は竹管、41~43は先端に丸みのある棒状工具、44~47は先端の尖った棒状工具が使われている。

# 第 I 群 c 類 (第40図 8、第43図58~71、第44図72~75、図版23·24)

口縁部文様帯に、斜線と鋸歯文で構成された横位に展開する文様が描かれている土器である。主な文様は沈線で描かれている。口縁は基本的に平縁で、山形の小突起のあるものが認められる(60・62~66)。中でも66は小突起の頂点部が肥厚している。文様要素が2種類あり、沈線のみで文様が構成されているもの(58~61)、沈線の間に貝殻腹縁圧痕が施されているもの(62~75)がある。

67・75は貝殻条痕による器面調整の上から文様が描かれている。

a~c類は、主に沈線で文様を描き、貝殻腹縁圧痕や刺突を施す場合があることから、吹切沢式か 寺の沢式に併行すると推定される。

# 第 I 群 d 類 (第40図 9、第44図76~81、図版23·24)

口縁部文様帯に、横位多段の文様が貝殻腹縁文と刺突によって施されている土器で、沈線は用いられていない。口唇部には刻みがあり、口縁は基本的に平縁で、山形の小突起のあるものが認められる (76~80)。口縁部文様帯は横位の爪形刺突や貝殻腹縁圧痕の列で区画されている。区画内には、貝殻腹縁圧痕の列が3段施されており、段ごとに貝殻腹縁圧痕の傾きを互い違いにすることで羽状の文様を構成している。76は口縁部文様帯より下の胴部に、67は内面に、貝殻条痕による器面調整が確認できる。9は口縁の小突起の頂点に刻みがあり、貝殻ではなく棒状か板状の工具の圧痕で羽状の文様を描いているが、法量が比較的小さいことから、変則的な施文技法を用いられた土器と判断して本類に含めた。本類は坂下Ⅱ遺跡でⅠ群F類として分類されているものに相当し、鳥木沢式や蛍沢AⅡ式に比定される。

## 第 I 群 e 類 (第44図82・83、図版24)

横位の平行沈線が多数描かれている土器である。貝殻条痕による器面調整の上から平行沈線が描かれている。82は小破片であるが断面の湾曲が確認できること、器厚も薄いことから、法量は他類より小さいと考えられる。吹切沢式に併行すると推定される。

# 第 I 群 f 類 (第40図10、第44図84~86、第45図87~90、図版23·24)

断面に屈曲部分が認められることからキャリパー形と推定され、胴部に横位の鋸歯文が描かれている土器である。文様は主に沈線で描かれている。口縁は欠損している。屈曲部には横位の沈線や粘土

粒の貼付 (10・84・85・89・90)、横位の刺突列 (86) が施されている。84・85・87は文様が半裁竹管による2条一組の沈線で描かれている。

器形や幾何学的な文様構成から、物見台式に併行すると判断した。

# 第1群g類(第40図10~14、第45図91~106、第46図107~123、図版23・24)

文様が確認できないもの。貝殻条痕もしくは櫛歯条痕しか確認できないものは、調整痕のみとして本類に含めている。口縁は基本的に平縁だが、成形が粗いために波打っているように見える部分がある(91・92・94・95・98~100)。口縁に山形の小突起のあるものが認められる(96・97・101・103)。93・102は刻みによって突起が作り出されている。口縁部破片(91~103・117)と底部付近の破片(118~123)を観察した結果、すべて砲弾形の尖底土器と判断した。尖底には丸みのある円錐形のものと、乳頭状に底部が突出するものがある。器面調整の痕跡が3種類あり、痕跡がほとんど確認できないもの(91~98・100・101・118・119・121~123)、主に外面に貝殻条痕もしくはそれを模した工具で横方向に器面調整した痕跡が明瞭に確認できるもの(99・104~114)、櫛歯状の条痕が明瞭に確認できるもの(102・103・115~117)がある。

102・103は湾曲していて器厚が薄いことから、比較的法量が小さい土器と判断できる。114は、サルボウのような放射肋が広くて低く平たい貝によって条痕が施されている。

# 第Ⅱ群 縄文時代前期 (第46図124~131、図版24)

縄文時代前期の中でも後半の時期と推定される。胎土が粗く繊維を含んでおり、器厚が厚く、撚糸文や単節の縄文が施されている土器である。124は平縁で、RL縄文が施されている。125は口縁部文様帯にR原体による網目状撚糸文、胴部にRL縄文が施されている。126・127はR撚糸文が施されている。128はLR、129~131はRL縄文が施されている。本群は円筒下層c式かd式に比定される。

# 第Ⅲ群 縄文時代中期 (第46図132~135、図版24)

縄文時代中期の中でも後半の時期と推定される。胎土は第II 群と比較して緻密である。132は平縁で頸部から口縁に向かってやや開いており、肥厚した口縁と頸部に横位で2条一組の沈線が施されている。沈線の前に、LR縄文が施されている。口縁の特徴が榎林式に類似していることから、大木8 b 式に併行すると判断した。133はR L、134はL R 縄文の上から、縦位の沈線を2~3条一組で施している。沈線は浅くて不均一な太さの粗い施し方をしている。沈線の特徴が中の平3式や最花式に類似していることから、大木9式に併行すると判断した。135はLの無節縄文の上から、縦長の隅丸方形の文様を沈線で描いており、大木10式に比定される。

第Ⅳ群 縄文時代後期(第40図 1 · 2 、第46図136~139、第47図140~181、第48図182~190、図版23· 24)

縄文時代後期の中でも前半の時期と推定される。胎土は第Ⅲ群と比較して緻密で器厚は薄いが、第 V群と比較すると粗砂を含んでおり器厚は厚い。以下の基準を設け、4類に分類した。

a類: 撚糸文か縄文の上から文様が沈線で描かれ、磨消縄文や充填縄文が用いられていないも の。 **b類**:口縁に沿って爪形刺突列が施されているもの。

**c 類**:無文もしくは撚糸文か縄文の上から文様が沈線で描かれ、磨消縄文や充填縄文が用いられているもの。

d類: 撚糸文か縄文のみが施されているもの。

# 第Ⅳ群 a 類 (第46図136~139、第47図140、図版24)

燃糸文か縄文の上から文様が沈線で描かれ、磨消縄文や充填縄文が用いられていない土器である。 136・137はR原体の撚糸文の上から横位の楕円形などの文様が沈線で描かれている。138~140はLR 縄文の上から文様が沈線で描かれており、140には縦位の波状文や渦巻文が描かれている。

馬立式・沖附(2)式・蛍沢式などの型式名が提唱されている縄文時代後期初頭の土器で、類例としては日廻岱B遺跡で出土したIV群 a 類-2 が挙げられる。

### 第Ⅳ群 b 類 (第47図141~142、図版24)

口縁に沿って爪形刺突列が施されている土器である。刺突により押された粘土が粒状に盛り上がっている。口縁は平縁で、口唇部に粘土粒貼付による突起がある。胴部には無節のL縄文が施されている。三十稲場式に併行する。

# 第Ⅳ群 c 類 (第40図 1、第47図143~149、図版23·24)

無文もしくは撚糸文か縄文の上から文様が沈線で描かれ、磨消縄文や充填縄文が用いられている土器である。1・143は無文の地に沈線で文様が描かれている。144~147はLR縄文の上から文様が沈線で描かれ、磨消縄文や充填縄文技法が用いられている。144には貼り付けられた粘土粒が剥落した痕跡がある。148・149は同一個体で、無文の鉢形土器と推定される。口縁は平縁で器厚は薄く、表面はよく磨かれている。十腰内I式に比定される。

# 第Ⅳ群d類(第40図2、第47図150~190、図版23・24)

撚糸文か縄文のみが施されている土器である。150は無節のL原体による網目状撚糸文が施されている。151は無節のL原体、152~154は無節のR原体による撚糸文が施されている。155は上半にRL、下半にLR縄文が施され羽状縄文を構成している。156~184・188はLR縄文、185~187はRL縄文が施されている。156・157は口縁部破片で平縁、188~190は底部破片で平底である。粗製深鉢形土器の破片であり、 $a\sim c$ 類と併行して作られたと推定される。

#### **第 V 群 縄文時代晩期** (第48図191~198、図版24)

口縁部文様帯が横位の沈線で区画されており、胴部に地文がある土器(192・193)、もしくは地文のみの土器(191・194~198)である。全てLR縄文が施されている。191は口縁部破片で平縁、198は底部破片で平底である。大洞BC~C2式に比定される。

### **(2)石器**(第48~55図、第3表、図版25)

遺構内外合わせて石器は264点出土した。その内、255点は剥片石器である。石鏃・石錐・石匙・箆 状石器・スクレイパー・剥片・二次加工のある剥片・細片に分類し、68点を掲載した。石材はほとん どが頁岩で、5~7が玉髄、9・10が鉄石英、30が安山岩である。出土した石器の内9点は礫石器で ある。磨石・台石・敲打痕のある礫に分類した。石材はほとんどが安山岩で、73のみ流紋岩である。 掲載した石器の素材・法量については、第3表に記載している。

### 石鏃 (第49図5~14、図版25)

10点出土した。  $5 \sim 8$  は凹基無茎、  $9 \cdot 11$ は平基無茎、  $10 \cdot 12$ は凸基有茎、  $13 \cdot 14$ は平基有茎で、 14の基部にはアスファルトが付着している。

### **石匙** (第49図 2 · 15~18、第50図19~22、図版25)

9点出土した。つまみを上にすると斜めに刃部がついているが、2・15~17・19~21は刃部が縦に近い角度で、18は横に近い。22は刃部先端の破片と推定されるが、刃部の角度は不明である。

# 石錐 (第50図23·24、図版25)

2点出土した。23・24いずれも二次加工によって剥片に尖端が作り出されたもので、尖端以外は素材剥片の形が残っており、尖端とつまみの明瞭な境はない。

### **箆状石器**(第50図25~32、第51図33~40、第52図41~46、図版25)

22点出土した。平面形状が二等辺三角形・台形・短冊形に整えられている石器だが、平面形状には 分類できるほど明瞭な境はない。29・30は、素材剥片の縁辺をそのまま下端の刃部としている。これ らを、25~28・31~46のように二次加工によって刃部が作り出されているものと区別してトランシェ 様石器と呼ぶ例もある。しかし刃部が摩耗すると、二次加工が加えられ再び刃部を作り出して使われ ているという説があり、下端の刃部に二次加工が有るか無いかによって区別することは出来ないと考 え、箆状石器として一括して扱った。

### スクレイパー (第49図1、第52図47~52、第53図53~60、図版25)

18点出土し、15点掲載した。不定形で、連続的な二次加工によって急角度の刃部が作り出されている剥片である。

# 剥片(第53図61・62、第54図63~66、図版25)

140点出土し、6点掲載した。二次加工がなく、1 cm角以上の剥片である。重量は $0.5\sim63.2$ gのものがあった。 $61\sim65$ は素材の色・質感が同様であることから、同一母岩より剥離された剥片と判断した。接合はしなかったが、法量が近似していることや背面の剥離の様子から、連続的に縦長剥片を採取したものと推定される。 $61\sim63\cdot65$ は自然面が残っているために製品の素材に使われず捨てられた可能性がある。66は上端と下端に刃部ができるように剥離されている。

### **二次加工のある剥片**(第49図3・4、第54図67・68)

19点出土し、4点掲載した。不定形で、二次加工のある剥片である。3は素材剥片の打点付近に、4は両縁辺部に二次加工が加えられている。67・68は欠損しているため全体形は不明だが、二次加工によって素材剥片の平面形がほとんど失われていることから、製品にするために二次加工が加えられたものと推定される。

#### 細片

35点出土した。二次加工がなく、1cm角未満の剥片である。重量は0.1~1.8gである。

# 磨石 (第54図69~72、第55図73・74、図版25)

6点出土した。磨り面を確認できる礫である。2種に分類でき、 $69\sim71$ は扁平な円礫なのに対し、 $72\sim74$ は三角柱状の亜角礫である。 $69\sim71$ は、円礫の平坦面に磨り面がある。 $72\sim74$ は三角柱の稜線部分に細長い磨り面があり、72は2か所、 $73\cdot74$ は1か所確認できる。 $72\sim74$ は縄文時代早期に見ら

れる形態の磨石である。

### 台石 (第55図75、図版25)

1点出土した。75は大型の亜角礫の破片で、磨り面がある。被熱により赤く変色していることから、炉を囲んでいる礫が作業台として使用されたと推定される。

#### 敲打痕のある礫 (第55図76・77、図版25)

2点出土した。敲打痕を確認できる棒状の亜円礫である。76・77いずれも平坦な面に敲打痕が確認できるが、76は平坦面の全体に敲打痕が確認できるのに対し、77は平坦面の中央よりやや上寄りの位置に敲打痕が集中していることから、若干使用法が違っていた可能性がある。

76・77のほかに、敲打痕の確認できない棒状をした亜円礫が 4 点出土している。法量は76・77と類似しており長さ $13\sim20$ cm、幅  $4\sim6$  cm、厚さ約 4 cmで、内 2 点は76・77と同じグリッドから出土している。76・77と同様に使用するため遺跡内に持ち込まれた礫と推定される。

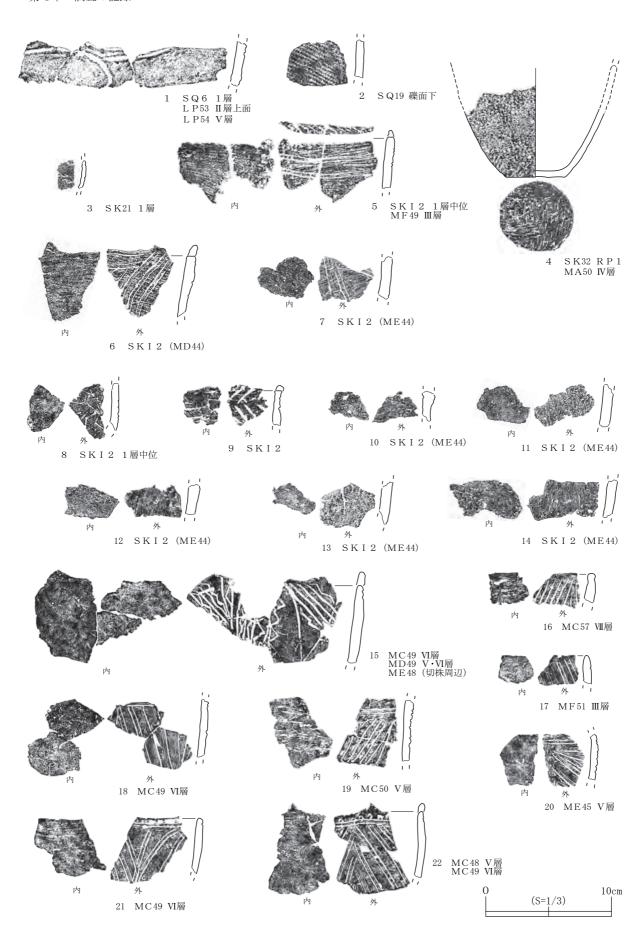
### 2 弥生時代の遺物

# (1) 土器 (第40図3、第48図199~214、図版24)

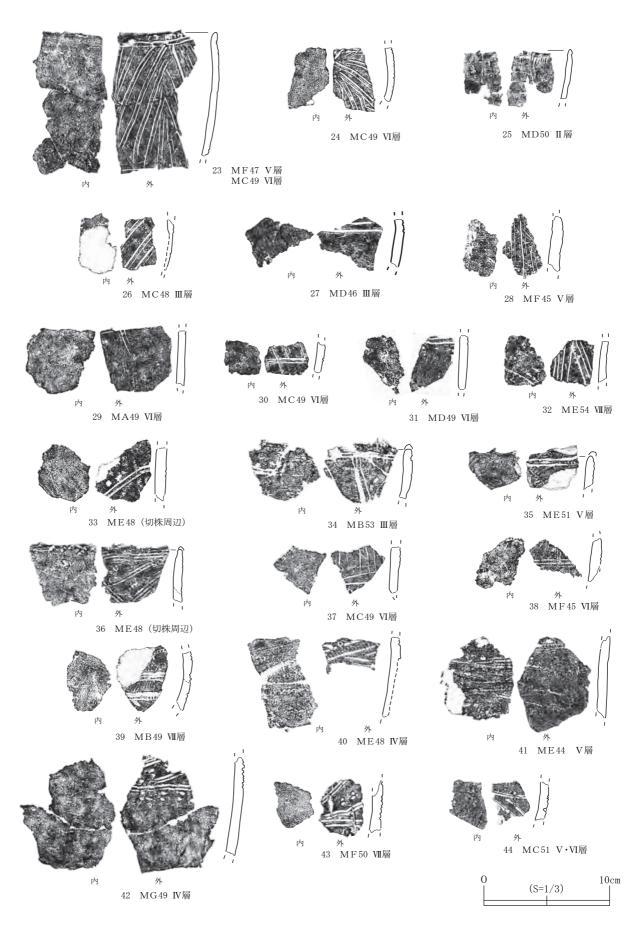
17点出土した。うち、199・200は弥生時代中期、3・201~214は弥生時代後期の土器である。199・200は同一個体で、波状口縁の口唇には丁寧に整形された面があり、口縁部で緩やかに開く器形である。R L 縄文の上から横線が沈線で描かれている。田舎館式に併行すると推定される。201~203は口縁部破片で、整形が粗いため若干波打っているが平縁である。201・202は口縁に沿って、203は口縁からやや離れた位置に、L 原体による綾絡文が施されている。201は綾絡文の下に無文部分を挟んで L 原体による撚糸文が施されている。3 は L 原体により 綾絡文が施されている。204は無条の r 原体、205は無節のR 原体、206~213は無節のL 原体により、撚糸文が施されている。214は無節のL 原体により、綾絡文と撚糸文が施されている。206~209は条の間隙が大きい絡条体が用いられている。204・210は、施文された撚糸文同士の間隙が大きい。3・201~214いずれも、縄文時代後期の土器に似て胎土は緻密で、整形が粗く表面に凹凸があり、器厚は比較的薄いが不均一である。小坂 X 式に比定される。

- 3 平安時代・中世の遺物
- **(1) 土師器** (第48図215~217、図版24)
  - 3点出土した。厚み・湾曲からすべて甕と推定される。215は口縁部である。
- (2) 砥石(第55図78、第3表、図版25)

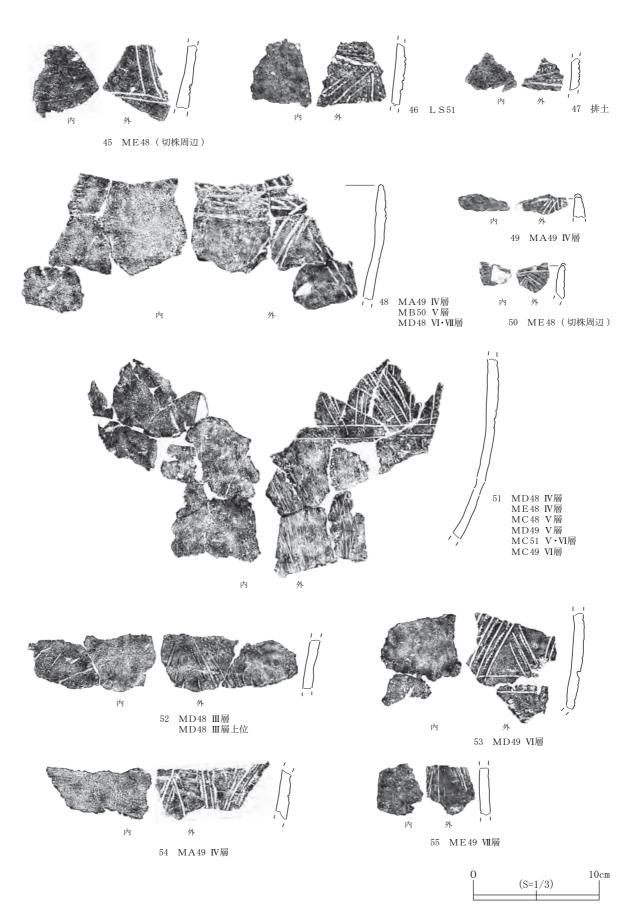
1点出土した。78は泥岩を素材とし、4面の研磨面がある。表の研磨面に、横位の線条痕を16条確認した。平安時代から中世の遺物と判断した。



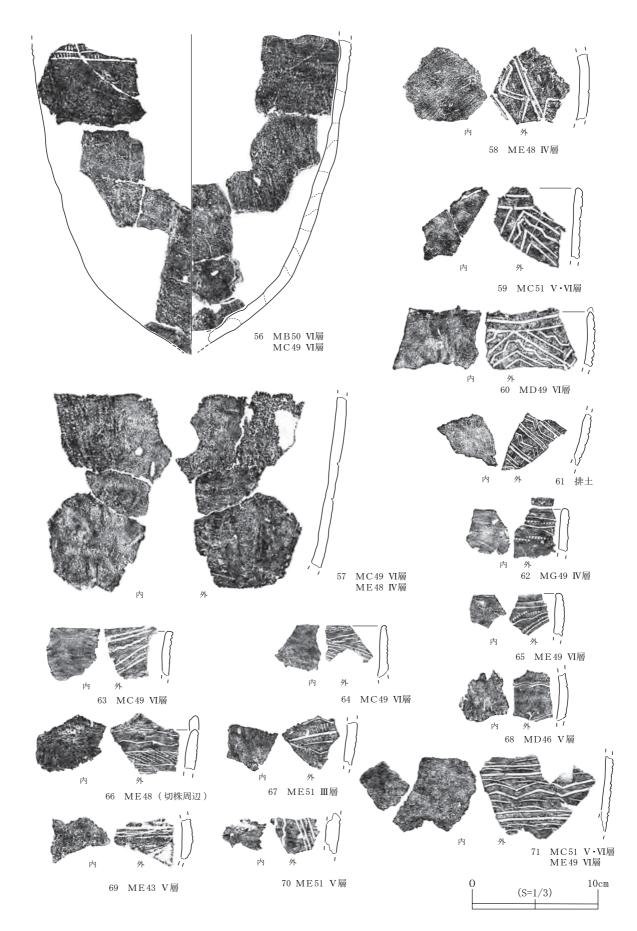
第40図 遺構内出土土器・遺構外出土土器①



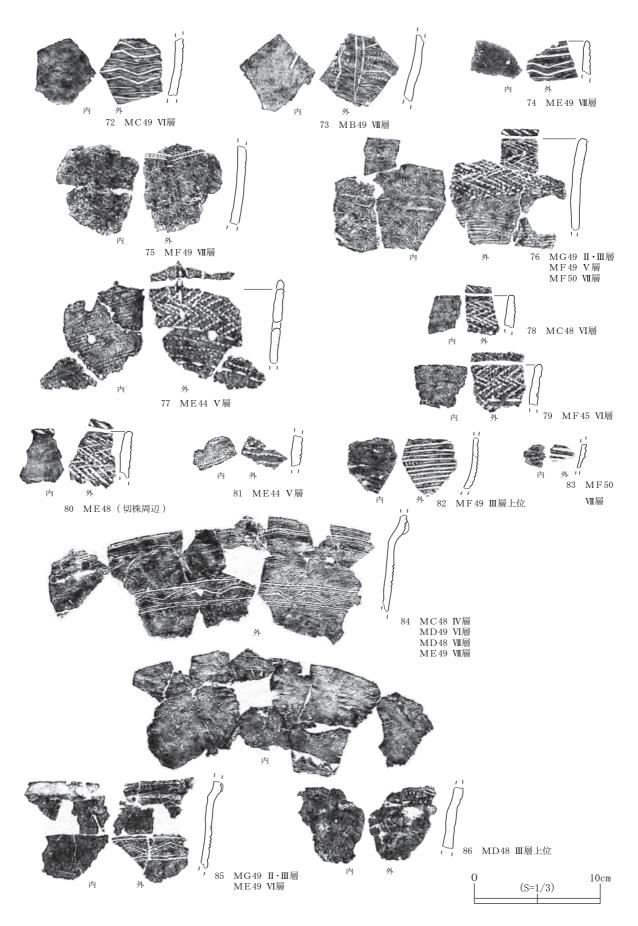
第41図 遺構外出土土器②



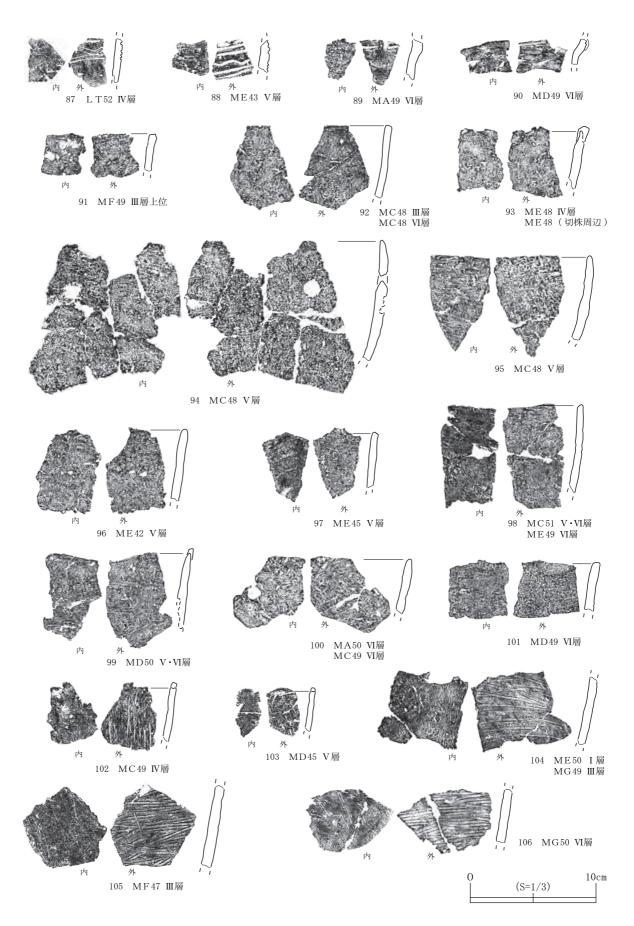
第42図 遺構外出土土器③



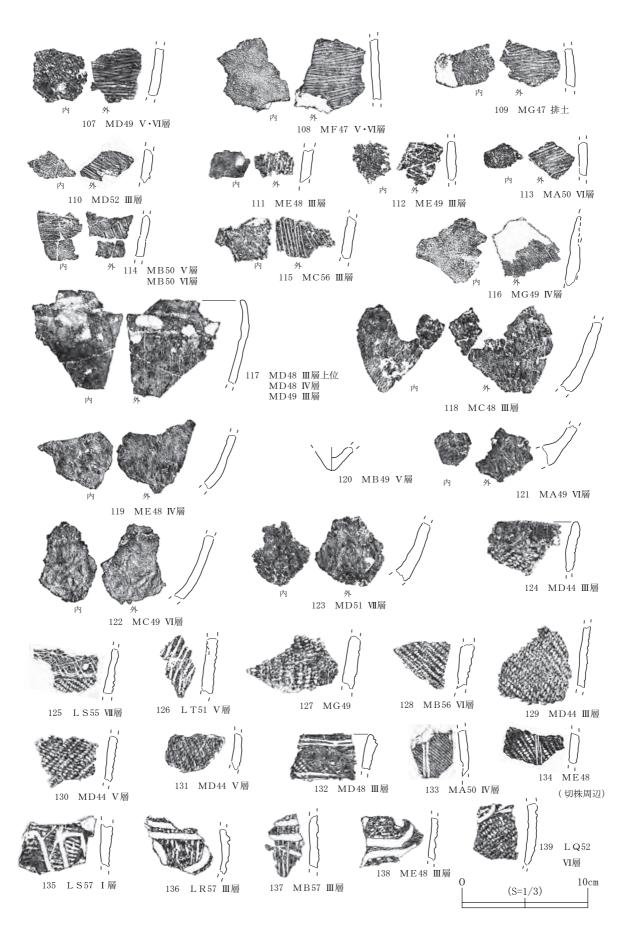
第43図 遺構外出土土器④



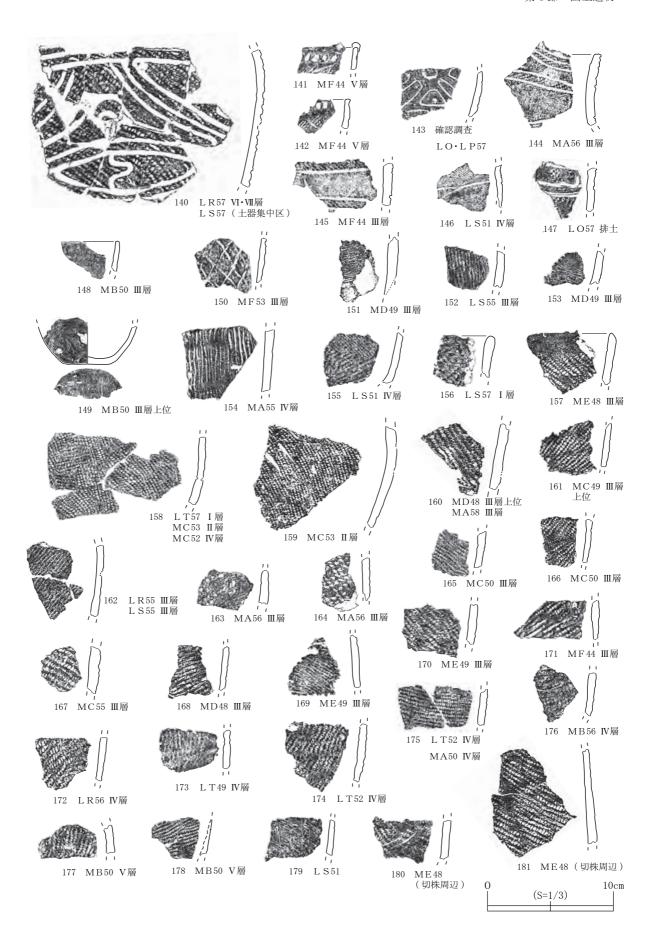
第44図 遺構外出土土器⑤



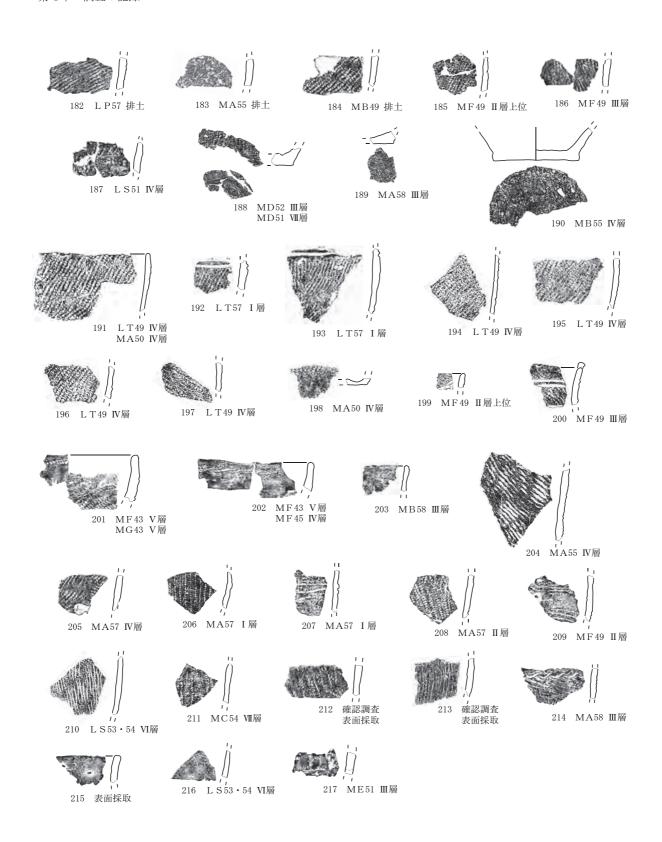
第45図 遺構外出土土器⑥

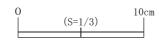


第46図 遺構外出土土器⑦

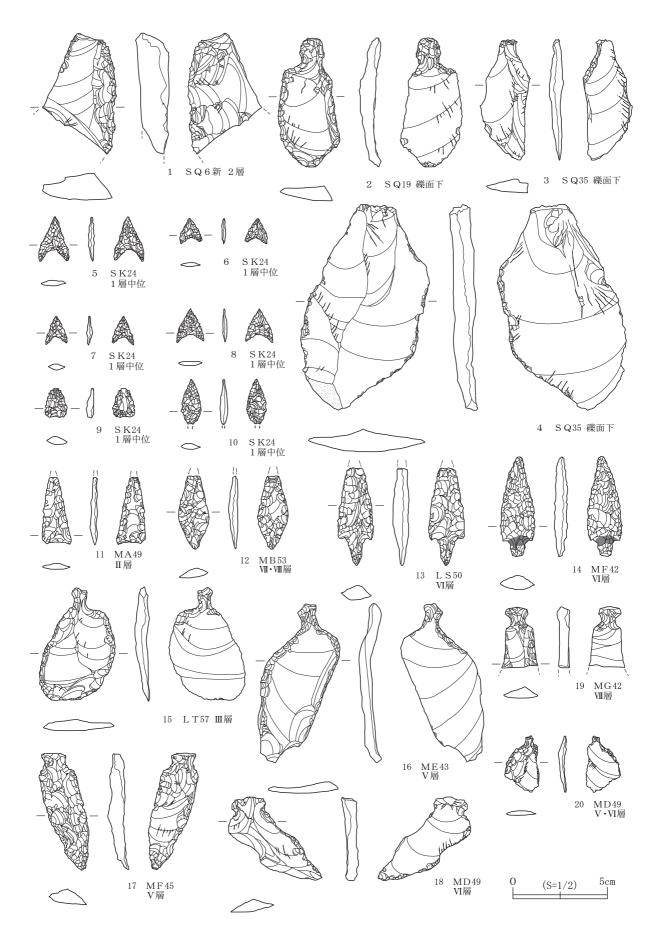


第47図 遺構外出土土器⑧

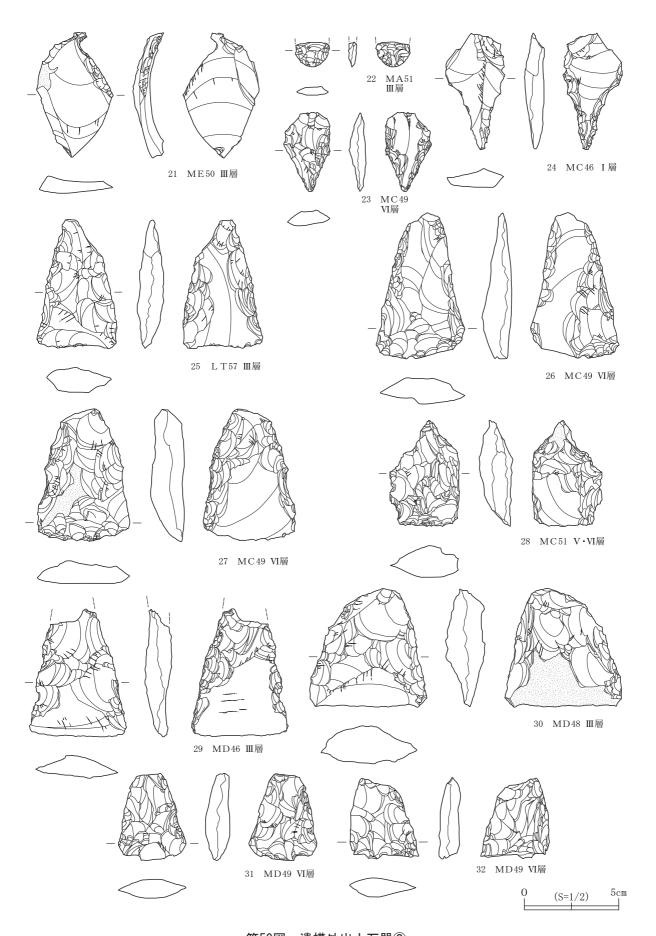




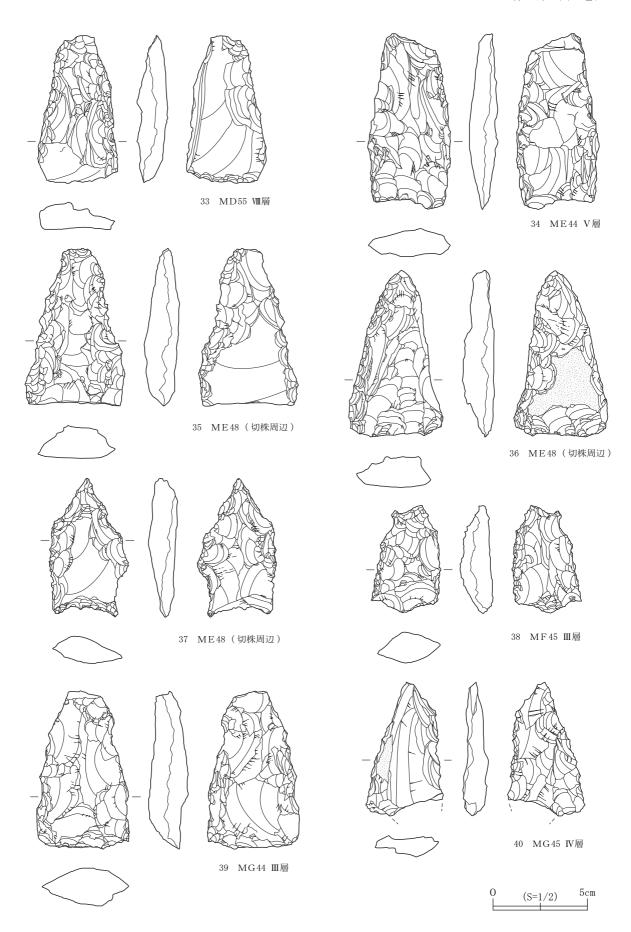
第48図 遺構外出土土器⑨



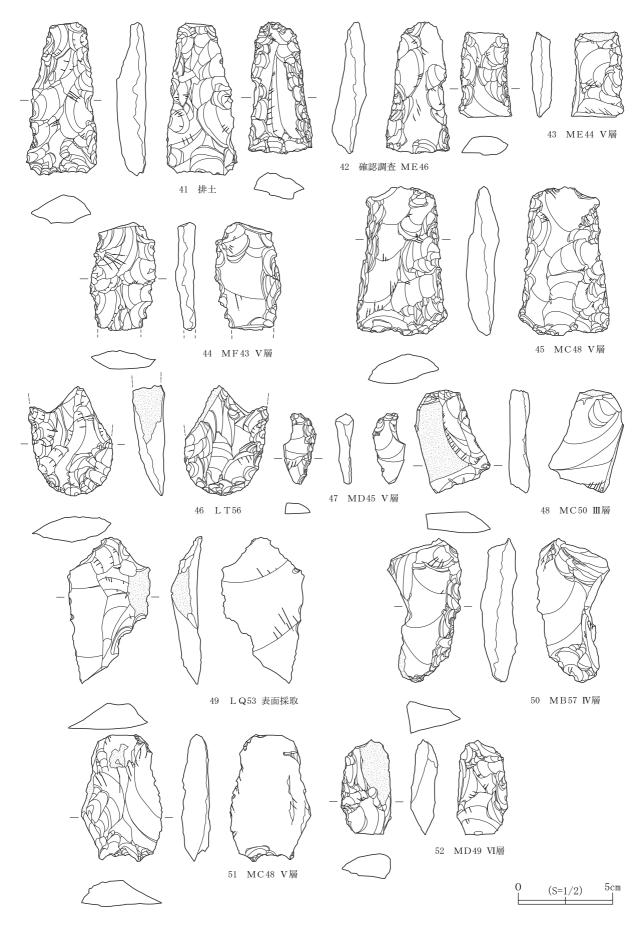
第49図 遺構内出土石器・遺構外出土石器①



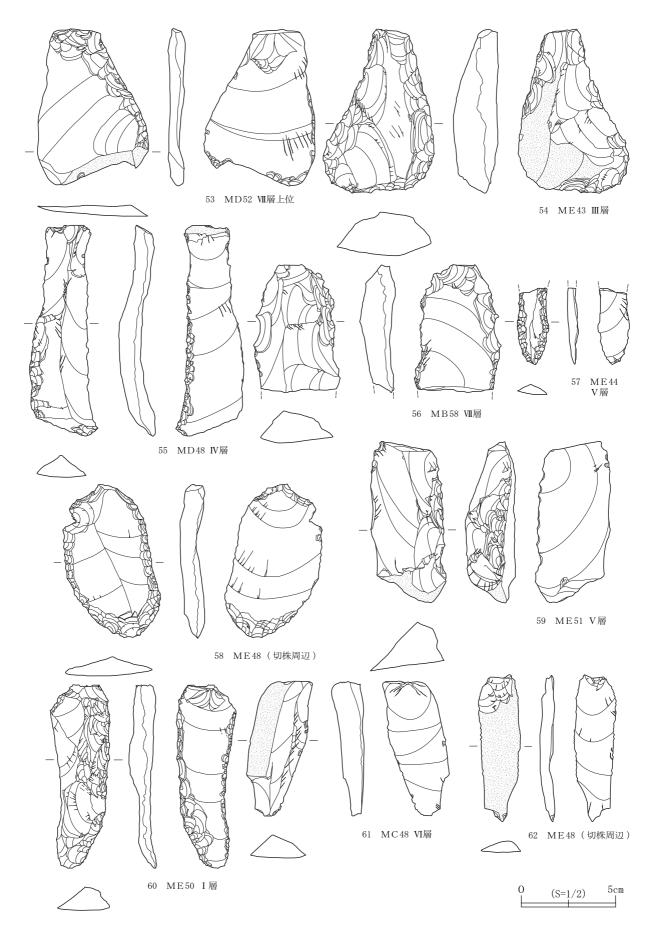
第50図 遺構外出土石器②



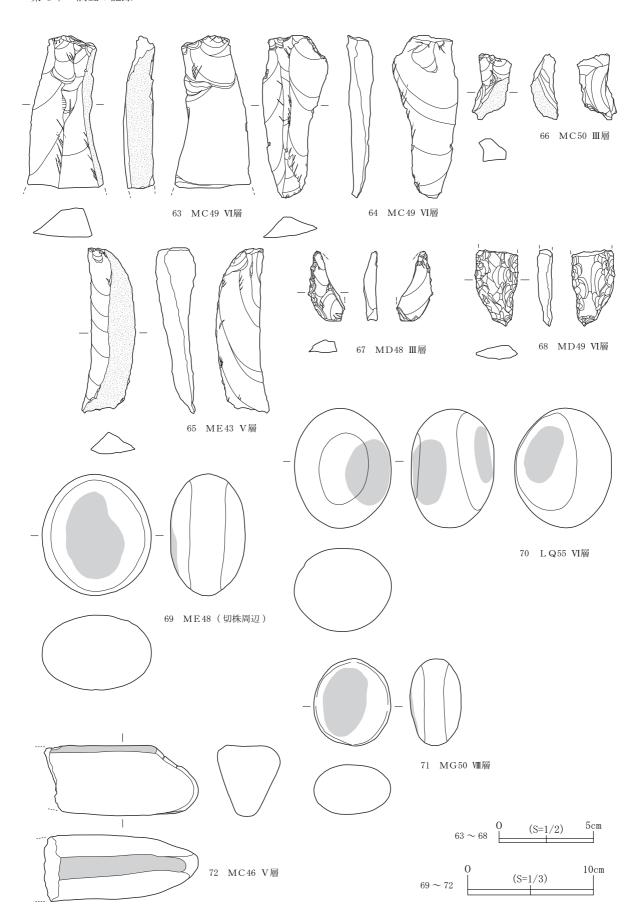
第51図 遺構外出土石器③



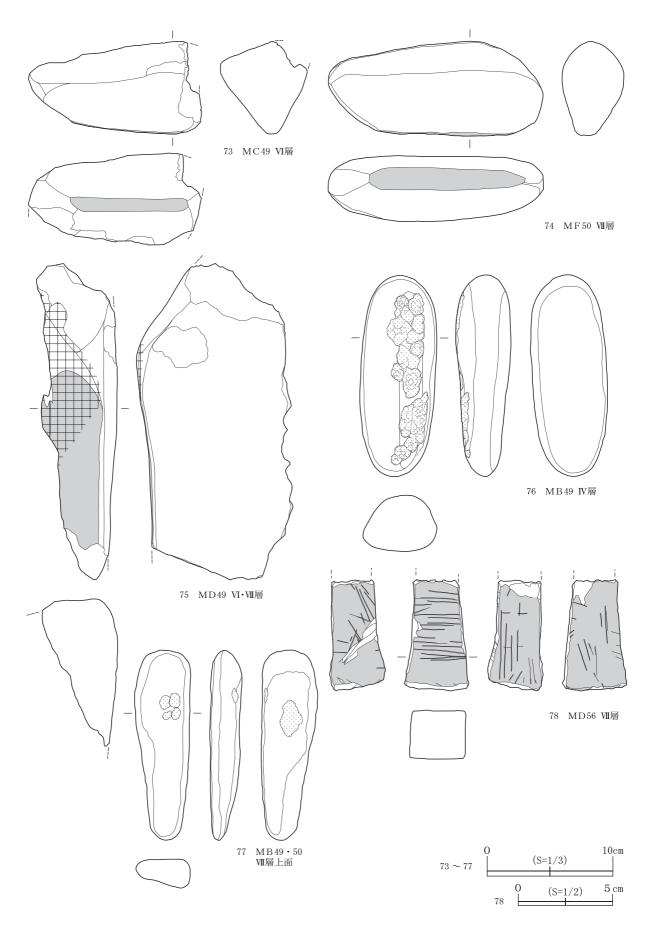
第52図 遺構外出土石器④



第53図 遺構外出土石器⑤



第54図 遺構外出土石器⑥



第55図 遺構外出土石器⑦・石製品

# 第3表 石器・石製品一覧

(寸法:mm、重量:g)

番号	出土位置	石材	器種	長さ	幅	厚さ	重量	備考	番号	出土位置	石材	器種	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	SQ6新 2層	頁岩	スクレイパー	(64. 0)	39. 0	18. 0	36. 9	左下部折損	40	MG45 IV層	頁岩	篦状石器	71.0	41.0	13. 5	25. 4	右下部折損
2	SQ19 礫面下	頁岩	石匙	68. 0	33. 0	8. 0	15. 0		41	排土	頁岩	篦状石器	81. 0	38. 0	16. 0	42. 5	
3	S Q35 礫面下	頁岩	二次加工の ある剥片	64. 5	26. 5	7. 5	8. 0		42	確認調査 ME46	頁岩	箆状石器	69. 5	34. 5	14. 0	29. 2	
4	S Q35 礫面下	頁岩	二次加工の ある剥片	108. 5	68. 5	12. 0	62. 4		43	ME44 V層	頁岩	篦状石器	45. 0	26. 0	10.0	15. 5	
5	S K24 1 層中位	玉髄	石鏃	23. 5	16. 0	3. 0	0.7		44	MF43 V層	頁岩	篦状石器	(57. 5)	35. 5	10.0	21. 9	下部折損
6	S K24 1 層中位	玉髄	石鏃	13. 5	12. 0	2. 0	0.2		45	MC48 V層	頁岩	篦状石器	78. 5	48. 0	16. 0	55. 8	
7	S K24 1 層中位	玉髄	石鏃	15. 5	11.5	3. 0	0. 1		46	L T 56	頁岩	篦状石器	(59. 0)	45. 0	17. 0	37. 7	上部折損
8	S K24 1 層中位	頁岩	石鏃	18.0	14. 5	2. 0	0.3		47	MD45 V層	頁岩	スクレイパー	37. 5	17. 5	6. 0	4.6	
9	S K24 1 層中位	鉄石英	石鏃	15. 5	12. 0	4. 0	0.5		48	M C 50 Ⅲ層	頁岩	スクレイパー	54. 5	40.0	11.0	20. 1	
10	S K24 1 層中位	鉄石英	石鏃	(24.0)	10. 5	4. 0	0.7	基部折損	49	L Q53 表採	頁岩	スクレイパー	78. 0	44. 0	16. 5	35. 4	
11	MA49 II 層	頁岩	石鏃	(35. 5)	15. 5	4. 0	1.9	先端部折損	50	MB57 IV層	頁岩	スクレイパー	76. 0	39. 5	17. 0	43. 5	
12	MB53 VII·VIII層	頁岩	石鏃	(38. 5)	16. 5	5. 0	2. 4	先端部折損	51	MC48 V層	頁岩	スクレイパー	67. 0	43. 0	14. 0	35. 7	
13	LS50 VI層	頁岩	石鏃	(52.0)	19. 0	8. 0	6. 4	先端部折損	52	MD49 VI層	頁岩	スクレイパー	50. 5	27. 0	13. 0	19. 1	
14	MF42 VI層	頁岩	石鏃	52. 5	18. 5	7. 0	6. 4	基部 にアス ファルト付着	53	MD52 Ⅷ層上位	頁岩	スクレイパー	83. 0	59. 0	6. 0	36. 6	
15	L T 57 Ⅲ層	頁岩	石匙	60.0	40. 5	8. 0	13.8		54	M E 43 Ⅲ層	頁岩	スクレイパー	86. 5	59. 0	23. 0	102. 4	
16	ME43 V層	頁岩	石匙	84. 0	43. 5	10.0	16. 7		55	MD48 IV層	頁岩	スクレイパー	111.5	35. 5	11.5	38. 8	
17	MF45 V層	頁岩	石匙	61.5	26. 5	8. 5	10.7		56	MB58 VII層	頁岩	スクレイパー	(67. 5)	46. 5	17. 0	48. 9	下部折損
18	MD49 VI層	頁岩	石匙	44.0	49. 5	6. 5	8. 4		57	ME44 V層	頁岩	スクレイパー	(41.0)	16. 5	5. 5	3. 0	上部折損
19	MG42 VII層	頁岩	石匙	(32. 0)	19. 0	7. 0	3. 3	下半部折損	58	ME48 (切株周辺)	頁岩	スクレイパー	81.0	52. 0	13. 5	41.2	
20	MD49 V·VI層	頁岩	石匙	29. 5	18. 5	2. 5	1.4		59	ME51 V層	頁岩	スクレイパー	85. 5	40.0	26. 0	78. 3	
21	ME50 Ⅲ層	頁岩	石匙	66. 0	41.0	17. 0	20.6		60	ME50 I層	頁岩	スクレイパー	98. 0	32. 0	12. 5	29. 1	
22	MA51 Ⅲ層	頁岩	石匙	(13. 2)	18. 0	4. 5	1.0	上部折損	61	M C 48 VI層	頁岩	剥片	71.0	35. 0	17. 0	28. 3	
23	M C 49 VI層	頁岩	石錐	41.5	24. 5	8. 5	7.0		62	ME48 (切株周辺)	頁岩	剥片	78. 0	22. 0	8. 0	11. 4	
24	MC46 I層	頁岩	石錐	61.5	31. 5	10.0	14. 4		63	M C 49 VI層	頁岩	剥片	(81. 0)	41.0	17. 0	54. 2	下部折損
25	L T 57 Ⅲ層	頁岩	箆状石器	68. 0	42. 5	14. 0	35. 4		64	M C 49 VI層	頁岩	剥片	86. 0	35. 0	11.0	25. 7	
26	M C 49 VI層	頁岩	箆状石器	77.0	47.0	14. 0	41.5		65	ME43 V層	頁岩	剥片	87. 5	28. 0	11.5	27. 7	
27	M C 49 VI層	頁岩	箆状石器	70.0	49. 0	1. 9	61.7		66	MC50 III層	頁岩	剥片	35. 0	21.0	12. 0	6.8	
28	MC51 V·VI層	頁岩	箆状石器	56. 0	37. 0	17. 0	33. 3		67	MD48 Ⅲ層	頁岩	二次加工の ある剥片	(37. 0)	(19. 5)	6. 5	3. 7	右上部折損
29	MD46 Ⅲ層	頁岩	箆状石器	(67. 5)	51. 5	12. 0	37. 2	上部折損	68	MD49 VI層	頁岩	二次加工の ある剥片	(40.5)	23. 5	7. 5	7. 0	上部折損
30	MD48 Ⅲ層	安山岩	箆状石器	62. 5	62. 0	20.0	67. 7		69	ME48 (切株周辺)	安山岩	磨石(丸)	97. 0	87. 0	59. 0	564. 8	
31	MD49 VI層	頁岩	箆状石器	46.0	36. 0	13. 0	18.6		70	L Q55 VI層	安山岩	磨石(丸)	91.0	74. 0	63. 0	584. 1	
32	MD49 VI層	頁岩	箆状石器	44. 0	36. 5	12. 0	15. 1		71	MG50 Ⅷ層	安山岩	磨石(丸)	69. 5	61.0	39. 5	227. 0	
33	MD55 Ⅷ層	頁岩	箆状石器	78. 0	42. 5	14. 5	42. 1		72	MC46 V層	安山岩	磨石(長)	53. 0	(12. 2)	57. 0	(537. 1)	左半部折損
34	ME44 V層	頁岩	箆状石器	93. 0	43. 5	15. 0	59. 5		73	MC49 VI層	流紋岩	磨石(長)	(73. 0)	(137. 0)	72. 0	(681. 6)	右半部折損
35	ME48 (切株周辺)	頁岩	箆状石器	83. 5	53. 0	17. 5	66. 1		74	MF50 VII層	安山岩	磨石(長)	76. 0	170. 0	49.5	782. 9	
36	ME48 (切株周辺)	頁岩	箆状石器	88. 5	50.0	16. 5	60.0		75	MD49 VI·VII層	多孔質 安山岩	台石	(251.0)	(64. 0)	(112.0)	(1656. 3)	被熱
37	ME48 (切株周辺)	頁岩	箆状石器	73. 5	42. 0	14. 0	38. 3		76	MB49 IV層	安山岩	敲打痕の ある礫	160.0	61.5	44. 5	576. 3	
38	M F 45 Ⅲ層	頁岩	箆状石器	57.0	36. 0	16. 5	27. 4		77	MB49・50 VII層上面	安山岩	敲打痕の ある礫	150. 0	44. 5	23. 0	226. 3	
39	MG44 Ⅲ層	頁岩	箆状石器	83. 5	49. 0	20.0	79. 7		78	MD56 VII層	泥岩	砥石	(59. 0)	34.0	26.0	82.6	上部折損

※( )内の数値は残存値。

# 第5章 自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

# I 炭化材の年代測定および樹種同定

# 1 試料

試料は、6基の遺構(SKI1, 2, SK27, SB36SN1, SN4, 5) および縄文時代遺物包含層(MB50) から出土した、 炭化材各1点合計7点である。それぞれ、同じ試料を分割して年代測定と樹種同定を実施する。

# 2 分析方法

### (1) 放射性炭素年代測定

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い(14Cの半減期5730 ±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。いずれも炭化材を対象としていることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年校正は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ 双方の値を計算する。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

### (2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006) を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 199 9)を参考にする。

# 3 結果

# (1)放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定結果を第4表、暦年較正結果を第5表に示す。同位体効果の補正を行った年代 値は、試料番号1が325±25BP、試料番号2が2,050±25BP、試料番号3が12,950±50BP、試料番号4が40 0±20BP、試料番号5が365±20BP、試料番号6が315±25BP、試料番号7が6,965±30BPを示す。また、 測定誤差をσとして計算させた暦年較正結果は、試料番号1がcalAD1,516-1,635、試料番号2がcalBC1 00-2、試料番号3がcalBC13,466-13,193、試料番号4がcalAD1,447-1,485、試料番号5がcalAD1,466-1,618、試料番号6がcalAD1,521-1,640、試料番号7がcalBC5,891-5,797である。

### 第4表 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料 番号	遺構名	層位	試料の 質	樹種	補正年代 BP	δ 13 C (‰)	Code No.	Measurement No.
笛 勺	OVIII	+71645		~ W		. ,		
1	SKI1	床面上約5cm	炭化材	スギ	$325 \pm 25$	$-23.64\pm0.11$	10288-1	PLD-12036
2	SKI2	Ⅰ 層中位	炭化材	オニグルミ	$2,050\pm25$	$-26.09\pm0.23$	10288-2	PLD-12037
3	SK27	覆土中位	炭化材	トウヒ属	$12,950\pm50$	$-25.63 \pm 0.24$	10288-3	PLD-12038
4	SB36SN1	9層	炭化材	カツラ	$400 \pm 20$	$-26.23\pm0.16$	10288-4	PLD-12039
5	SN4	4層	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	$365 \pm 20$	$-23.37\pm0.16$	10288-5	PLD-12040
6	SN5	3層と4層の境	炭化材	クリ	315±25	$-26.62\pm0.22$	10288-6	PLD-12041
7	MB50	VI層	炭化材	キハダ近似種	$6,965\pm30$	$-25.51\pm0.11$	10288-7	PLD-12042

- 1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3)付記した誤差は、測定誤差σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

### 第5表 暦年較正結果

試料 番号	遺構	補正年代 (BP)						暦年	F較正	年代 (cal)	)					相対比	Code No.
1	SKI1	325± 23	σ	cal cal cal	AD AD AD	1, 516 1, 537 1, 617	-	cal cal cal	AD AD AD	1, 530 1, 597 1, 635	cal cal cal	BP BP BP	434 413 333	_ _ _	420 353 315	0. 160 0. 650 0. 191	10288-1
			2 σ	cal cal	AD AD	1, 487 1, 608	-	cal cal	AD AD	1, 604 1, 642	cal cal	BP BP	463 342	-	346 308	0. 787 0. 213	
2	2 SKI2	2,050± 25	σ	cal cal cal	BC BC BC	100 30 11	- - -	cal cal cal	BC BC BC	37 20 2	cal cal cal	BP BP BP	2, 050 1, 980 1, 961	- - -	1, 987 1, 970 1, 952	0. 819 0. 081 0. 100	10288-2
			2 σ	cal cal cal	BC BC AD	164 120 12	_ _ _	cal cal	BC AD AD	129 5 17	cal cal cal	BP BP BP	2, 114 2, 070 1, 938	- - -	2, 079 1, 945 1, 933	0. 104 0. 887 0. 008	
3	SK27	12,949± 49	σ 2 σ	cal	BC BC	13, 466 13, 641	-	cal	BC BC	13, 193 13, 082	cal	BP BP	15, 416 15, 591	_	15, 143 15, 032	1.000	10288-3
4	SB36SN1	398± 22	σ 2 σ	cal cal cal	AD AD AD	1, 447 1, 441 1, 600	-	cal cal	AD AD AD	1, 485 1, 515 1, 617	cal cal cal	BP BP BP	503 509 350	_ _ _	465 435 333	1. 000 0. 891 0. 109	10288-4
5	SN4	364± 22	σ 2 σ	cal cal cal	AD AD AD AD	1, 466 1, 594 1, 453 1, 558	- - -	cal cal cal	AD AD AD AD	1, 518 1, 618 1, 524 1, 631	cal cal cal	BP BP BP BP	484 356 497 392	_ _ _	432 332 426 319	0. 667 0. 333 0. 570 0. 430	10288-5
6	SN5	316± 23	σ 2 σ	cal cal cal	AD AD AD	1, 521 1, 582 1, 621 1, 491	- - -	cal cal cal	AD AD AD	1, 576 1, 591 1, 640 1, 602	cal cal cal	BP BP BP	429 368 329 459	- - -	374 359 310 348	0. 698 0. 088 0. 224 0. 784	10288-6
7	MB50	6,965± 32	σ 2 σ	cal cal cal cal	BC BC BC	1, 613 5, 891 5, 972 5, 914	- - -	cal cal cal	BC BC BC	1, 644 5, 797 5, 953 5, 750	cal cal cal	BP BP BP BP	337 7, 841 7, 922 7, 864	- - -	306 7, 747 7, 903 7, 700	0. 216 1. 000 0. 053 0. 947	10288-7

- 1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていな
- 4) 統計的に真の値が入る確率は  $\sigma$  は68%、  $2\sigma$  は95%である
- 5) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$  のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

# (2) 樹種同定

樹種同定結果を第4表に示す。炭化材は、針葉樹2分類群(トウヒ属・スギ)と広葉樹5分類群(オニグルミ・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・カツラ・キハダ近似種)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

# ・トウヒ属 (Picea) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。放射柔組織の細胞壁は厚く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。放射仮道管の有縁壁孔のフチは主としてトウヒ型。分野壁孔はトウヒ型で、1分野に3~6個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・スギ (Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は

比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

- ・オニグルミ (Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属 散孔材で、道管径は比較的大径、単独または2~3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減 させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1~3細胞幅、1~40細胞高。
- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節(Quercus subgen. Quercus sect. Prinus) ブナ科 増升材で、升圏郊は1~2列 升圏外で角激に管径を減じたのた。漸減しかがら水条性に配列する

環孔材で、孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

- ・カツラ (Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.) カツラ科カツラ属 散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~30細胞高。
- ・キハダ近似種 (cf. Phellodendron amurense Ruprecht) ミカン科キハダ属 試料には年輪界が認められない。道管径が年輪界方向に向かって径を大きく減少させることから環孔材と考えられる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。小径の道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組

### 4 考察

織は同性、1~5細胞幅、1~40細胞高。

年代測定および樹種同定を実施した炭化材が出土した遺構あるいは層位は、層相等の調査所見や出土遺物から、SK27とMB50の試料が縄文時代早期、他が中世と考えられている。

SK27では土坑覆土から出土した炭化材を試料としており、その覆土はほぼ地山由来であることが確認されている。炭化材の年代は12,950±50BPであり、想定年代である縄文時代早期より古い年代を示した。またこの炭化材の樹種は針葉樹のトウヒ属であったが、秋田県内では池内遺跡の旧石器時代とされる木材にトウヒ属が確認された例がある(パリノ・サーヴェイ株式会社,1999)。これらのことから、今回得られた年代測定値がこの土坑の年代に相当する可能性もあるが、本来地山に包含されていた土坑より古い時代の炭化材が埋積過程で地山土壌とともに流入した可能性もある。覆土中の共伴遺物や周辺出土遺物の時期判別など、考古学的所見からの検討がのぞまれる。

MB50の炭化材は、縄文時代遺物包含層であるVI層から出土している。年代測定値は6,965±30BPであり、推定年代より若干新しい年代を示すものの、縄文時代の遺物包含層から出土していることとは矛盾しない。樹種は広葉樹のキハダ近似種に同定された。キハダは、池内遺跡の縄文時代前期とされる加工材、根下戸道下遺跡の縄文時代早期および中期と考えられる炭化材、奥椿岱遺跡の縄文時代中期とされる炭化材、堀量遺跡の縄文時代中期とされる炭化材等に確認された例がある(鈴木・植田,1999;パリノ・サーヴェイ株式会社,2000a;植田,2000,2004)。

中世と考えられている試料では、SKI2の炭化材が2,050±25BPを示し、推定年代よりも古い年代を示すことから、古い時代の炭化材が混入している可能性もある。樹種はオニグルミである。秋田県内の事例では、オニグルミは、池内遺跡、小袋岱遺跡、上谷地遺跡など、縄文時代の試料に多く認められているが、十二牲B遺跡の平安時代とされる加工材、中谷地遺跡の古代とされる祭祀具、中屋敷II遺跡の江戸時代とされる礎板等にも認められた例があり、縄文時代から江戸時代まで継続して利用されていたことが推定される(鈴木・植田,1999;株式会社古環境研究所,1999;パリノ・サーヴェイ株式会社,2000b,2004,2005;沙見・岡田,2001)。

その他のSKI1、SB36SN1、SN4、SN5から出土した炭化材は、315±25BP~400±20BP(cal AD 1, 447~1,640)の年代値が得られており、推定年代と大きな矛盾はない。このうち、SKI1の炭化材は、竪穴状遺構から採取されており、針葉樹のスギに同定された。スギは、竜毛沢館跡の中世と考えられる建築部材等に確認されており、中世の木材試料に比較的多く見られる樹種の一つである(秋田県教育委員会,1990)。

SB36SN1は、掘立柱建物跡に付属するかまど状遺構より採取されており、広葉樹のカツラに同定された。カツラは、河畔等に普通にみられる落葉高木であり、周辺に生育していた樹木を利用したことが推定される。また、SN4およびSN5は、かまど状遺構の下部構造から採取された炭化材であり、SN4が広葉樹のコナラ節、SN5が広葉樹のクリに同定された。いずれも二次林を構成し、山地から集落周辺にかけて普通に見られる樹木であり、周囲に生育していた樹木を利用したことが推定される。

# Ⅱ 灰層の植物珪酸体分析

### 1 試料

試料は、中世の掘立柱建物跡に付属するかまど状遺構SB36SN1の2層から採取された、土壌1点(試料番号8)である(SB36SN1については、第4章を参照)。

# 2 分析方法

今回の調査では、珪化組織片の産出に注目した。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や撹乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い(例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社,1993)。そのため、珪化組織片の産状により当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

試料の土壌中には、明瞭な灰(珪化組織片)が認められなかった。そのため、次に述べる方法で分離と濃集を試みた。湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム,比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

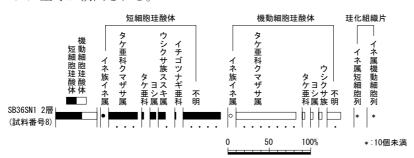
400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤(2004)の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された分類群とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から燃料材について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化した。その際、出現率は短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

# 3 結果

結果を第6表、第56図に示す。試料番号8からは、珪化組織片としてイネ属の葉部に形成される短細胞列と機動細胞列が各1個認められる。一方単体の植物珪酸体では、イネ属は短細胞珪酸体と機動

細胞珪酸体で各1個認められた。単体の植物珪酸体ではクマザサ属が **第6表 植物珪酸体分析結果** 多く、短細胞珪酸体で約35%、機動細胞珪酸体で約72%を占めている。 短細胞珪酸体では、この他にヨシ属、ススキ属、不明キビ型、不明ダ ンチク型等が検出される。



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分 率で算出した。なお、●は1%未満を示す。また、珪化組織片の産状を\*で示す。

第56図 植物珪酸体群集と珪化組織片の産状

# 4 考察

SB36SN1は、中世の掘立柱建物に付属するかまど状遺構であり、9層(中段階の被熱面)から採取さ れた炭化材(試料番号4)で落葉広葉樹のカツラが確認されている。2層の植物珪酸体分析結果は、イ ネ属の葉部に形成される珪化組織片として短細胞列と機動細胞列が各1点検出され、単体が各1個検出 された。この分析結果から見る限り、イネ属が燃料材等に利用されていた可能性はあるが、検出され た組織片は肉眼レベルではごく微細であることや燃料材として利用されたとするには産出量が少ない ことから、かまど状遺構の使用時もしくは後代に混入したものである可能性も否定できない。

一方、単体ではクマザサ属、ヨシ属、ススキ属等の植物珪酸体が産出しているが、いずれも組織片 は確認できなかった。したがって、これらの種類についても、燃料材に由来するものとは断定できな い。なお、クマザサ属は落葉広葉樹林の林床、ヨシ属は河畔湿地、ススキ属は河畔等の開けた場所に 生育する種類であり、周囲に生育していたイネ科植物に由来する可能性がある。

なお、植物珪酸体は植物体そのものに由来するため、一遺構内でも偏在して分布する可能性がある。 また、炉やかまど内部は、使用頻度によって灰などの残渣がさらわれ、廃棄されることも想定される。 当時のイネ科草本類の燃料材への利用状況をさらに解明するためには、同様の遺構試料の分析事例を 蓄積するとともに、一遺構内で複数の層位や平面的位置について試料を採取し、分析調査を行うこと がのぞまれる。

# 黒曜石の蛍光×線分析

# 1 試料

試料は、SK27の覆土中より出土した黒曜石原石(試料番号9)と、SKI1の覆土上位(排土中)より出土 した黒曜石剥片(試料番号10)の2点である。SKI1は中世の遺構であるが、剥片の形状等から縄文時 代の石器が混入したと考えられている。

試料番号9は、径2~5mmの多数の細礫からなる。個々の細礫について実体顕微鏡で確認したところ、 白色の長石とみられる斑晶鉱物が多数包有されている状況が確認された。また、基質は黒色を呈し、

_		
		SB36SN1
分	·類群\遺構・層位・試料名	2層
		試料番号8
イ・	ネ科葉部短細胞珪酸体 しゅうしゅう	
	イネ族イネ属	1
	タケ亜科クマザサ属	74
	タケ亜科	5
	ヨシ属	15
	ウシクサ族ススキ属	18
	イチゴツナギ亜科	3
	不明キビ型	56
	不明ヒゲシバ型	9
	不明ダンチク型	31
イ.	ネ科葉身機動細胞珪酸体	
	イネ族イネ属	1
	タケ亜科クマザサ属	92
	タケ亜科	4
	ヨシ属	4
	ウシクサ族	5
	不明	21
合	丰	
	イネ科葉部短細胞珪酸体	212
	イネ科葉身機動細胞珪酸体	127
	総計	339
珪	化組織片	
	イネ属短細胞列	1
	イネ属機動細胞列	1

貝殻状の割れ口なども認められるが、黒曜石ほどのガラス光沢はない。これらの特徴から、試料番号9は黒曜石ではなく、ガラス質の安山岩~デイサイトの可能性がある。今回の分析では、その検証も含める。

試料番号10は、長径約1cmの灰色~透明の剥片であり、表面に斑晶はなく、ガラス光沢を呈する。 各試料の外観および表面の状況を図版26に示す。

# 2 分析方法

蛍光 X 線分析により化学組成を求め、原産地を推定する。なお、本調査では、原石とされた試料番号9については、精度の高い分析値を得るために、試料をガラスビートに処理し、波長分散型蛍光 X 線分析装置(理学電機工業社製RIX1000 (FP法のグループ定量プログラム))を用いた。一方、試料番号10については、遺物保存の観点から、非破壊分析とし、セイコーインスツルメンツ製エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (SEA2120L)を用いた非破壊分析法により、半定量的に化学組成を求める。以下に試料ごとに分析処理について述べ、さらに黒曜石の原産地判別法について述べる。

#### (1) 試料番号9

a) 装置

理学電機工業社製RIX1000 (FP法のグループ定量プログラム)

b) 試料調製

試料を振動ミル(平工製作所製TI100;10ml容タングステンカーバイト容器)で微粉砕し、105℃で4時間乾燥する。この微粉砕試料についてガラスビートを以下の条件で作成する。

溶融装置;自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー(3491A1)

溶剤及び希釈率;融剤(ホウ酸リチウム)5.000g:試料0.500g

剥離剤; Li I (溶融中1回投入)

溶融温度;1200℃ 約7分

c) 測定条件

X線管; Cr (50Kv-50mA) スペクトル;全元素Kα 分光結晶; LiF, PET, TAP, Ge

検出器; F-PC, SC

計数時間; PeaK40sec, Back20sec

### (2) 試料番号10

a) 装置

セイコーインスツルメンツ製エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (SEA2120L)

得られた蛍光 X線スペクトルはファンダメンタルパラメーター法(FP法)による定量演算を実施し、化学組成を算出する。なお、定量演算の際には組成既知の黒曜石を標準試料として登録し、正確度の向上を図っている。さらに、本装置は下面照射型の装置であるため、形状が小さい試料についてはマイラー膜を介して測定を行い、吸収補正を加えた定量演算を実施し、化学組成を算出する。

b) 測定条件

管球ターゲット元素; Rh 対象元素; Na~Ca, Sc~U

励起電圧 (kV) ; 15(Na~Ca), 50(Sc~U)

管電流 ( $\mu$ A); 自動設定 (Na~Ca), 自動設定 (Sc~U)

測定時間(秒);300(Na~Ca),300(Sc~U)

コリメータ; φ10.0mm フィルター; なし 雰囲気;真空

### (3) FeとRbによる黒曜石産地判別

黒曜石は、流紋岩~デイサイトに相当するガラス岩である。流紋岩~デイサイトの成因は多様であるが、その反面出発物質としてのマグマの生成過程および分化過程で、化学組成の挙動が異なることが期待される。大沢ら(1991)の黒曜石の化学組成を岩系別に見ると、Rb(ルビジウム)、La(ランタン)、Ce(セリウム)、Eu(ユウロピウム)、Th(トリウム)、Sc(スカジウム)の変動が著しく、地域的な特性を示す微量成分元素として注目される。

そこで黒曜石の岩系に基づいた化学成分の変化を背景に、産地判定の指標成分としてコンパティブル元素であるFeとインコンパティブル元素であるRbを選択し、産地ごとの2成分の領域を図示した黒曜石の産地判別図(第57図)を作成する。本判別図は、当社保有の原産地黒曜石110試料のほか、これまでに当社で調査を実施した遺跡出土黒曜石(産地未確定も含む)など計500試料以上の黒曜石を基に、破壊調査により得られた化学組成を用いて作成した。作成した判別図は縦軸にRb(ppm)、横軸にFe(%)をとると指数関数的な分布を示し、産地間の分離が良好であることから、分析精度が十分に高ければ産地の識別は可能であると考えられる(五十嵐ほか,2001)。なお、この図はFe(%)とRb(ppm)の値を採用しているため、酸化物の分析結果をそれぞれ換算して用いている。

### 4 結果

# (1) SK27覆土中 原石(試料番号9)

分析結果を第7表に示す。前述したように試料番号9は、その外観や斑晶を多量に含むことなどから黒曜石ではない可能性がある。主要元素の割合をみると、 $Si0_2$ が約67%あり、Ca0が $Na_2$ 0と同量程度あり、これらに比べて $K_2$ 0が少ないことなどから、試料番号9はガラス質のデイサイトである可能性が高い。当社における全国の黒曜石試料の分析結果では、主要元素の割合において、 $Si0_2$ は76~78%、Ca0は1%未満であり、 $Na_2$ 0と $K_2$ 0が3~4%という流紋岩の組成を示している。唯一、神奈川県の箱根地域で産出する黒曜石は、今回デイサイトと判定された試料番号9に近い主要元素組成を示す。しかし、微量元素におけるRb、Sr、Zrの各値をみると、試料番号9は箱根地域の黒曜石(後述する黒曜石原産地判別図の笛塚・芦ノ湯参照)に比べていずれの値も有意に多い。したがって、原石とされた細礫は黒曜石ではなく、デイサイトの細礫と判断される。

なお、大沢・須田(1978)や日本の地質「東北地方」編集委員会(1989)などにより、本遺跡が位置する大館市周辺の地質を概観すると、デイサイト溶岩の分布は認められない。ただし、今回分析試料とした細礫は、埋め戻しにともなう覆土より出土していること、及び壁面で観察された地山にも同様の特徴をもつ細礫が含まれていることなどから、この細礫は地山に含まれていたものに由来したものである可能性もある。なお、大館市から最も近いデイサイト溶岩の分布としては、南へ約25km離れた小又川左岸の森吉火山北麓に黒色無斑晶質の特徴的な岩相を示す石英安山岩(デイサイト)溶岩流(中川,1983)の分布をみることができる。現時点では、この溶岩流とこの試料の由来や関係について判定はできないが、今後このデイサイト細礫についてさらに由来を検討するためには、比較対照試料として地山に含まれる細礫についても同様の分析を行うことが望まれる。

# (2) SKI1覆土上位 剥片(試料番号10)

分析結果を第8表に示す。またFe-Rb判別図および補完法であるSr-Zr判別図を第57図に示す。なお、 各判別図は関東以北(北海道・東北・新潟)と関東地域の地域別に作成している。

### 第7表 原石の蛍光 X 線分析結果

		主要元素													
試料名	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	$A1_2O_3$	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Mn0	Mg0	Ca0	Na <sub>2</sub> 0	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	Ig. loss	合計			
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)			
	67. 20	0. 61	14. 67	4. 03	0. 13	1. 19	3. 81	4. 17	0.97	0.08	3. 14	100.00			
avages I de		微量	元素												
SK27覆土中 (試料番号9)	Rb	Sr	Zr	Ba	]										
(政府省 万分)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)											
	27	261	123	309											

#### 第8表 剥片の蛍光 X 線分析結果

	主要元素												
試料名	SiO <sub>2</sub>	TiO2	$A1_2O_3$	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	Mg0	Ca0	Na <sub>2</sub> 0	K <sub>2</sub> O				
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)				
	77. 35	0. 10	14. 26	0.73	0. 13	0. 22	0.61	3. 03	3. 53				
CVI1 05 1. /-		微量	元素		参表	<b>垮値</b>							
SKI1覆土上位 (試料番号10)	Rb	Sr	Zr	Ba	Fe	Rb							
(B414.EL /2 10)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(ppm)							
	0.0162	0.0064	0. 0059	0. 0275	0. 51	162							

今回の試料については、

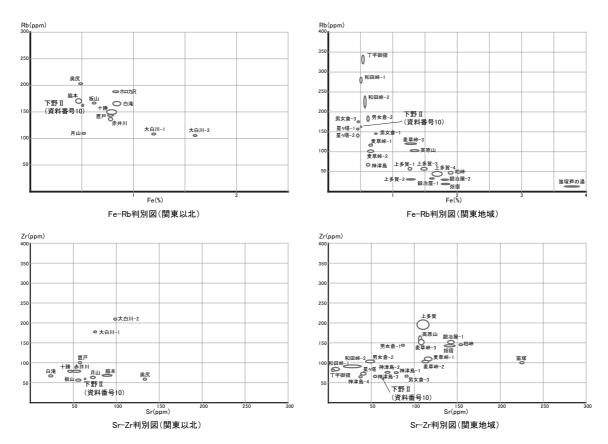
当社保有の原産地試料においては遺跡所在地周辺の東北、北海道さらに新潟地域や関東地方でFe-Rb判別図およびSr-Zr判別図をともに、

適合する原産地を見いだすには至らない。

なお、本試料のプロット近傍には新潟県板 山や秋田県脇本のほか、長野県星ヶ塔、男 女倉の領域が存在するが、これら判別図適 用の際には、分析精度の確保が求められる ため、非破壊分析法による半定量的な結果

から言及することは難しい。今後、より定量的な手法により化学組成を得た上で検討を行い、原産地 を推定することがのぞまれる。

さらに、判別図に示すように当社が把握している東北地方の黒曜石原産地は、男鹿(脇本)と月山の2箇所であるが、小田(2001)は東北地方の黒曜石の産地として脇本と月山以外にも青森県の深浦、岩手県の雫石、宮城県の湯倉などの産地をあげており、また東北地方南部から続く地域として、新潟県の板山のほかに佐渡島にも黒曜石の産地があることを紹介している。したがって、本試料の原産地についてはこれらの原産地試料をデータベースに付加したうえで、さらに検討することがのぞまれる。



第57図 剥片(試料番号10)の黒曜石産地判別図

# Ⅳ 土壌理化学分析

# 1 試料

調査対象とされた遺構は、土坑SK32であり、土坑中央付近からは土器(RP1)が倒位で出土している。試料は、土器(RP1)内部および下部から採取された土坑覆土2点(試料番号11)のほか、比較対比試料としてSPA側(試料番号12)、SPB側(試料番号13)、遺構底面下中央(試料番号14)より採取された比較用遺構外①~③の3点を含む計5点である。いずれも腐植集積が著しい軽しょうな土壌で、本土坑が埋没沢内に構築されていることに由来する可能性がある。

# 2 分析方法

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解-原子吸光法、腐植含量はチューリン法(土壌標準分析・測定法委員会,1986)でそれぞれ行った。以下に各項目の操作工程を示す。

### (1)分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

# (2)リン酸、カルシウム含量

粉砕土試料 $1.00 \, g$  をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸( $HNO_3$ )約5m1を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸( $HC1O_4$ )約10m1を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100m1 に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸( $P_2O_5$ )濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量( $P_2O_5mg/g$ )とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

# (3) 腐植含量

粉砕土試料 $0.100\sim0.500$  g を100ml 三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(0rg-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

### 3 結果

土壌理化学分析結果を第9表に示す。

土器 (RP1) 内部および下部から採取された土坑覆土のリン酸含量は $5.8P_2O_5$ mg/g程度、カルシウム含量は1.9CaOmg/g程度であり、比較用遺構外1~3と比較

第9表 土坑(SK32)の土壌理化学分析結果

試料 番号	出土位置詳細	土性	土色		腐植含量	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg/g)	CaO (mg/g)
11	RP1土器内部	SiL	10YR1. 7/1	黒	26. 0	5. 84	1. 98
''	RP1土器より下部	SiL	10YR1.7/1	黒	25. 6	5. 80	1. 79
12	比較用遺構外① SPA側	SiCL	10YR1. 7/1	黒	22. 1	5. 31	1. 25
13	比較用遺構外② SPB側	SiCL	10YR1. 7/1	黒	20. 2	4. 74	1. 28
14	比較用遺構外③ 遺構底面下中央	SiCL	10YR1. 7/1	黒	15.8	4. 44	1.06

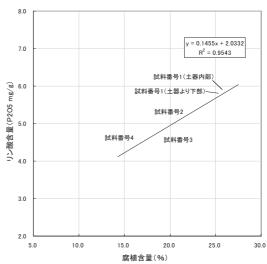
注(1)土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。 (2)土性:土壌調査ハンドブック (ペドロジスト懇談会編, 1984) の野外土性による。 SiL・・・シルト質壌土(粘土0~15%、シルト45~100%、砂0~55%) SiCt・・・シルト質埴壌土(粘土15~25%、シルト45~85%、砂0~40%)

してリン酸、カルシウムともに多い傾向にある。ただし、リン酸含量は、比較用遺構外① $\sim$ ③においても $4.44\sim5.31P_2O_5mg/g$ と多い。一方、これら試料には著しい腐植集積が認められ、腐植含量は土坑覆土で約26%と最も多く、少ないものでも約16%もの腐植が含まれる特徴がある。

# 4 考察

土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があり (Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.  $OP_2O_5 mg/g$ 程度である。また、人為的な影響 (化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では5.  $SP_2O_5 mg/g$  (川崎ほか, 1991)という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌で6.  $OP_2O_5 mg/g$ を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は、普通1~50CaOmg/g (藤貫, 1979)と言われている。含量幅がリン酸よりも大きいが、骨片が残存するような状況においてはリン酸に追従した含量の変化が見られることから、遺体痕跡を検証する上での補助的な役割をなす。

今回、調査対象とした土坑SK32の覆土および比較用遺構外①~③では、上述の天然賦存量を上回るリン酸が検出されており、特に土坑覆土においてリン酸が多い傾向が見られる。土坑内にリン酸を富化するに至る物質が内包されていた可能性も否定できないが、土器内部および土器下部の土坑覆土のリン酸含量が一定したものであり偏りが認められていない点や、比較用遺構外においてもリン酸が多い特徴およびこれら土壌が著しく腐植集積した土壌である状況から、土壌腐植の元となる植物遺体を給源として自然蓄積したリン酸である可能性が高いと考えられる。なお、後者の場合に



第58図 腐植含量とリン酸含量の相関図

は、腐植集積量に応じてリン酸含量も増加し、比例的な関係を示すことが多い。第58図に、今回対象とした試料の腐植含量とリン酸含量の相関関係を示したが、試料数は少ないものの正の相関関係が認められており、その相関は0.9543(決定係数R2)と高い。このことは、これら試料のリン酸が植物遺体に由来したものであることを支持するものと考えられ、それは本土坑が埋没沢内に構築されているという立地上の特性に由来することが示唆される。

以上のことから、本分析調査結果からみる限り、土坑覆土に墓坑である可能性を示唆するようなリン酸の富化を認められず、墓としての用途・機能を積極的に評価することは難しいと考える。

# 引用文献

秋田県教育委員会,1990,嶋倉巳三郎氏による樹種同定.「竜毛沢館跡発掘調査報告書――般国道7号二ツ井バイパス建設事業に 係る埋蔵文化財発掘調査―」、秋田県文化財調査報告書第188集,284-286.

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

五十嵐 俊雄・斉藤 紀行・中根 秀二, 2001, Fe-Rb法による黒曜石の産地推定. PALYNO, No. 4, パリノ・サーヴェイ株式会社, 16-25.

伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.

伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

- 株式会社古環境研究所, 1999, 小袋岱遺跡出土の炭化材の樹種同定. 「小袋岱遺跡」, 秋田県文化財調査報告書第285集, 秋田県教育委員会, 131-135.
- 近藤 錬三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ペドロジスト, 48, 46-64.
- 中川 光弘, 1983, 森吉火山の地質と岩石. 岩石鉱物鉱床学会誌, 78, 197-210.
- 日本の地質「東北地方」編集委員会, 1989, 日本の地質2 東北地方. 共立出版, 338p.
- 小田 静夫, 2001, 黒曜石石器の研究動向. PALYNO, No. 4, パリノ・サーヴェイ株式会社, 3-15.
- 大沢 眞澄 (研究者代表), 1991, 黒曜石の化学組成. 遺跡出土黒曜石石器の原産地推定の基礎として. 平成2年度科学研究費補助金 (一般研究B) 研究成果報告書, 69p.
- 大沢 穠・須田 芳朗, 1978, 20万分の1地質図幅「弘前および深浦」, 地質調査所.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993, 自然科学分析からみた人々の生活(1). 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, 慶應義塾, 347-370.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,1999,ST396・504谷出土の自然木と、縄文時代の遺構と古代竪穴住居跡から出土した炭化材、土 壌の分析・同定.「池内遺跡―国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IX―遺物・資料編」,秋田県文化財調 査報告書第282集,秋田県教育委員会、777-794.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2000a,自然科学分析.「根下戸道下遺跡―大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 II─」,秋田県文化財調査報告書第297集,秋田県教育委員会,99-101.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2000b,自然科学分析.「十二牲B遺跡―県営ほ場整備事業(金沢地区)に係る埋蔵文化財発掘調 査報告書―」, 秋田県文化財調査報告書第304集,秋田県教育委員会,11.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2004,中屋敷Ⅱ遺跡から出土した柱材・礫板の年代と樹種.「中屋敷Ⅱ遺跡―県営担い手育成基盤 整備事業(土崎・小荒川地区)に係る埋蔵文化財調査報告書―」,千畑町埋蔵文化財報告書第6集,千畑町教育委員会,64-66.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2005,上谷地遺跡から出土した木材の年代と樹種.「上谷地遺跡・新谷地遺跡―日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXII-」、秋田県文化財調査報告書第395集、秋田県教育委員会,164-166.
- Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙·伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 沙見 真・岡田 文男,2001,樹種同定.「中谷地遺跡─日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書WI─」, 秋田県文化財調査報告書第316集,秋田県教育委員会,208-213.
- 鈴木 三男・植田 弥生,1999,秋田県池内遺跡出土木材の樹種.「池内遺跡―国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IX―遺物・資料編」,秋田県文化財調査報告書第282集,秋田県教育委員会,730-749.
- 植田 弥生,2000,炭化材樹種同定.「奥椿岱遺跡―秋田空港アクセス道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―」,秋田 県文化財調査報告書第305集,秋田県教育委員会,109-112.
- 植田 弥生,2004, 樹種同定. 「堀量遺跡――般国道13号湯沢横手道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I ―」,秋田県文化財調査報告書第367集, 秋田県教育委員会,174-176.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscop ic Features for Hardwood Identification].
- Bowen, H. J. M., 1983, 環境無機化学-元素の循環と生化学-. 浅見輝男・茅野充男訳, 博友社, 297p.
- Bolt, G. H. · Bruggenwert, M. G. M, 1980, 土壌の化学. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, 学会出版センター, 309p.
- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信,1991,中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議 事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,28-36.
- 川崎 弘・吉田 澪・井上恒久,1991,九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土 壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,23-27.
- 土壤標準分析·測定法委員会編, 1986, 土壤標準分析·測定法. 博友社, 354p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.
- 藤貫 正, 1979, カルシウム. 地質調査所化学分析法, 52, 57-61.
- ペドロジスト懇談会,1984,野外土性の判定、ペドロジスト懇談会編 土壌調査ハンドブック,博友社,39-40.

# 第6章 まとめ

下野Ⅱ遺跡は引欠川の右岸にある、標高49~53mの舌状台地に立地する遺跡である。2,250㎡の面積を調査した結果、縄文時代早期から中世にかけて断続的な活動の痕跡を発見した。

縄文時代の遺構は、集石遺構 9 基・フラスコ状土坑 1 基・土坑10 基である。集石遺構は礫と土坑の関係から 3 類に分類した。 S K 24 では形態・法量・素材の色の特徴的な石鏃 6 点が出土したこと、 S K 32 では縄文時代後期の深鉢形土器底部が倒位で出土したことから、これらは副葬品を伴う墓と推定した。 S K 24 の規模や主軸方位は、 S K 20・25・26 や集石遺構 3 類である S Q 20・22 に伴う土坑と類似している。検出された土坑の多くは上面が撹乱で失われており元は上面に集石が存在した可能性がある。そのため集石遺構 3 類と土坑の多くは墓と推定され、これらは調査区の北東側に偏在して墓域を形成していたものと考えられる。ただし、土坑が伴わない集石遺構 1 類と土坑内に礫が集中する集石遺構 2 類は、墓とは考えられない。墓域の時期は判断材料に乏しいが、集石遺構 3 ー b 類の礫の配列と S K 32 の深鉢形土器から、縄文時代後期の可能性が高いと考えられる。

縄文時代の遺物の大半は早期中葉から後葉の土器であり、主に埋没沢から出土した。その主体をなすのは、沈線と貝殻腹縁文により文様を描く第 I 群  $a \sim c$  類である。文様が縦位に展開する a 類と横位に展開する c 類は、文様帯が縦横に区画される b 類を間に挟んで変遷していく関係と考えられる。主文様を描く直線的な沈線に対し、その間を充填する鋸歯文と貝殻腹縁文が互換的な関係にあることも読み取ることができる。  $a \sim c$  類に続いて多いのは、貝殻腹縁文により横位多段の文様を描く第 I 群 d 類、キャリパー形で沈線により幾何学的な文様を描く第 I 群 f 類である。しかし、 $a \sim c$  類と連続して変遷するとは考えにくいため、 $a \sim c$  類に対して客体的な土器であるか、時期差があるものと考えられる。

弥生時代では大館市内および近隣市町村に類例がある小坂X式の土器が出土した。また平安時代では十和田 a 火山灰が堆積している道路状遺構1条を調査し、土師器が少数出土している。

中世の遺構は、竪穴状建物跡 2 棟・掘立柱建物跡 3 棟・柱穴列 4 列・かまど状遺構 2 基である。これらは埋没沢を境に南北 2 つの遺構群に分かれる。北側の遺構群は、竪穴状建物跡(S K I 1)とかまどを伴う掘立柱建物跡(S B 36)が隣接し、柱穴列(S A 37・38)が S B 36の北西壁と南西壁に平行して位置する。S B 36から S A 38を隔てて南西側と、S K I 1 の南東側に掘立柱建物跡が位置する。南側の遺構群は、竪穴状建物跡(S K I 2)とかまど状遺構 2 基(S N 4・5)が近接し、S N 4 と平行して柱穴列が位置する点で、遺構の位置関係は北側と類似している。調査区内では南側の遺構群に属する掘立柱建物跡が検出されなかったが、調査区外に位置している可能性が考えられる。遺物がなく詳細な時期は不明だが、居住域を構成する建物群の好例であると言える。



1 調査区南西側



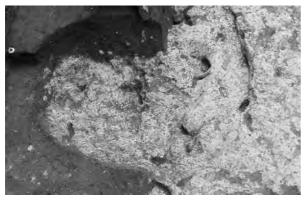
2 調査区北東側



1 SQ6礫検出(東→)



2 SQ6土層断面(北→)



3 SQ6新段階完掘(北→)



4 SQ6新段階完掘(東→)



5 SQ10土層断面(南→)



6 SQ10完掘(南→)



7 SQ12検出(西→)



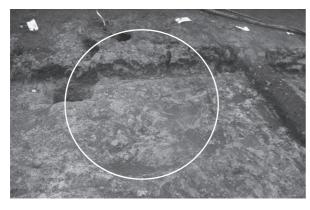
8 SQ12完掘(西→)

図 版 3

SK28完掘(南→)

SK28検出(南→)

図版5 SK25·26·27·28



1 SK30完掘(西→)



2 SK31土層断面(西→)



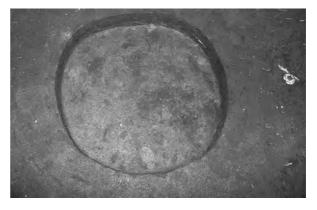
3 SK31完掘(西→)



4 SK32土器検出(南西→)



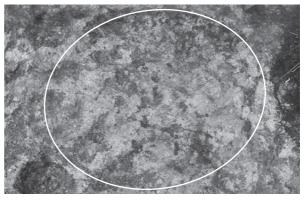
5 SK32出土土器(南西→)



6 SK32完掘(北西→)



7 SK33土層断面(北→)



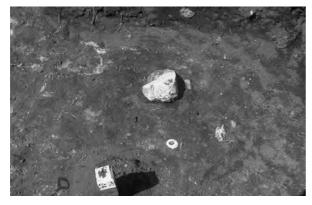
8 SK33完掘(西→)



1 SKP14検出(南→)



2 SKP15検出(南東→)



3 SKP16検出(南東→)



4 SKP18土層断面(南東→)



5 SM13検出(北西→)



6 SM13土層断面(北西→)



7 SM13土層断面(北西→)



1 SKI1完掘(西→)



2 SKI1土層断面(北西→)



3 SKI1検出(西→)



4 SKI1出入口(北→)



1 SKI1 P1土層断面(東→)



2 SKI1 P1完掘(東→)



3 SKI1 P2完掘(南→)



4 SKI1 P3完掘(北→)



5 SKI1 P5完掘(南東→)



6 SKI1 P6完掘(南西→)



7 SKI1 P7土層断面(南東→)



8 SKI1 P8完掘(南西→)



1 SKI2完掘(北→)



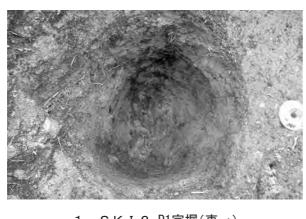
2 SKI2土層断面(東→)



3 SKI2確認(北→)



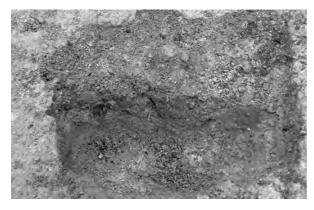
4 SKI2板壁痕跡(北西→)



1 SKI2 P1完掘(東→)



2 SKI2 P2完掘(東→)



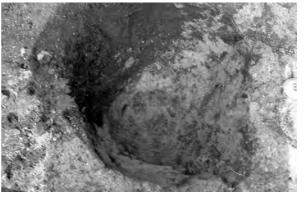
3 SKI2 P3土層断面(東→)



4 SKI2 P4完掘(北東→)



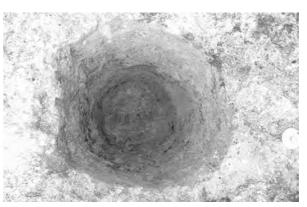
5 SKI2 P5完掘(北→)



6 SKI2 P6完掘(西→)



7 SKI2 P7完掘(南東→)



8 SKI2 P9完掘(東→)



1 SKI2 P10完掘(南→)

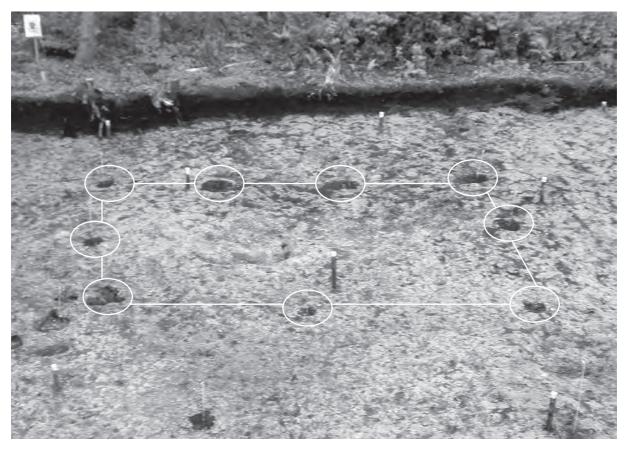
2 SKI2 P11完掘(東→)



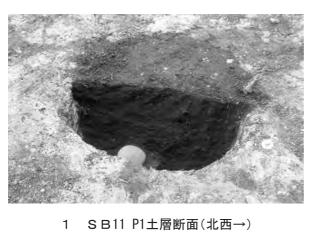
3 SKI2 P12完掘(東→)

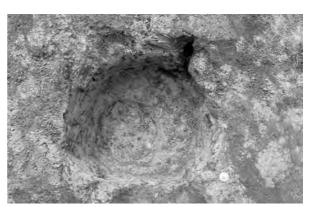


SKI2 P14土層断面(北西→)



5 SB11完掘(東→)

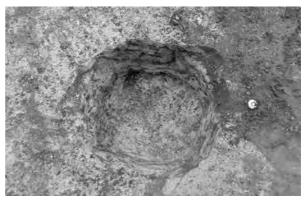




2 SB11 P1完掘(北→)



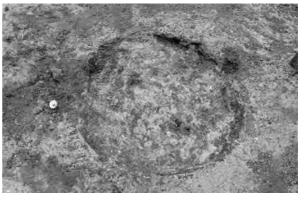
3 SB11 P2土層断面(西→)



4 SB11 P2完掘(北西→)



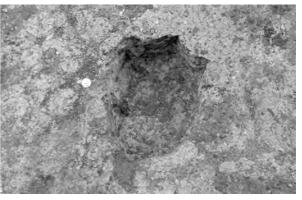
5 SB11 P3土層断面(北西→)



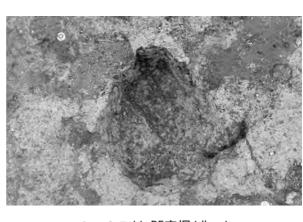
6 SB11 P3完掘(北西→)



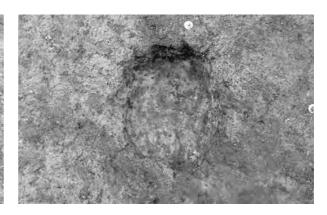
7 SB11 P4土層断面(北西→)



8 SB11 P4完掘(北西→)



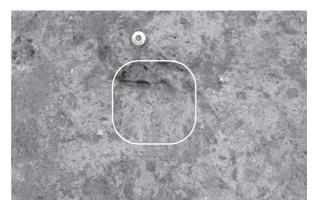
2 SB11 P5完掘(北→)



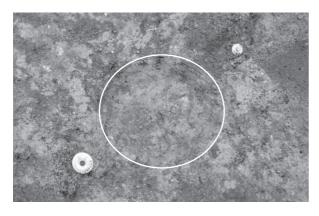
4 SB11 P6完掘(西→)



SB11 P7土層断面(北→)



6 SB11 P7完掘(北→)



7 SB11 P8完掘(北西→)



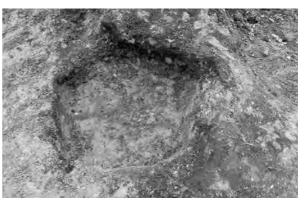
8 SB11 P9完掘(南→)



1 SB29完掘(北西→)



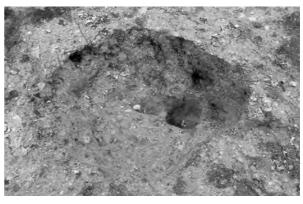
2 SB29 P1土層断面(南→)



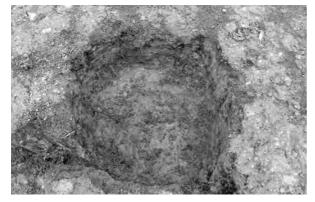
3 SB29 P2完掘(南→)



4 SB29 P3土層断面(南東→)



5 SB29 P3完掘(南東→)



1 SB29 P4完掘(東→)



2 SB29 P5土層断面(南東→)



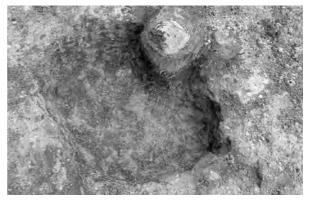
3 SB29 P6完掘(南→)



4 SB29 P7完掘(南東→)



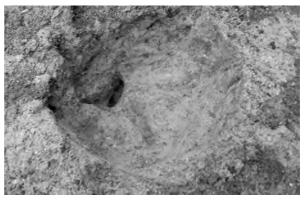
5 SB29 P8土層断面(北東→)



6 SB29 P8完掘(北東→)



7 SB29 P9土層断面(西→)



8 SB29 P9完掘(西→)



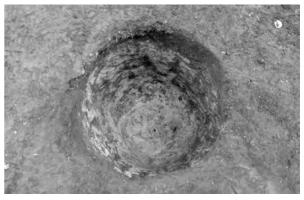
1 SB36(北西→)



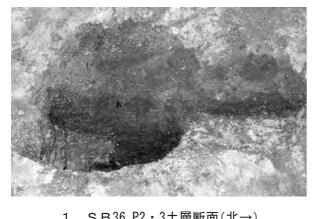
2 SKI1·SB36(東→)



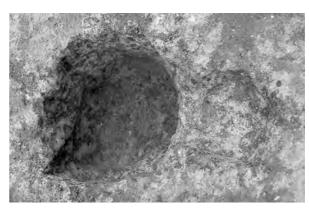
3 SB36 P1土層断面(北→)



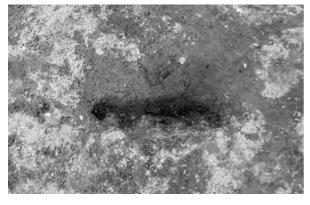
4 S B 36 P1完掘(南→)



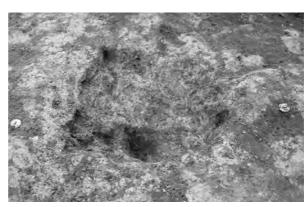
1 SB36 P2・3土層断面(北→)



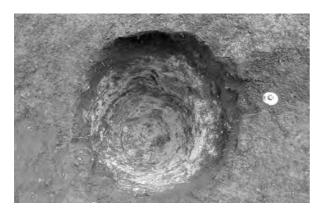
2 SB36 P2·3完掘(北西→)



3 SB36 P4土層断面(北→)



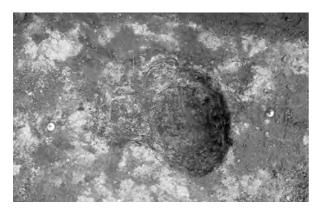
SB36 P4完掘(北→)



5 SB36 P5完掘(南→)



6 SB36 P6 • 7土層断面(南→)



6 SB36 P6·7完掘(南→)



8 SB36 SN1検出(南西→)



1 SB36 SN1土層断面(南→)



2 SB36 SN1新段階検出(南→)



3 SB36 SN1新段階完掘(南東→)



4 SB36 SN1中段階検出(南東→)



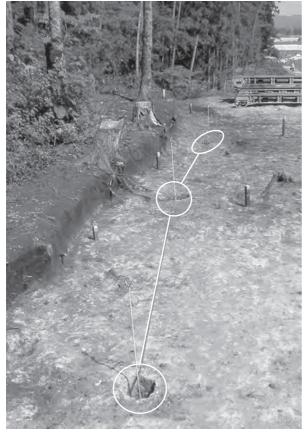
5 SB36 SN1中段階完掘(東→)



6 SB36 SN1旧段階土層断面(南→)



7 SB36 SN1旧段階完掘(南→)



1 SA37完掘(南→)



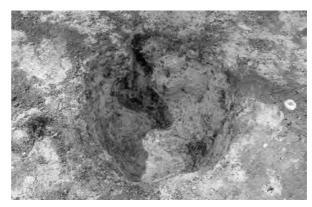
4 SA37 P2土層断面(南西→)



6 SA37 P3土層断面(南西→)



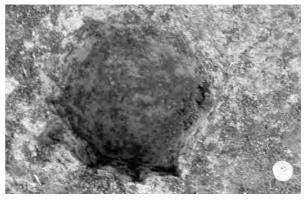
2 SA37 P1断面(南西→)



3 SA37 P1完掘(南西→)



5 SA37 P2完掘(南西→)



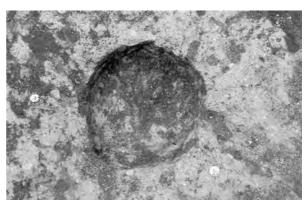
7 SA37 P3完掘(南西→)



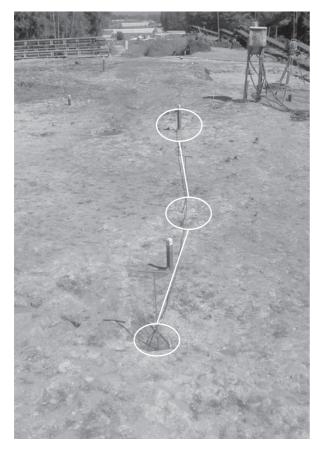
1 SA38完掘(南→)



2 SA37 P1土層断面(南西→)



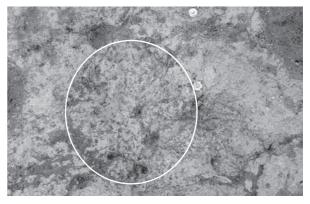
3 SA37 P1完掘(南西→)



4 SA39完掘(南→)



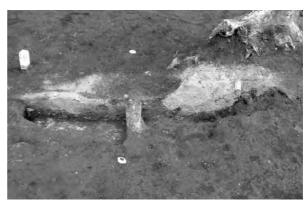
5 SA39 P1土層断面(西→)



6 SA39 P2完掘(東→)



1 SN4完掘(東→)



2 SN4土層断面(北→)



3 SN4土層断面(東→)



4 SN4検出(北→)



5 SN5完掘(東→)



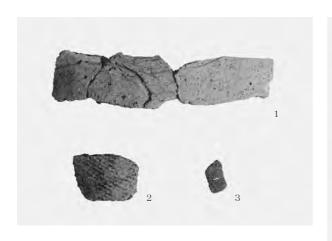
6 SN5土層断面(北→)



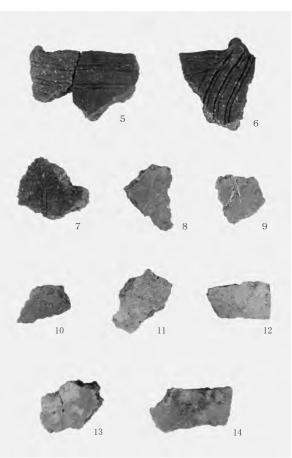
7 SN5被熱面検出(北西→)

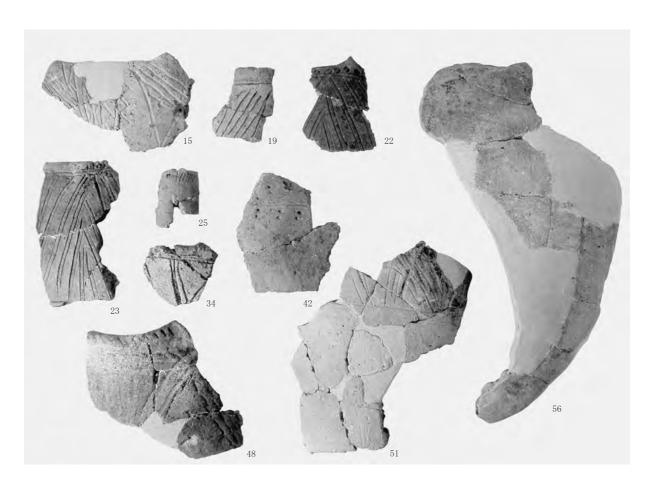


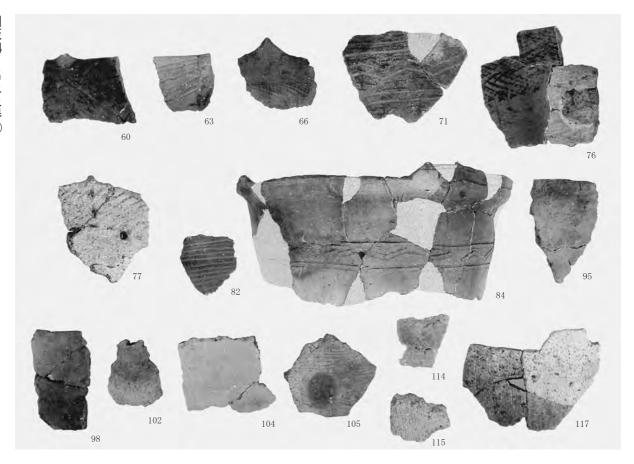
8 SN5検出(北西→)

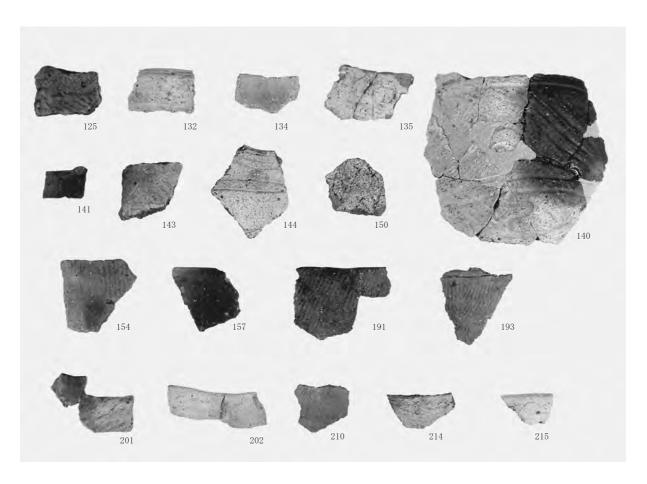


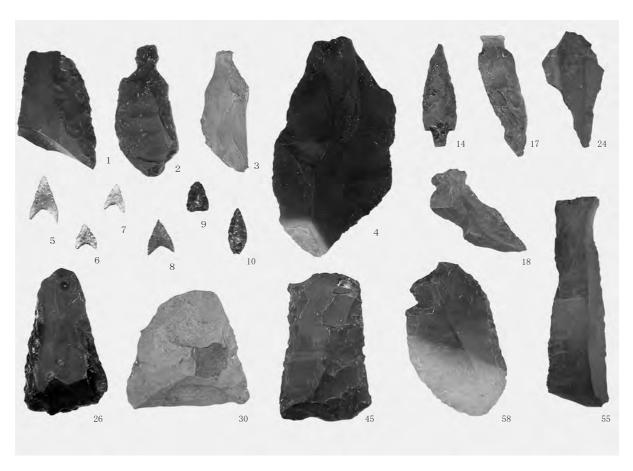


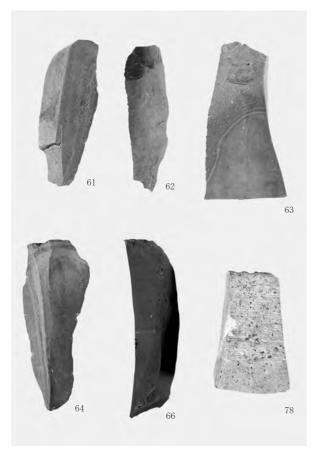


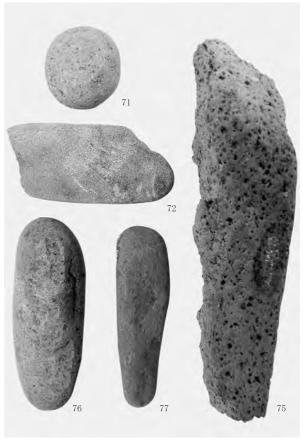


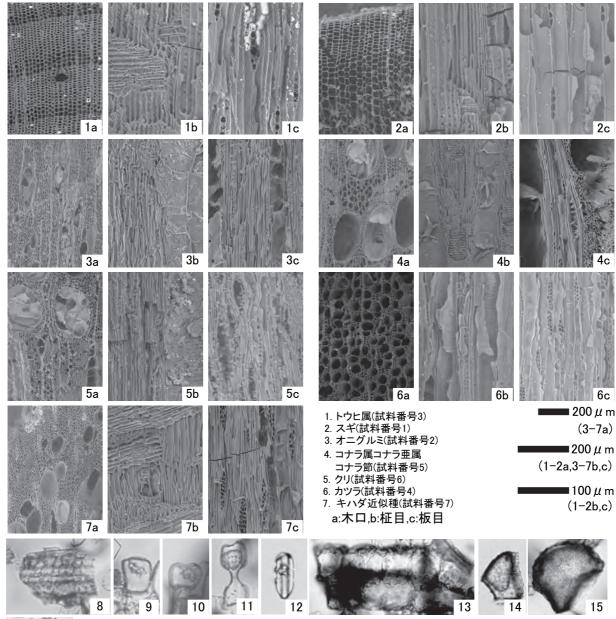














- . イネ属短細胞列(試料番号8)
- 9. クマザサ属短細胞珪酸体(試料番号8)
- 10.ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号8)
- 11.ススキ属短細胞珪酸体(試料番号8) 12.イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号8)



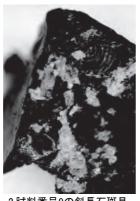
- 13. イネ属機動細胞列(試料番号8) 14. クマザサ属機動細胞珪酸体(試料番号8) 15. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号8)
- 16. ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料番号8)



 $50 \,\mu$  m (9–11)



1.試料番号9の外観



2.試料番号9の斜長石斑晶 (白色部分)



3.試料番号10の外観



4.試料番号10の表面

## 報告書抄録

ふりがた	x L to	しものにいせき															
書名	五 下野 I	下野Ⅱ遺跡															
副書名	3 一般国	一般国道7号鷹巣大館道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 II															
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書																
シリーズ番号	等号 第450集																
編著者名	山田祐子 宇田川浩一 巴亜子																
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター																
所 在 均	〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地 TEL 0187-69-3331																
発行機関	秋田県教育委員会																
所 在 地 〒010-8580 秋田県秋田市山王3丁目1番1号 TEL 018-860-5193																	
発行年月日	F月日 西暦2010年3月																
ふりがな	ふりが	な :	コード		東経	調査期間	調査面積	調査原因									
所収遺跡名		地市町村	遺跡番号	0 / //	0 / //		m²										
Lton に いせき 下野Ⅱ遺跡	かきたけんおおだ 秋田県大竹			40°	140°	20080613		一般国道7号									
	し もとみやあざ 市本宮字	下 05404	204-4-164	14'	30'	~	2, 250 m <sup>2</sup>	鷹巣大館道路									
	モ野107-1	1		36"	31"	31" 20080926		建設事業に係									
								る埋蔵文化財									
								事前発掘調査									
所収遺跡名	種別	主な時代	持代 主な遺構			主な遺物	物特記事項										
下野Ⅱ遺跡	墓域	縄文時代	集石遺構 フラスコ状土坑 土坑 道路状遺構		9基	縄文土器	土器 土坑は墓と推定され、数 器 種に分類できる。中世の										
					1基	弥生土器											
					10基	土師器											
		平安			1条	石器											
	集落跡		竪穴状建物跡		2軒	砥石	遺構・掘立柱建物跡が近										
			掘立柱建物跡		3棟	接して発見された。		見された。									
			柱穴列		4列		遺物は縄文時代早期~										
			かまど状遺構		2基		晩期・弥生時代・平安時										
			柱穴様ピット		37基	代と幅広い時期のものが		い時期のものが									
							あるが、フ	大半は縄文時代									
						早期に属する。											
集石遺構と土坑は、遺物の出土状況から墓であり縄文時代後期に属すると推定される。 要 約 世の遺構は、互いの位置関係から一つの生活単位となる建物の構成を読み取ることができ 遺物の大半を占めるのは、縄文時代早期中葉から後葉の土器である。																	

## 秋田県文化財調査報告書第450集

## 下野Ⅱ遺跡

-一般国道7号鷹巣大館道路建設事業に係る 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-

印刷·発行 平成22年3月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 大仙市払田字牛嶋20番地 電話(0187)69-3331 FAX(0187)69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山王3丁目1番1号

電話(018)860-5193

印 刷 株式会社 仙北印刷所